

富山県文化振興財団  
埋蔵文化財発掘調査報告第31集

# 下老子笛川遺跡発掘調査報告

—能越自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘報告V—

第四分冊  
古代以降編



下老子笛川遺跡発掘調査報告

第四分冊  
古代以降編

富山県文化振興財団  
埋蔵文化財発掘調査報告第三集

二〇〇六年

財團法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所

2006年



A5地区 梵鐘鋳型（近世）



A5地区 土台建物 SB13（東から）



# 下老子笛川遺跡発掘調査報告

— 能越自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘報告V —

第四分冊  
古代以降編

2006年

財團法人 富山県文化振興財團  
埋蔵文化財調査事務所



# 目 次

第Ⅶ章 古代の遺構・遺物 .....	1
1 古代の概要 .....	1
2 A・B地区 .....	1
(1) B地区の遺構と遺物 .....	1
A 溝・自然流路 .....	1
(2) A地区的包含層出土遺物 .....	7
A 土器 .....	7
B 土製品 .....	7
(3) B地区的包含層出土遺物 .....	9
A 土器 .....	9
B 土製品 .....	9
3 C・D・E地区 .....	10
(1) C2・D2地区の遺構と遺物 .....	10
A 堪穴建物 .....	10
B 溝 .....	14
(2) 包含層出土遺物 .....	14
A 土器 .....	14
B 土製品 .....	14
第Ⅷ章 中世～近代の遺構・遺物 .....	21
1 中世～近代の概要 .....	21
2 A地区 .....	25
(1) 遺構と遺物 .....	25
A 掘立柱建物 .....	25
B 土台建物 .....	37
C 井戸 .....	53
D 土坑 .....	59
E 溝・自然流路 .....	90
F 崩 .....	113
(2) 包含層出土遺物 .....	117
A 土器・陶磁器 .....	117
B 木製品 .....	124
C 石製品 .....	124
D 金属製品 .....	127
3 B地区 .....	130
(1) 遺構と遺物 .....	130
A 掘立柱建物 .....	130
B 溝 .....	130
(2) 包含層出土遺物 .....	140
A 土器・陶磁器 .....	140
B 土製品 .....	145
C 木製品 .....	146
D 石製品 .....	150
E 金属製品 .....	150
4 C・D・E地区 .....	154
(1) 遺構と遺物 .....	154
A 構 .....	154
B 溝・自然流路 .....	154
(2) 包含層出土遺物 .....	163
A 土器・陶磁器 .....	163
B 土製品 .....	163
C 木製品 .....	165
D 石製品 .....	167
E 金属製品 .....	167
参考文献 .....	168

## 表目次

第1表 古代 堪穴建物一覧	17
第2表 古代 遺構一覧	17
第3表 古代 土器・土製品一覧	18
第4表 古代 木製品一覧	20
第5表 中世～近代 挖立柱建物一覧	169
第6表 中世～近代 挖立柱建物柱穴一覧	169
第7表 中世～近代 土台建物間連遺構一覧	170
第8表 中世～近代 桁一覧	172
第9表 中世～近代 井戸一覧	172
第10表 中世～近代 土坑一覧	172
第11表 中世～近代 溝・自然流路・畠一覧	173
第12表 中世～近代 土器・陶磁器・土製品一覧	177
第13表 中世～近代 梵鐘鋳型一覧	184
第14表 中世～近代 木製品一覧	185
第15表 中世～近代 石製品一覧	187
第16表 中世～近代 金属製品一覧	188
第17表 中世～近代 銭貨一覧	189

## 卷首図版目次

A5地区 梵鐘鋳型
A5地区 土台建物 S B13

## 写真図版目次

図版1～6	古代 遺構
図版7～15	古代 遺物
図版16～32	中世～近代 A地区遺構
図版33～75	中世～近代 A地区遺物
図版76～77	中世～近代 B地区遺構
図版78～93	中世～近代 B地区遺物
図版94～96	中世～近代 C・D・E地区遺構
図版97～104	中世～近代 C・D・E地区遺物

# 第VII章 古代の遺構・遺物

## 1 古代の概要

古代の遺物はほぼ全地区で出土しているが、遺構を検出したのは大きく分けて3箇所（第1図）である。遺跡の中央にあたるB1～4地区では、南北に流れる自然流路1条とそれに沿うまたはそれから派生する溝を数条確認した。遺構の時期は概ね8世紀である。また、遺跡の北側のC2地区では方形に巡る溝1条、D2地区では竪穴建物6棟と円形に巡る溝1条を確認した。遺構の時期は概ね9世紀である。このように古代の遺構は、遺跡全体では非常に少なく限られた場所にかたまっていることがわかる。ただし、庄川扇状地では古代の遺構は数少なく、しかも9世紀の竪穴建物の発見は今のところ類例がなく、今後この地域の古代史を考える上で貴重な資料と言えよう。

## 2 A・B地区

A・B地区では、B1～4地区で古代の遺構を確認した。

### （1）B地区の遺構と遺物

古代の遺構には溝・自然流路がある。

#### A 溝・自然流路

2201号自然流路（SD2201、第2～5図、図版2・7～10・13）

B2地区の南西隅からB3地区の中央へ続き、蛇行してB4地区の北西隅まで流れている。幅12m、深さ86cmを測る。中・近世の遺物が少量出土しているが上層からの混入と考えられ、古墳時代中期の水田耕作時にも利用されていた可能性があるが、主に8～9世紀にかけて流れていたと考えられる。埋土は、中世が黒色シルトの下に灰白色粘土質ローム、古代が上層に暗灰黄色粘土質ローム、最下層に黄褐色粘土質ロームが堆積している。主な出土遺物には、須恵器（12～26）、土師器（27）、木製品（28～36）があり、その他、弥生土器・中世土師器・珠洲・越前・中国製青磁・瓦器・肥前磁器・錢貨が出土している。

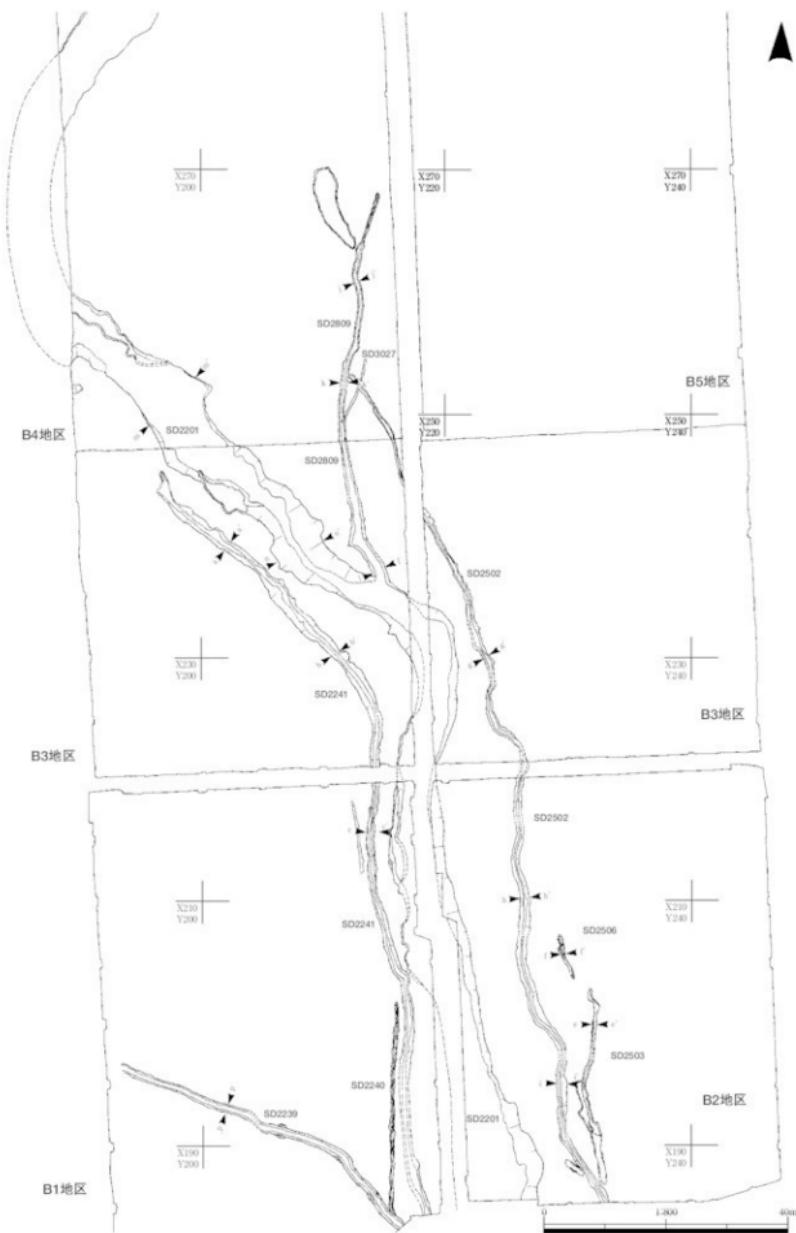
12は転用硯の杯蓋。口径15.7cmを測り、内外面ともにロクロナデを施す。内面に墨痕がある。8世紀代のもの。13は須恵器杯A蓋。口径12cmを測り、内外面ともにロクロナデを施し、頂部外面にヘラ削りを施す。9世紀代のもの。14～16は杯B身。口径は14が11.2cm、15は13.8cmで、内外面ともにロクロナデを施す。高台内側はヘラ切りである。14以外の高台は外側に踏ん張る。9世紀代のもの。17～26は杯A身。口径は21のみ13.7cmで、その他は11～12cm。内外面ともにロクロナデを施し、底部は回転ヘラ切りである。23～26は墨書き器で、体部側面または底部外面に「鳥」と記されている。8世紀代のもの。

27は土師器の長胴甕。口縁部はくの字状に外反し、体部はゆるくふくらみ、底部は丸い。調整は口縁部が内外面ともにロクロナデ、体部外面は上位にカキメ、中位はヘラケズリ、内面はハケメで、体部外面の下位はタタキ、内面には当て具痕がみられた。8世紀第4四半期のもの。

28～31は容器底板で、28以外は半分欠損している。31の表面にはススが付着して黒色になっている。32は箸、33は箱の側板、34～36は用途不明の部材である。

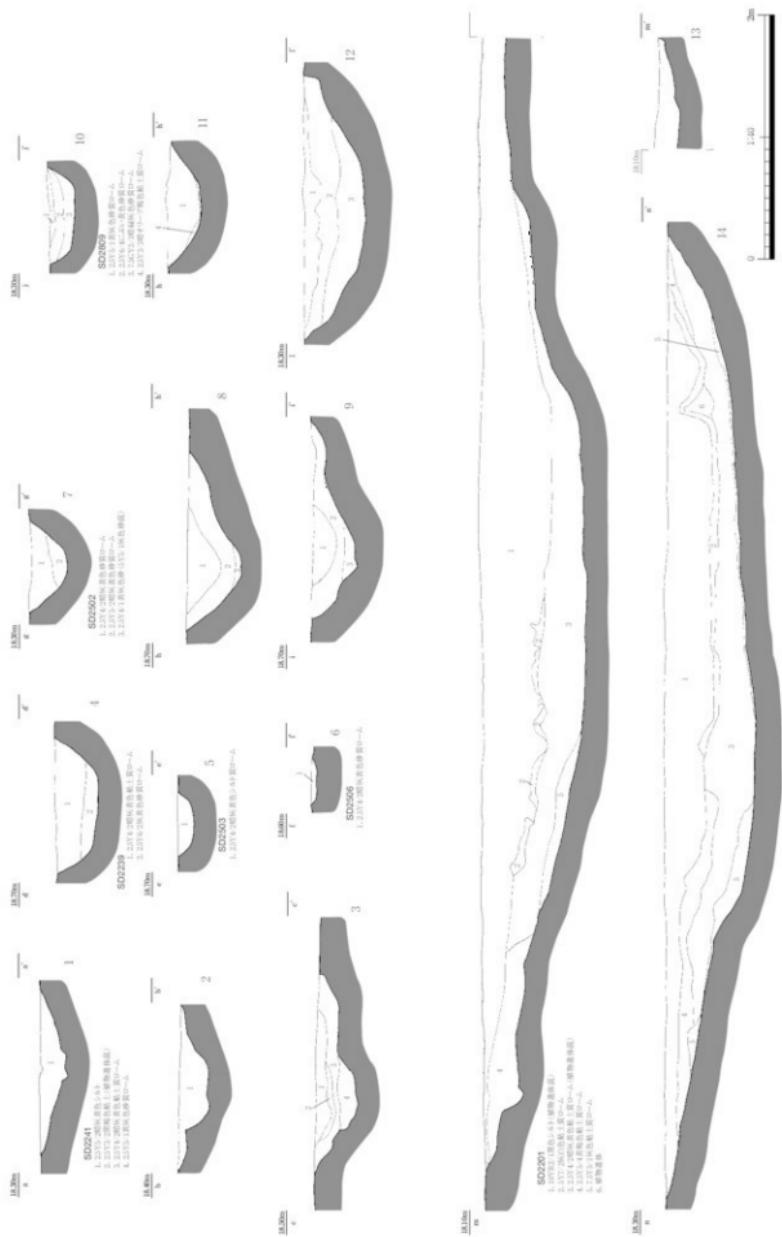


第1図 古代遺構位置図 (1/800・1/1600・1/8000)



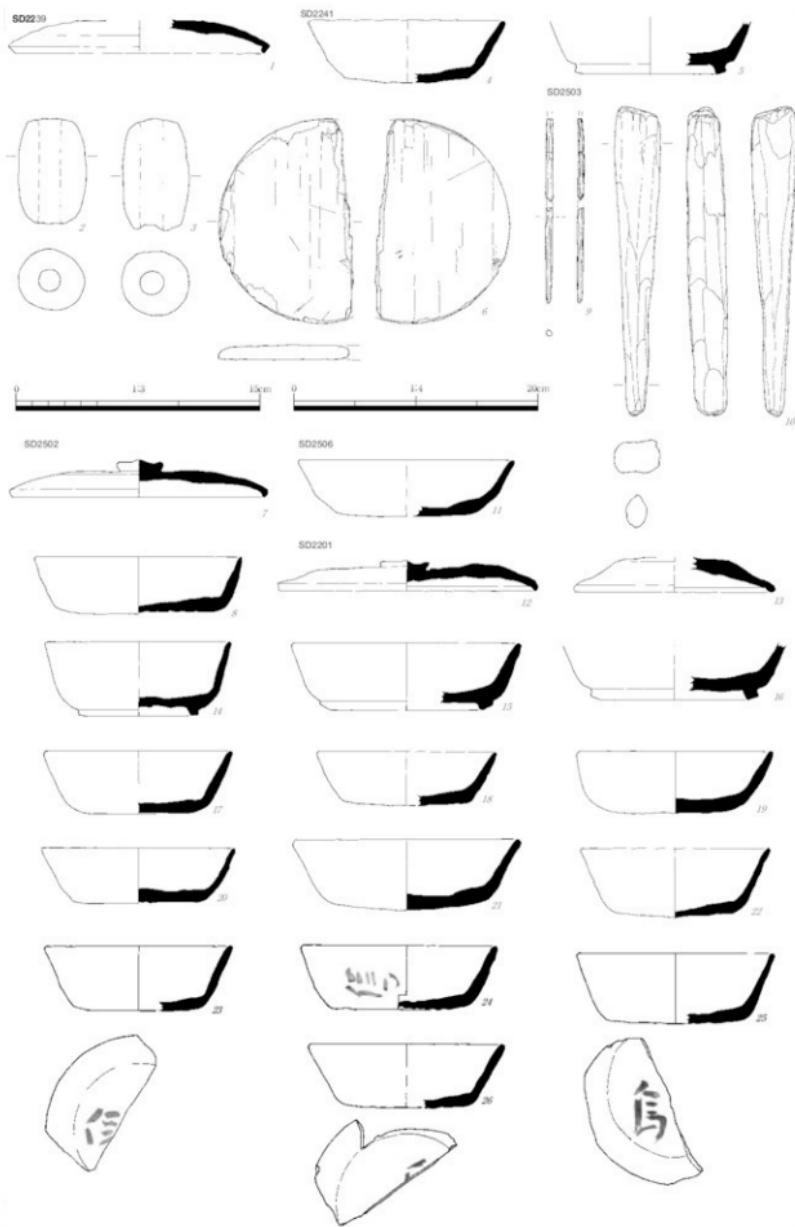
第2図 遺構実測図 (1/800)

B地区 SD2201 - SD2239, SD2241, SD2502, SD2503, SD2506, SD2809



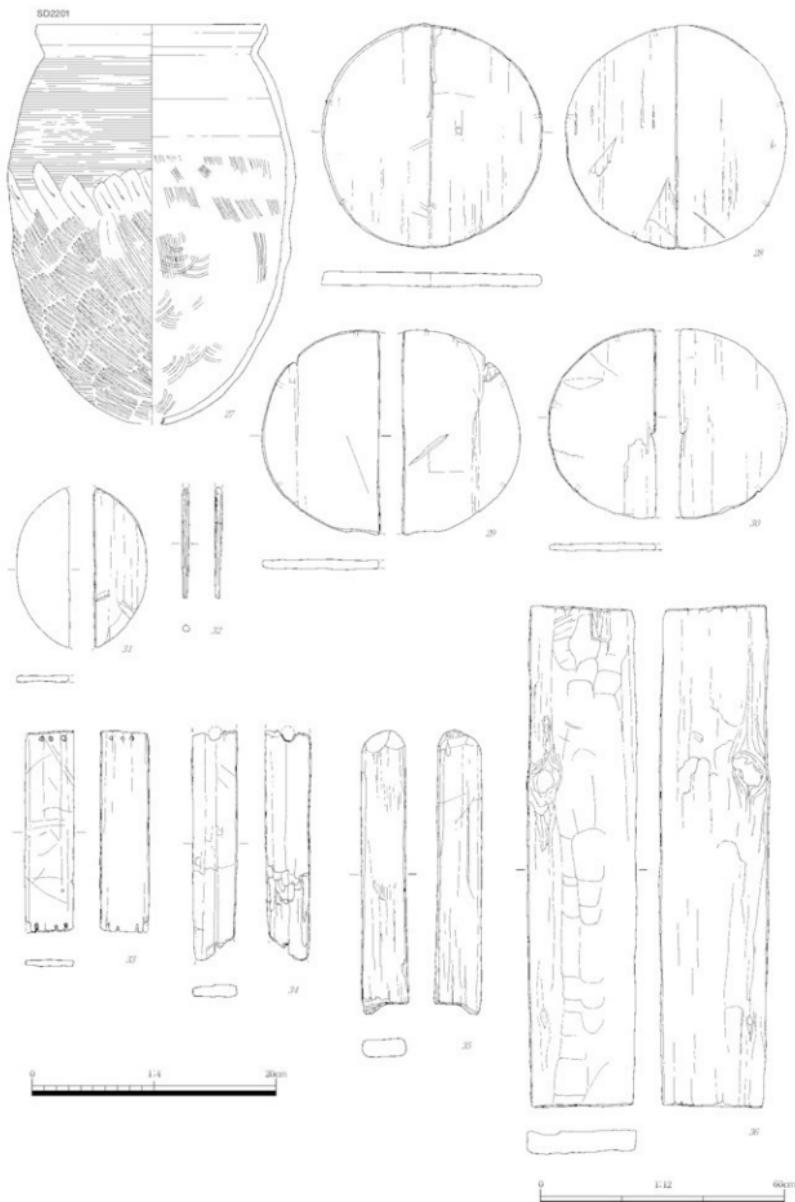
第3図 遺構実測図 (1/40)

B地区 1~3. S D2241 4. S D2239 5. S D2503 6. S D2506 7~9. S D2502 10~12. S D2809  
13~14. S D2201



第4図 遺物実測図 (1~5・7・8・11~26 1/3, 6・9・10 1/4)

B地区 SD2239(1~3) SD2241(4~6) SD2502(7~8) SD2503(9~10) SD2506(11)  
SD2201(12~26)



第5図 遺物実測図 (27-35 1/4, 36 1/12)  
B地区 SD2201

## 2239号溝 (S D2239, 第2~4図, 図版3・7・12)

B1地区を西から南東へ流れ、幅1.46m、深さ44cmを測る。埋土は灰黄色砂質ロームの上に暗灰黄色粘土質ロームで、遺物には須恵器(1)・管状土錘(2・3)がある。

1は須恵器杯B蓋。口径15.2cmを測り、内外面ともにロクロナデを施し、頂部外面にヘラ削り調整を施す。8世紀代のもの。

## 2241号溝 (S D2241, 第2~4図, 図版3・7・13)

B3地区からB1地区にかけて北西から南へと流れている。幅2.19m、深さ約45cmを測る。埋土は上層が暗灰黄色シルト、最下層は黄灰色砂質ロームで、遺物は須恵器(4・5)と木製品(6)がある。

4は須恵器杯A身。口径11.9cmを測り、内外面ともロクロナデである。底部はヘラ切り後ロクロナデを施す。5は杯B身。内外面ともロクロナデで底部は回転ヘラ削りである。8世紀代のもの。6は容器底板で、長さが16.7cm、およそ半分が欠損する。

## 2502号溝 (S D2502, 第2~4図, 図版3・7)

B4地区からB2・3地区にかけて北西から南へと流れている。幅1.57m、深さ約43cmを測る。埋土は上層に暗灰黄色砂質ローム、最下層は黄灰色砂で、遺物には須恵器(7・8)・木製品がある。

7は須恵器杯B蓋。口径15.4cmを測り、内外面ともにロクロナデを施し、頂部外面にヘラ削りを施す。8は杯A身。口径12.4cmを測り、内外面ともにロクロナデである。底部はヘラ切り後、板の上に置いた痕がみられた。口縁端部内面に重ね焼き痕がある。8世紀代のもの。

## 2503号溝 (S D2503, 第2~4図, 図版13)

B2地区の南側半分を北から南へと流れている。幅54cm、深さ13cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト質ロームで、遺物には土師器・木製品の箸(9)、用途不明の部材(10)がある。

## 2506号溝 (S D2506, 第2~4図, 図版7)

B2地区のS D2503の北側を北から南へと流れている。幅47cm、深さ約4cmの浅い溝である。埋土は暗灰黄色砂質ロームで、S D2503とつながる可能性がある。遺物は須恵器がある。

11は須恵器杯A身。口径13cmを測り、内外面ともにロクロナデ調整で、底部は回転ヘラ切りである。口縁端部外面に重ね焼き痕がみられる。

## (2) A地区の包含層出土遺物

A地区の遺物包含層からは、須恵器・土師器・土製品が出土している。

## A 土器

## 須恵器 (第6図, 図版11)

37~39は杯A身。37は口径14.9cm、38・39は12~13cmを測る。内外面ともにロクロナデを施し、底部はヘラ切り後ナデている。8世紀代のもの。

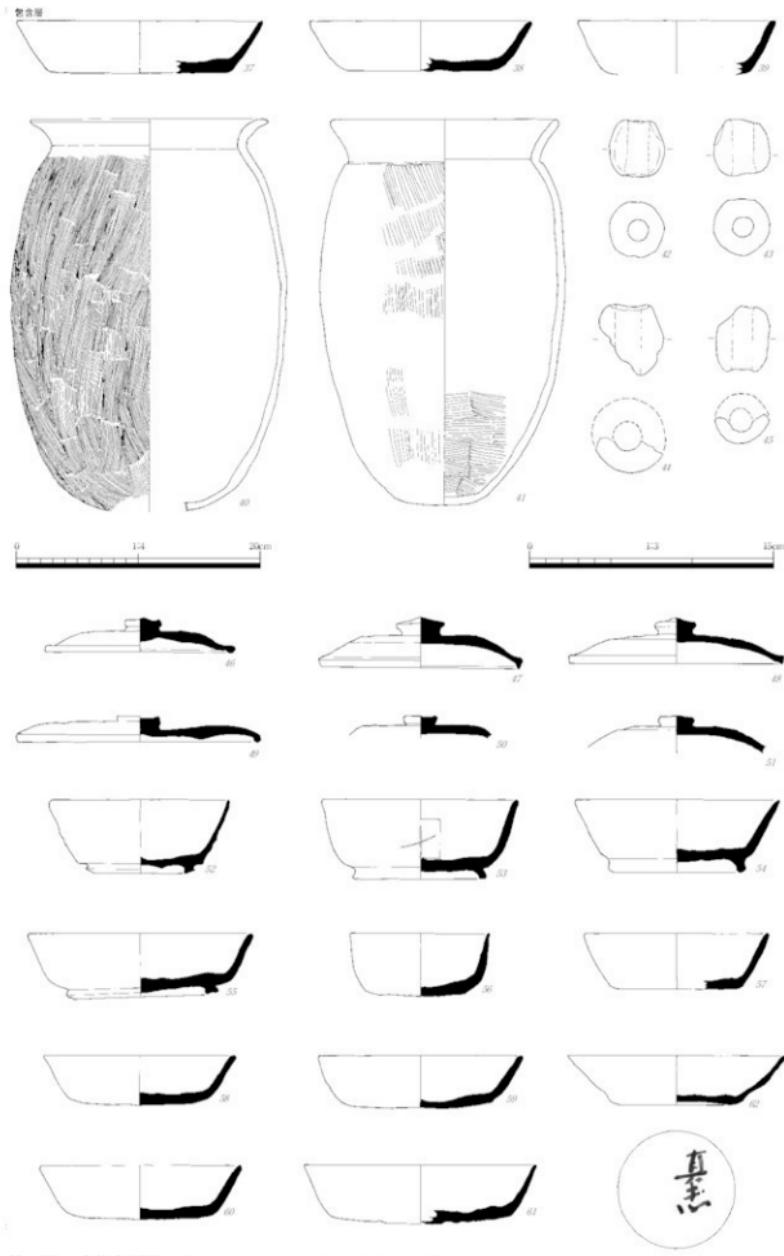
## 土師器 (第6図, 図版11)

40・41は長胴甕。口径は40が19cm、41が18cm。底部は丸底で、40は口縁が外方に屈折、41はくの字状に外反している。調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面はハケメで、外面は縦方向、41のみ内面下部に横方向に施されている。40は8世紀第2~第3四半期、41は9世紀第2四半期のもの。

## B 土製品

## 土錘 (第6図, 図版12)

42~45は管状土錘で、孔径は約1.2cmである。



第6図 遺物実測図 (37~39・42~62 1/3, 40~41 1/4)

A·B地区 包含層

A 7地区(37~42・44~45) A 8地区(43) B 1地区(50~61・62) B 2地区(48~51・58~60)

B 3地区(47~49・52~56・57) B 4地区(53) B 5地区(54) B 6地区(46~59) B 7地区(55)

## (3) B地区の包含層出土遺物

## A 土器

## 須恵器 (第6・7図, 図版9・10)

46~51は杯B蓋。口径は、46が11.3cm, 47は12cm, 48は13cm, 49は14.4cmを測る。47・48・50・51は天井部がヘラ切りで、口縁端部から内面にかけてロクロナデを施している。46・49は外外面ともにロクロナデである。8世紀代のもの。52~55は杯B身。口径は52が10.8cm, 53・54が12cm, 55が13.6cmである。内外面ともにロクロナデを施し、高台内側はヘラ切りである。53は刻書土器で、胴部外面に「+」のヘラ記号がある。52・54は8世紀代のもので、55は9世紀代のもの。56~62は杯A身。口径は56が8.4cm, 57~60が11~12cm, 61・62が13~14cmで、62のみ底径が小さく体部の外傾度が大きい。内外面ともにロクロナデを施し、ヘラ切りした後、底部は56が回転ヘラ削り、58は布压痕があり、59はナデている。58・60の口縁端部外面には重ね焼き痕がある。62は墨書き土器で、底部内面に「真志」と記してある。56~61は8世紀代のもので、62は9世紀代のもの。63は横瓶。口径10.5cmを測り、体部はやや歪んでいる。64は台付の壺か鉢である。内外面ともにロクロナデ、底部はヘラ切りが施され、底部外面に「×」のヘラ記号がある。

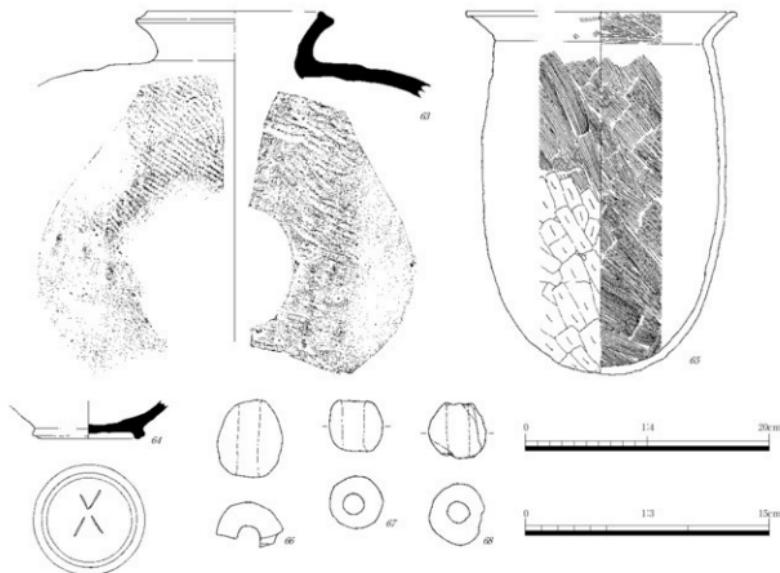
## 土師器 (第7図, 図版10)

65は長胴甕。口径は22cm。底部は丸底で、口縁はくの字状に外反している。調整は内面はハケ。外面は口縁の一部に指の爪の圧痕、胴部上半分はハケ、下半分はケズリである。

## B 土製品

## 土錘 (第7図, 図版12)

66~68は長さと幅がほぼ等しく、胴が膨らむ管状土錘。孔径は1.3~1.5cm。



第7図 遺物実測図 (63・64・66~68 1/3, 65 1/4)

B地区 包含層  
B 1地区(63) B 2地区(64) B 3地区(66) B 4地区(65) B 5地区(67) B 6地区(68)

### 3 C・D・E 地区

C・D・E 地区では、C 2・D 2 地区で古代の遺構を確認した。

#### (1) C 2・D 2 地区の遺構と遺物

古代の遺構には、C 2 地区に方形に巡る溝 1 条、D 2 地区に竪穴建物 6 棟、円形に巡る溝 1 条がある。ただし、D 2 地区では竪穴建物を中心とする集落が広がると考えられるものの、後世の削平が著しく、遺構の上部はほとんど残っていなかった。このため、竪穴建物の付属施設等は不明な部分が多い。特に調査区東側では、削平が古代面にまで及んでいるものとみられ、遺構の広がりは確認できなかった。

##### A 竪穴建物

###### 1 号竪穴建物 (S I 1, 第 8・9 図, 図版 5・6・15)

D 2 地区のほぼ中央に集中している竪穴建物群の中に位置する。規模は 5.25m × 3.68m 以上を測る方形の建物で、最大幅 32cm の壁溝が巡る。S I 5・6 と同じ方位で、削平により東部分は消失している。僅かに残る埋土は、焼土と炭が混じった黒褐色シルト。北辺にはカマドが設けられ、燃焼部掘形の片側に、袖部とみられる高まりが若干残る。カマドは燃焼部が 64cm × 52cm、深さ 9cm で、煙道とみられる長さ 68cm の溝がつく。カマドの埋土は黒褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、暗灰黄色シルト質ローム、黒褐色粘土質ロームからなり、少量の焼土や炭が混じる。

遺物はカマドおよびその付近で土師器が僅かに出土している。69 は甕で、口縁端部を巻き込み内側に段が付く。70・71 は椀。71 は内外面にススが付着。出土遺物から建物の時期は 9 世紀後半と考える。

###### 2 号竪穴建物 (S I 2, 第 8・9 図, 図版 5・6)

D 2 地区 S I 1 に切られる。壁溝の一部を確認したのみで規模は不明である。埋土からみて S I 1 との時期差は大きくないと考えられる。

###### 3 号竪穴建物 (S I 3, 第 8・9 図, 図版 5・6)

D 2 地区 S I 1 の北に隣接する、規模 3.38m × 2.4m 以上、最大幅 36cm の壁溝が巡る方形の建物である。方位は S I 2 に近い。東部分は擾乱により消失、埋土も僅かに残るのみである。西辺にはカマドとみられる施設を確認した。燃焼部の最大幅 1.04m、煙道を含めた長さ 1.4m、深さ 10cm を測り、埋土は黒褐色シルト、暗灰黄色シルト質ロームからなり、ごく少量の炭が混じる。また煙道の先端で重複する S K4749 はカマドに付属していた可能性がある。

遺物は小片のため図示しないが、土師器が出土しており、建物の時期は 9 世紀後半と考えられる。

###### 4 号竪穴建物 (S I 4, 第 8・9 図, 図版 5・6)

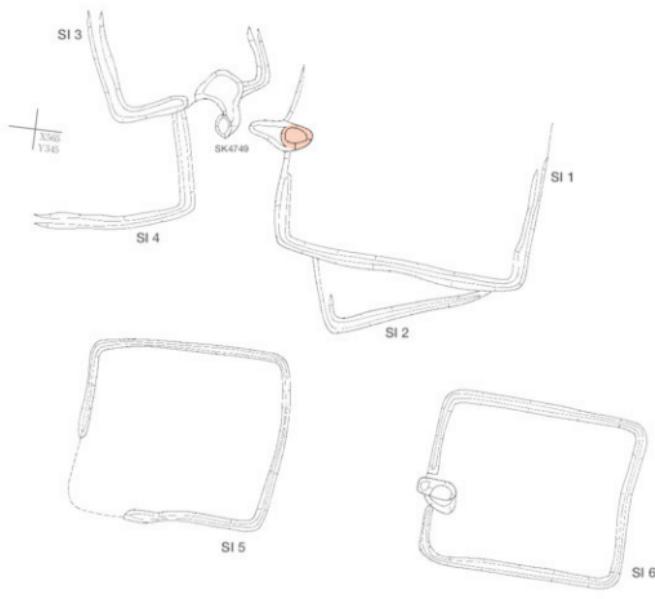
D 2 地区 S I 3 に重複しており、それより古い。方位が類似する S I 2 と同時期の可能性がある。壁溝の一部を確認したのみで規模などは不明である。

遺物は小片のため図示しないが、土師器が出土しており、建物の時期は 9 世紀後半と考えられる。

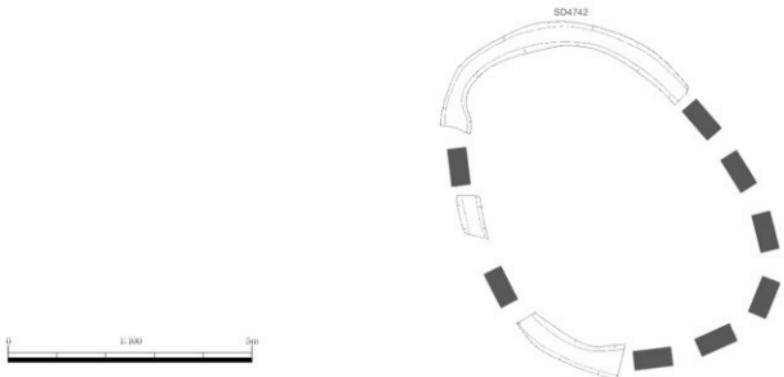
###### 5 号竪穴建物 (S I 5, 第 8・10 図, 図版 5・6)

D 2 地区 S I 4 の西に位置する、4.2m × 3.62m、最大幅 20cm の壁溝が巡る方形の建物である。削平のため遺構の上部は消失しており、壁溝のみが残っていた。S I 1・6 と同じ方位を向く。

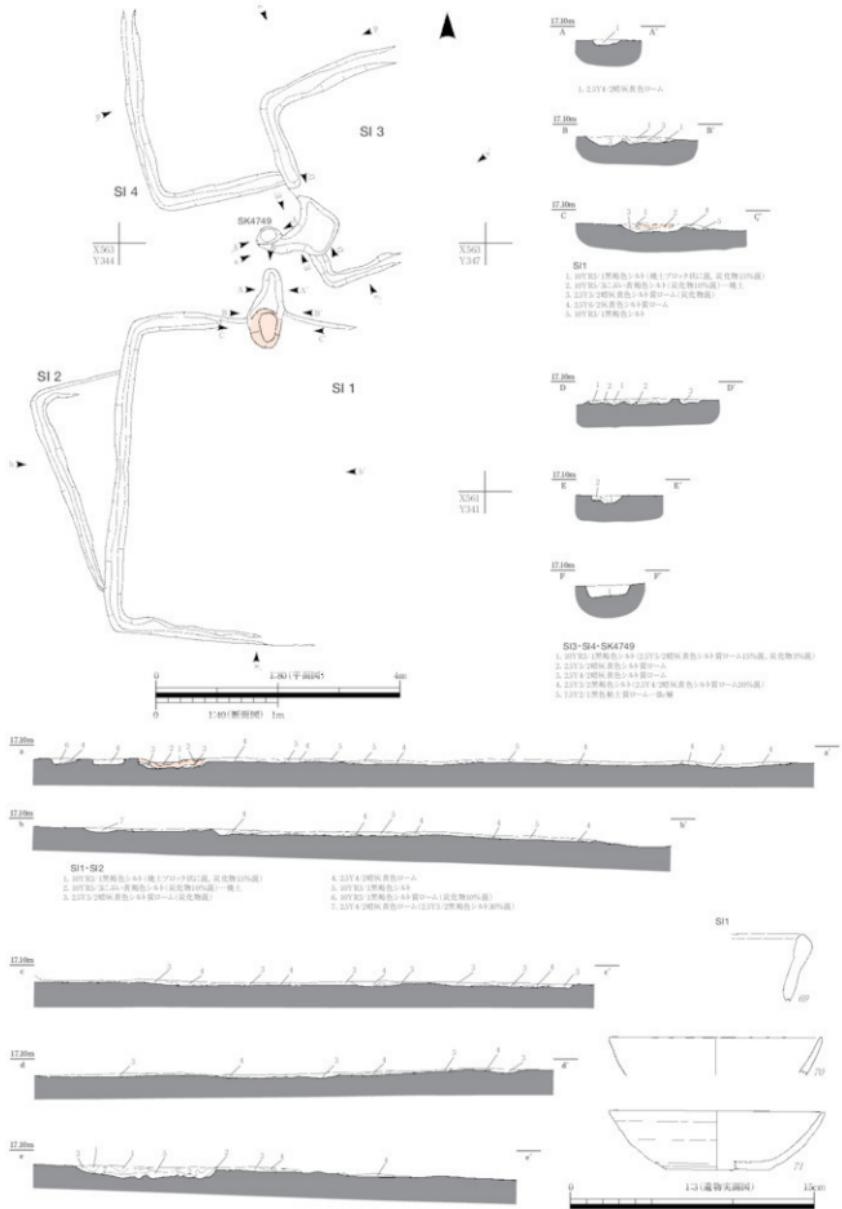
遺物は小片のため図示しないが、土師器が出土しており、建物の時期は 9 世紀後半と考えられる。



X366  
Y349

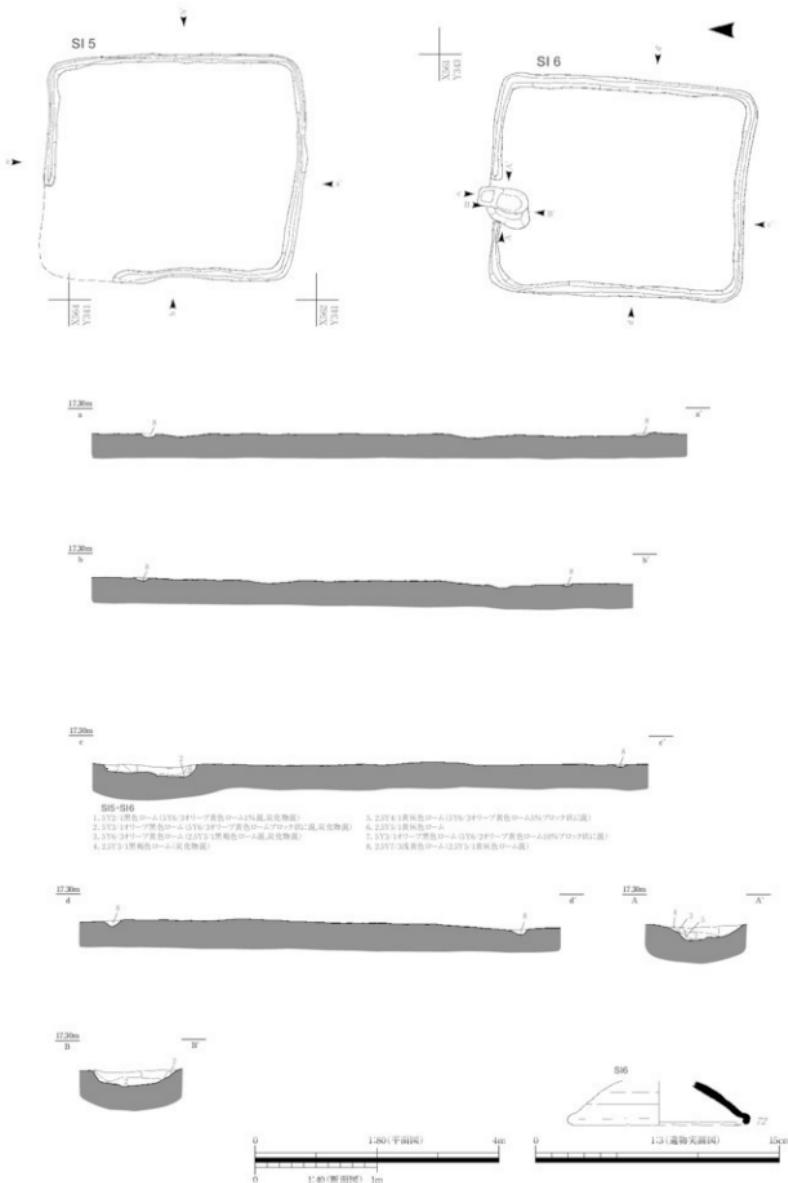


第8図 遺構実測図 (1/100)  
D2地区 SI 1~SI 6・SK4749・SD4742



第9図 遺構・遺物実測図 (1/40・1/80, 1/3)

D 2 地区 S I 1 (69~71) ~ S I 4 · S K4749



第10図 遺構・遺物実測図 (1/40, 1/80, 1/3)  
D 2 地区 SI 5, SI 6 (72)

## 6号堅穴建物（S I 6, 第8・10図, 図版5・6・14）

D 2 地区 S I 5 の南に位置する。4.15m×3.56m, 最大幅22cmの壁溝が巡る方形の建物である。S I 1・5と同じ方位を向く。北辺にはカマドがある。カマドは掘形の切り合いから1回の作り替えがあったとみられるが、埋土から判断して大きな時期差はないと考えられる。カマドの埋土は黒色ローム、オリーブ黒色ローム、オリーブ黄色ローム、黒褐色ローム、黄褐色ロームからなり、少量の炭が混じる。

遺物は72の須恵器杯蓋の他、小片のため図示しないが、土師器が出土しており、建物の時期は9世紀後半と考えられる。

## B 溝

## 4202号溝（S D4202, 第11図, 図版4・14・15）

C 2 地区の北西に位置し、最大幅68cm、深さ13cmを測る溝である。所々で途切れながら方形に巡るが、さらに北方向と西方向に延びていたと考えられる。埋土は黒褐色シルトの単層で浅い。出土した遺物の時期から古代としたが、C 地区に単独で存在しており、遺物は小片がわずかに出土するのみであることからその性格は不明である。

遺物は土師器・須恵器が出土している。73は須恵器の瓶。口縁部のみの破片で、9世紀前半か。74は土師器の甕。くの字状口縁で、内面にカキメが残る。8世紀後半か。

## 4742号溝（S D4742, 第8・11図, 図版6）

D 2 地区の中央から南西によりに位置し、中・近世の溝に切られる。幅44cmの溝が環状に巡るもので、その長径は約7.5mを測る。後世の削平による影響から、溝の深さは6cmのみ測る。こうした環状に巡る溝は弥生時代以降、堅穴建物に共伴する例がみられ、その機能については平地住居、作業小屋、納屋などが推定されている。出土遺物がなく時期決定要素が少ないが、堅穴建物に伴って検出されたことから同時期の遺構と推定される。

## (2) 包含層出土遺物

## A 土器

## 須恵器（第12図, 図版14）

75・76は杯蓋。75は口縁端部が丸くなるもので、9世紀後半。76は口縁端部が折れて三角形になるもので、9世紀前半。77・82は杯身。77・78は杯A。79・80は杯Bで、底部回転ヘラ切り。81は底部を欠損しているが、80と同様なものであろう。82は皿状のもの。時期は概ね8～9世紀。

## 土師器（第12図, 図版15）

83～85は杯で、底部回転糸切り。83・84は内外面赤彩。85は器面が荒れているため明確ではないが、内面ミガキ調整と思われる。86～92・96・97は甕。86～92は中・大型のもので、86は口縁端部を面取りし、沈線を施す。87～92は口縁端部を内側に折り返し、丸くするタイプ。87は外面に深い沈線を施す。96は小型で、内外面にスス付着。97は底部で外面ケズリ、内面にスス付着。93～95は鍋で、甕同様に口縁端部を内側に折り返し、丸くするタイプ。以上の土師器の時期は、86が8世紀代の他は、概ね堅穴建物とほぼ同時期の9世紀後半～10世紀前半になるであろう<sup>(注1)</sup>。

## B 土製品

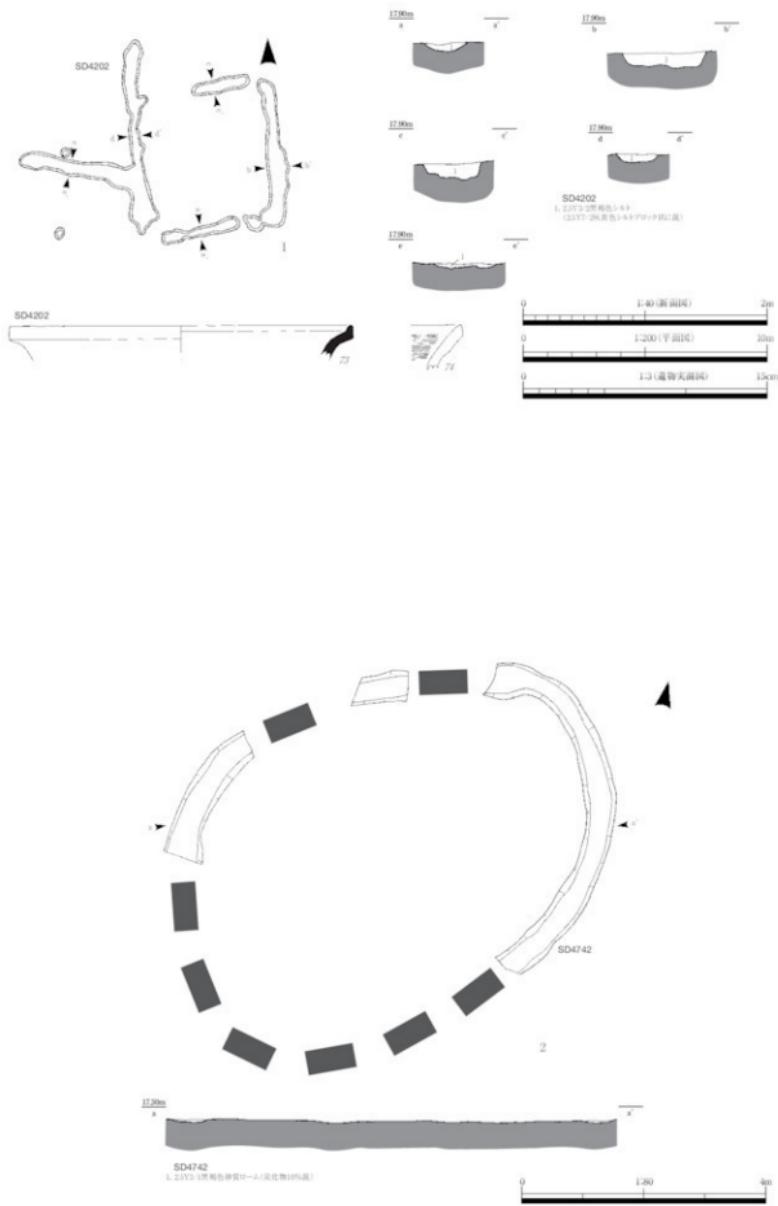
## 土錐（第12図）

98は管状土錐で、孔径1.2cm。

（細辻・町田賢一・町田尚美）

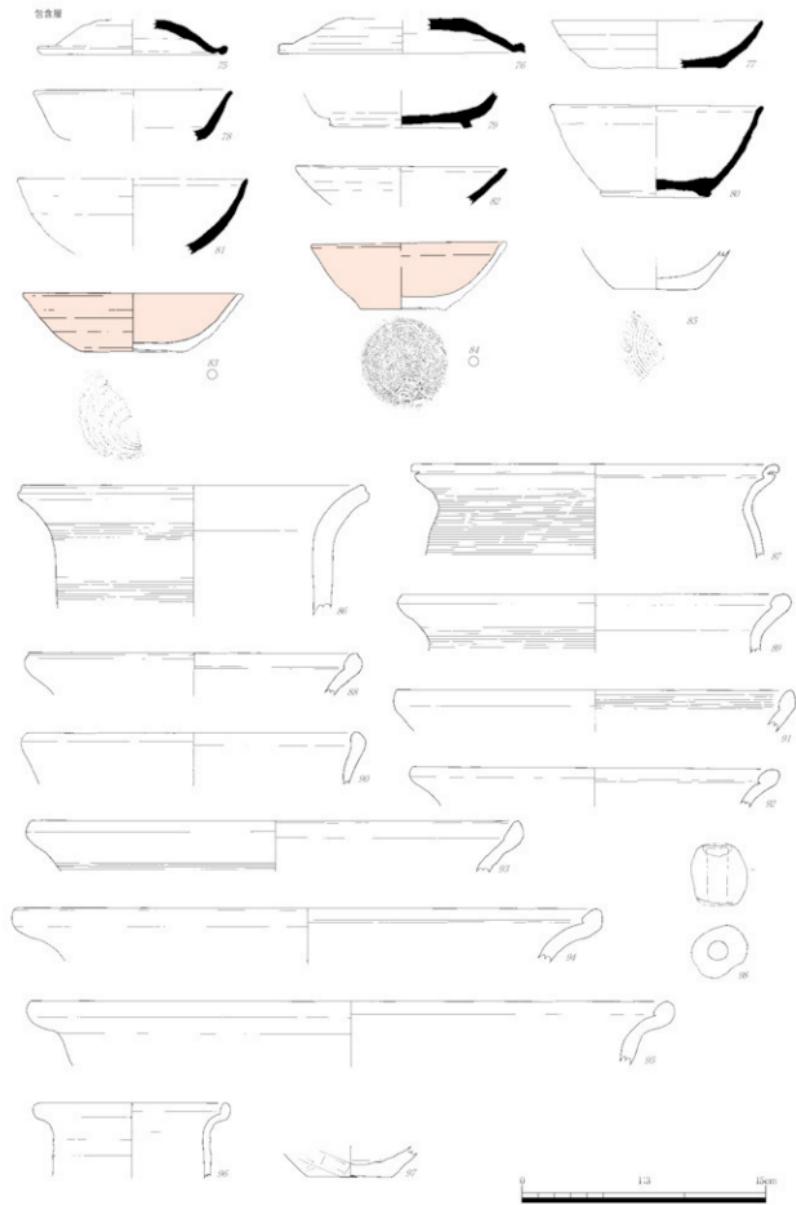
(注1) 上記器の型については、下記の著者においてJIS規格から変遷を追っている。

内田重紀子 2000 「越中絶頂の古式土器器表復元」『富山考古学研究』第3号』財團法人富山県文化振興財团所成文化財調査事務所



第11図 遺構・遺物実測図 (1/40・1/80・1/200, 1/3)

C 2 地区 1. S D4202(73・74)  
D 2 地区 2. S D4742



第12図 遺物実測図 (1/3)

包含層  
D 2 地区(75~97) E 3 地区(98)

第1表 古代 積穴建物一覧

建物	地区	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> ) <sup>(注)</sup>	方位	カマド位置	出土遺物	時期	備考	挿図	写真図版
SI1	D2	5.25×(3.68)	~	N-4°-E	北	土師器	9C後半		8・9	5・6
SI2	D2	不明	~	(SI4に同じか)	不明	なし	9C後半	<SI1	8・9	5・6
SI3	D2	3.38×(2.4)	~	W-22°-S	南西	土師器	9C後半		8・9	5・6
SI4	D2	不明	~	(SI2に同じか)	不明	土師器	9C後半	<SI3	8・9	5・6
SI5	D2	4.2×3.62	15.2	(SI1・SI6に同じ)	不明	土師器	9C後半		8・10	5・6
SI6	D2	4.15×3.56	14.8	N-5°-E	北	土師器・須恵器	9C後半		8・10	5・6

注1 面積は小数点第2位四捨五入

第2表 古代 遺構一覧

遺構	種類	規模(m)			出土遺物	備考	挿図	写真図版
		長さ	幅	深さ				
SD2201	自然流路		12	0.86	弥生土器・土師器・須恵器・中世 土師器・珠満・越前・中国製青磁・ 瓦器・肥前磁器・底板・楕・曲物・ 箱・箸・部材・錢貨		2・3	2
SD2239	溝		1.46	0.44	土師器・須恵器・土鍤	<SD2234	2・3	3
SD2241	溝		2.19	0.45	土師器・須恵器・底板		2・3	3
SD2502	溝		1.57	0.43	土師器・須恵器・杭・部材	<SD2510・2806・ 2812・2816・2817・ 3040	2・3	3
SD2503	溝		0.54	0.13	土師器・部材		2・3	
SD2506	溝		0.47	0.04	須恵器		2・3	
SD2809	溝		2.2	0.51		<SD2806	2・3	4
SD4202	溝		0.68	0.13	土師器・須恵器		11	4
SD4742	溝		0.44	0.06		<SD4710	8・11	6
SK4749	土坑	0.42	0.39	0.11		SI 3に付属か	8・9	7

第3表 古代 土器・土製品一覧(1)

種類	遺物	写真版	種類	基盤	造形	出土施点		出土地点	基盤	底付	断土色調	断土色	断土の特徴	時間	備考
						116	116								
4	I	7	角切器	杯型	SDE2239	X189Y212	-	-	15.2	6.4	1.3 (4)	10YR7.3	灰白色 [上部]・黄色 [下部]・褐色	25Y7.1	
2 <sup>o</sup>	II	12	十脚品	管状・棒	SDE2239	X190Y211	-	-	6.5	4.0	1.4 (4)	10YR7.3	灰白色 [上部]・黄色 [下部]・褐色	SC	
3 <sup>o</sup>	II	7	角切器	杯型	SDE2241	X205Y198	直筒・上圓	SDE2241	11.9	3.2	7.5Y7.1	灰白色	骨針	SC	
4	II	7	角切器	杯型	SDE2241	X245Y198	直筒・上圓	SDE2241	-	-	8.0	7.5Y7.1	灰白色	骨針	SC
5	II	7	角切器	杯型	SDE502	X194Y120	(1) 刃	SDE502	15.4	2.3	-	N7.0	灰白色	SC	
7	II	7	角切器	杯型	SDE502	X246Y247	220°-224° 直筒・刃無	SDE502	12.4	3.5	-	25Y7.1	灰白色	SC	後半
8	II	7	角切器	杯型	SDE506	X194Y120	(1) 刃	SDE506	13.0	4.1	-	7.5Y7.1	灰白色	SC	後半
11	II	8	角切器	杯型	SDE201	X207Y195	F 刃	SDE201	15.7	-	-	N7.0	灰白色	骨用鉗	
12	II	7	角切器	杯型	SDE201	X269Y190	-	SDE201	12.0	(2.1)	-	5Y7.1	灰白色	SC	内面墨板
13	II	7	角切器	杯型	SDE201	X285Y197	-	SDE201	11.2	4.5	6.4	5Y7.1	灰白色	骨針	SC
14	II	7	角切器	杯型	SDE201	X285Y196	-	SDE201	13.8	4.1	9.2	10YR6.2	灰黃色	SC	
15	II	7	角切器	杯型	SDE201	X244Y203	-	SDE201	-	-	8.9	25Y7.1	灰黃色	SC	
16	II	9	角切器	杯型	SDE201	X294Y196	-	SDE201	11.3	3.8	-	N6.0	灰白色	SC	
17 <sup>o</sup>	II	7	角切器	杯型	SDE201	X253Y196	-	SDE201	10.9	3.3	-	N7.0	灰白色	SC	
18	II	7	角切器	杯型	SDE201	X253Y195	直筒	SDE201	11.6	3.8	-	25Y7.1	灰白色	SC	
19	II	7	角切器	杯型	SDE201	X233Y190	-	SDE201	11.7	3.3	-	7.5Y7.1	灰白色	SC	
20	II	7	角切器	杯型	SDE201	X233Y196	-	SDE201	13.7	4.3	-	25Y7.1	灰白色	SC	
21	II	7	角切器	杯型	SDE201	X246Y196	-	SDE201	11.6	4.2	-	10YR7.4	浅黃色	SC	
22	II	7	角切器	杯型	SDE201	X246Y195	(1) 刃	SDE201	11.2	3.9	-	10YR7.1	灰白色	SC	
23	II	8	角切器	杯型	SDE201	X265Y197	-	SDE201	11.8	3.9	-	7.5Y7.1	灰白色	SC	後半
24	II	8	角切器	杯型	SDE201	X265Y197	-	SDE201	11.8	4.3	-	7.5Y7.2	灰白色	骨針 鈎針	SC
25	II	8	角切器	杯型	SDE201	X265Y197	-	SDE201	11.6	3.9	-	25Y7.2	灰白色	骨針 白色鉛	SC
26	II	8	角切器	杯型	SDE201	X265Y197	-	SDE201	18.8	-	-	25Y7.2	灰白色	SC	外底削磨 [鳥]?
5	II	27	10	土刺器	SDE201	X286Y211	-	SDE201	11.9	3.15	-	N6.0	灰白色	SC	
6	II	37	11	角切器	SDE201	X286Y210	(1) 刃	SDE201	13.4	3.05	-	10YR7.1	灰白色	SC	
		38	11	角切器	SDE201	X165Y140	直筒	SDE201	12.0	3.35	7.2	25Y7.1	灰白色	SC	
		39	11	角切器	SDE201	X165Y140	直筒	SDE201	19.5	3.20	-	25Y7.1	灰白色	SC 第2-第3	
		40	11	土刺器	SDE201	X169Y146	直筒・上圓	SDE201	18.0	3.15	-	10YR7.2	灰白色 [上部]・褐色	SC 第2	
		41	11	土刺器	SDE201	X169Y146	直筒・上圓	SDE201	3.5	3.4	1.3	7.5Y7.6	褐色	SC	
		42	12	十脚品	SDE201	X156Y139	直筒	SDE201	1.6	2.5	-	10YR7.6	褐色	指揮2	
		43	12	十脚品	SDE201	X167Y171	直筒	SDE201	3.5	3.5	-	5YR7.8	褐色	SC	
		44	12	十脚品	SDE201	X168Y153	直筒	SDE201	(4.2)	(3.7)	-	10YR7.2	灰白色 [上部]・褐色	SC	
		45	12	十脚品	SDE201	X152Y151	直筒	SDE201	(3.9)	3.3	-	25Y7.6	褐色	SC	
		46	9	角切器	SDE201	X229Y255	直筒	SDE201	11.3	2.1	-	5Y7.1	灰白色	SC	
		47	9	角切器	SDE201	X289Y199	直筒	SDE201	12.0	3.0	-	10YR8.3	浅黃色	SC 第1-2	鉗
		48	9	角切器	SDE201	No174-2	直筒・上圓	SDE201	13.0	2.8	-	N6.0	灰白色	SC	
		49	9	角切器	SDE201	No174-2	直筒・上圓	SDE201	14.1	1.6	-	25Y7.2	灰白色	SC	鉗用鉗
		50	9	角切器	SDE201	X181Y169	直筒	SDE201	3.5	3.5	-	5YR7.8	褐色	SC	
		51	9	角切器	SDE201	X211Y228	直筒	SDE201	-	-	-	N6.0	灰白色	SC	
		52	10	角切器	SDE201	X289Y204	直筒・上圓	SDE201	10.8	4.45	-	5Y7.1	灰白色	SC	
		53	9	角切器	SDE201	X289Y192	直筒	SDE201	11.8	4.8	-	N6.0	灰白色	SC	△?記号 [ * ]
		54	9	角切器	SDE201	X255Y223	直筒	SDE201	12.1	4.4	7.6	7.5Y7.4	灰白色	SC	
		55	10	角切器	SDE201	X313Y265	直筒	SDE201	3.6	3.75	8.3	5Y6.0	灰白色	SC	
		56	9	角切器	SDE201	X244Y257	直筒	SDE201	8.1	3.8	-	N7.0	灰白色	SC	

第3表 古代 土器・土製品一覧(2)

種類	遺物	写真図版	種類	形状	通稱	出土施設		遺物(cm)	断面	断面の特徴	断面色	断面	備考	
						116	断面							
6	.37	9	灰土器	杯	X245Y169 直筒	X245Y169 直筒	112	-	117	3.05	灰白色	SC		
	.38	10	灰土器	杯	X190-2592-2300 直筒上面	X190-2592-2300 直筒上面	117	-	124	3.2	-	SC	合計	
	.59	10	灰土器	杯	X241Y271 直筒	X241Y271 直筒	122	3.3	-	109Y7.1	灰白色	SC		
	.60	9	灰土器	杯	X289Y192 直筒上面	X289Y192 直筒上面	122	3.3	-	73Y7.1	灰白色	SC		
	.62	9	灰土器	杯	X165Y146 直筒	X165Y146 直筒	112	3.6	-	73Y7.1	灰白色	SC		
	.61	9	灰土器	杯	X170Y245 直筒	X170Y245 直筒	132	3.0	-	53Y7.1	灰白色	SC		
	.62	10	灰土器	杯	X268Y219 直筒	X268Y219 直筒	104	-	-	23Y7.1	灰白色	SC		
7	.63	9	灰土器	杯	X199Y238 直筒	X199Y238 直筒	-	-	-	5.8 73Y7.1	灰白色	SC	外底面切妻 外底平テテ付 ヘラ足なし×	
	.64	9	灰土器	杯	X249Y205 直筒侧面	X249Y205 直筒侧面	220	-	-	23Y7.2	灰白色	SC		
	.65	10	土陶器	管状土陶	X229Y257 直筒	X229Y257 直筒	45	3.9	15	23Y7.6	棕色	SC		
	.66	12	土製品	管状土陶	X273Y235 直筒	X273Y235 直筒	31	3.3	1.3	53Y7.4	棕色	SC		
	.67	12	土製品	管状土陶	X214Y261 直筒	X214Y261 直筒	3.4	0.5	1.4	109Y7.3	浅黄褐色	SC		
	.68	12	土陶器	管状土陶	SII	SII	-	-	-	-	-	SC		
	9	.69	15	土陶器	杯	X560Y346	X560Y346	128	-	-	109Y7.4	灰白色	SC	
	.70	15	土陶器	杯	X560Y346	X560Y346	130	3.6	6.0	73Y7.2	灰黑色	SC		
	.71	15	土陶器	杯	SII	SII	106	-	-	57Y7.1	灰白色	SC		
	.72	14	灰土器	杯	SD1202	X386Y265	208	-	-	23Y7.1	灰白色	SC		
	.73	14	灰土器	杯	SD1202	X386Y265	-	-	-	109Y7.3	灰白色	SC		
	.74	15	土陶器	杯	X386Y293	X386Y293	110	-	-	NS.0	灰白色	SC		
	.75	14	灰土器	杯	X544-565Y743 直筒	X544-565Y743 直筒	150	-	-	NS.0	灰白色	SC		
	.76	14	灰土器	杯	X557-564Y743-566 直筒	X557-564Y743-566 直筒	128	-	-	73Y7.1	灰白色	SC		
	.77	14	灰土器	杯	X645Y156 直筒	X645Y156 直筒	120	-	-	23Y7.1	灰白色	SC		
	.78	14	灰土器	杯	X649Y156 直筒	X649Y156 直筒	79	-	-	76 117.0	灰白色	SC		
	.79	14	灰土器	杯	X573Y243 直筒	X573Y243 直筒	-	-	-	109Y7.1	灰白色	SC		
	.80	14	灰土器	杯	X564-567Y747-557 直筒	X564-567Y747-557 直筒	130	5.5	6.6	57Y6.1	灰白色	SC		
	.81	14	灰土器	杯	X562Y344 直筒	X562Y344 直筒	138	-	-	23Y7.1	灰白色	SC		
	.82	14	灰土器	杯	X560Y155 直筒	X560Y155 直筒	129	-	-	73Y7.2	灰白色	SC		
	.83	15	土陶器	杯	X643Y255 直筒	X643Y255 直筒	134	3.55	6.2	73Y7.4	灰白色	SC		
	.84	15	土陶器	杯	X598Y354	X598Y354	119	4.1	4.9	109Y6.3	灰白色	SC		
	.85	15	土陶器	杯	X565Y245 直筒	X565Y245 直筒	-	-	5.0	73Y7.3	灰白色	SC		
	.86	15	土陶器	杯	X560Y346 直筒	X560Y346 直筒	208	-	-	109Y7.3	灰白色	SC		
	.87	15	土陶器	杯	X561Y346 直筒	X561Y346 直筒	220	-	-	109Y6.3	灰白色	SC		
	.88	15	土陶器	杯	X561Y341 直筒	X561Y341 直筒	203	-	-	109Y7.3	灰白色	SC		
	.89	15	土陶器	杯	X553Y348 直筒	X553Y348 直筒	235	-	-	109Y6.3	灰白色	SC		
	.90	15	土陶器	杯	X580Y233 直筒	X580Y233 直筒	200	-	-	109Y7.3	灰白色	SC		
	.91	15	土陶器	杯	X565Y344 直筒	X565Y344 直筒	240	-	-	109Y7.3	灰白色	SC		
	.92	15	土陶器	杯	X565Y346 直筒	X565Y346 直筒	220	-	-	109Y7.3	灰白色	SC		
	.93	15	土陶器	瓶	X565Y344 直筒	X565Y344 直筒	297	-	-	109Y7.3	灰白色	SC		
	.94	15	土陶器	瓶	X565Y347 直筒	X565Y347 直筒	363	-	-	109Y7.3	灰白色	SC		
	.95	15	土陶器	瓶	X565Y347 直筒	X565Y347 直筒	300	-	-	109Y7.3	灰白色	SC		
	.96	15	小形器	瓶	X562Y344 直筒	X562Y344 直筒	116	-	-	109Y7.3	灰白色	SC		
	.97	15	土陶器	瓶	X565Y347 直筒	X565Y347 直筒	-	-	-	5.2 109Y6.3	灰白色	SC		
	.98	15	土陶器	管状土陶	X750Y285 直筒	X750Y285 直筒	(37)	3.4	12.41	73Y7.6	棕色	SC	質底へ付着	

第4表 古代 木製品一覧

排 国	遺物	写真図版	種類	遺構	出土地点	法量(cm) <sup>(注)</sup>			材質	備考
						長さ	幅	厚さ		
4	6	13	容器底板	SD224I	X216Y214	16.7 (11.0)	12	スギ		
	9	13	箸	SD2503	X259Y224	(14.4)	0.5	0.5	スギ	
	10		用途不明部材	SD2503	X199Y232	(25.2)	3.8	3.0		
5	28	13	容器底板	SD220I	X223Y217	18.3	18.0	1.2	スギ	側面木釘穴
	29	13	容器底板	SD220I	X223Y217	(16.6)	(9.6)	0.8	スギ	側面木釘穴
	30	13	容器底板	SD220I	X290~295 Y195~200	14.5 (8.7)	0.5	スギ	側面木釘穴	
	31		容器底板	SD220I	X191Y224	(13.2)	(4.3)	0.6		
	32		箸	SD220I	X257Y195	(9.1)	0.6	0.5		
	33	13	箱側板	SD220I	X191Y224	16.6	4.0	0.6	ヒノキ	
	34		用途不明部材	SD220I	X217Y216	(18.8)	3.7	1.0		
	35		用途不明部材	SD220I	X215Y213	13.5	8.5	3.5		中央に穿孔あり
	36		用途不明部材	SD220I	X251Y196	123.6	26.4	5.4		

注1 ( ) 内は残存長

# 第Ⅷ章 中世～近代の遺構・遺物

## 1 中世～近代の概要

### 中世の概要

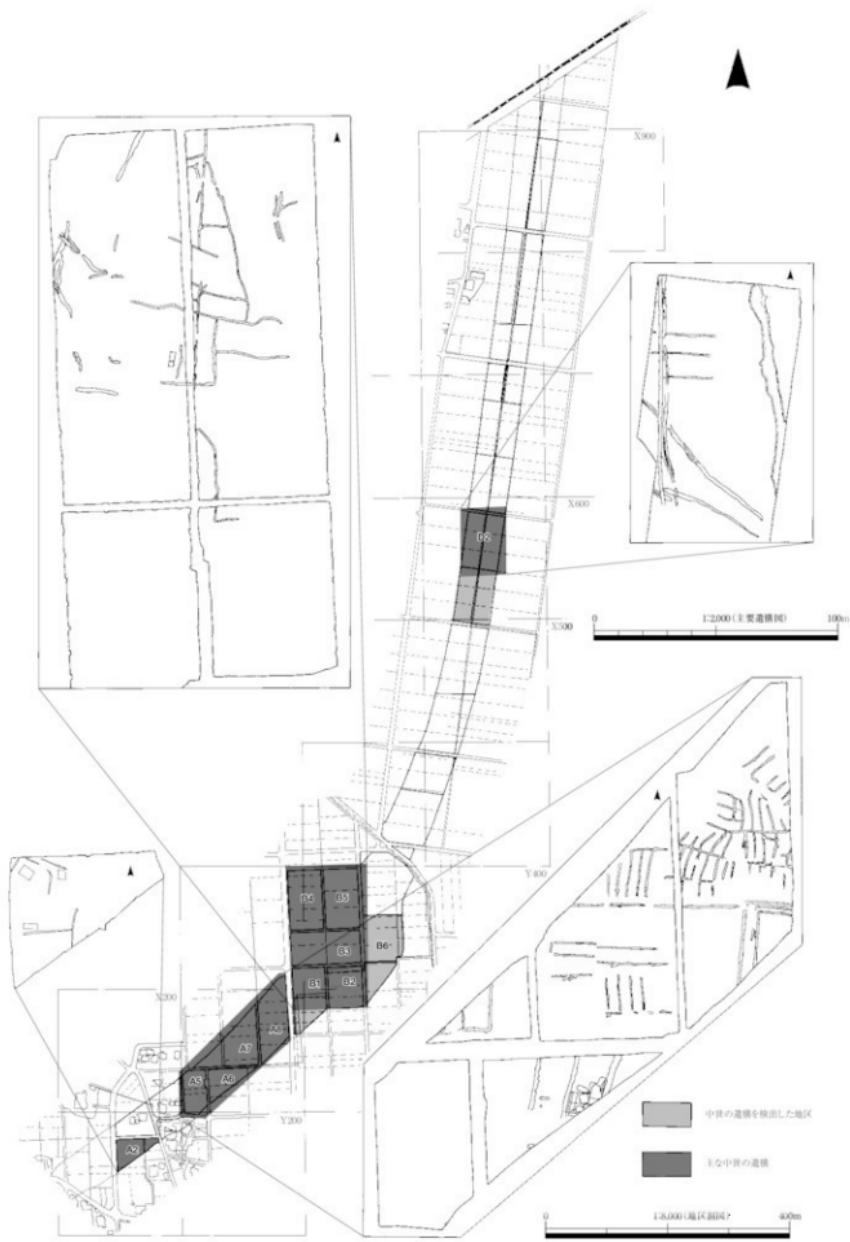
中世の遺構は、遺跡の南側で建物群、中央から北側で柵・溝・自然流路・畠などを検出した。約2kmにわたる調査区内に検出した建物群は、200～300mの間隔を開けて3箇所だけで、散在的なり方を示す。建物群より北約800mの間には、建物は検出できず、溝・自然流路・畠などがある。A2地区で区画溝に囲まれた掘立柱建物3棟がある。A5・6地区では、掘立柱建物4棟が重複して立地し、堅穴土坑を伴う。建物群は南北に走る近世溝で切られているので、屋敷地の規模は不明である。A7・8地区では、ほぼ東西・南北方向に走る方形区画溝とほぼ等間隔で数条並ぶ溝群からなる畠がある。A8地区の区画溝は3重に巡るものであるが、その内部には建物等の遺構ではなく、また調査区外に延びているため、その性格は明確ではない。B1～6地区では、B4地区に掘立柱建物2棟が南北に並び、その両脇に区画溝が2条ある他は、南から北へ古代から流れる自然流路と畠もしくは水田の区画溝と思われる溝が数条あるのみで、遺構密度は非常に薄い。遺跡の北側のD1・2地区では、柵とほぼ東西・南北に走る溝と自然流路がある。このため、中世においては、A6・B4地区で溝に区画された掘立柱建物がある以外は、水田や畠を主体とする生産域であったものと考えられる。これらの遺構の時期は、遺物から中世後半であろう。

中世の遺物はほぼ全地区で出土し、時期は12世紀後半～16世紀にわたるが、中世後半が多い。中世土師器・八尾・珠洲・越前・瀬戸美濃・中国陶磁・瓦質土器などの土器・陶磁器、茶筅・漆器・曲物・折敷などの木製品、砥石・石臼などの石製品、北宋錢などの金属製品などがある。なお、茶筅の出土例から、調査区周辺に、中世末～近世初めの中核的な建物の存在が予測される。

### 近世～近代の概要

近世～近代の遺構は、ほぼ全地区で検出したが、ほとんどは畠や水田の区画溝や自然流路であり、集落城は、遺跡南側のA地区に限られる。建物群は約150m間隔をもって2箇所で検出したが、中世と同じく散在したあり方を示す。A3～5地区の建物群とその関連する遺構は、100mの範囲に拡がっている。A3～5地区で土台建物2棟・掘立柱建物3棟を確認した。特にA5地区的土台建物は規模が大きく、しかも鋳型片が数多く出土しており、鋳造遺構を備えた施設の可能性がある。遺構の時期は17世紀後半～19世紀である。井戸は5基と少なく、石組や結樋の井戸である。水溢に木臼を転用した井戸は、県内では17世紀に検出されるが、他県では類例がほとんどない。

近世～近代の遺物には、近世土師器・越中瀬戸・越中丸山などの越中近世土器・陶磁器、瀬戸美濃・肥前陶磁・関西系陶磁器・瓦質土器などの土器・陶磁器、鋳型・土人形・土鈴などの土製品、桶・下駄・木臼などの木製品、砥石・硯などの石製品、煙管・簪・銭貨などの金属製品がある。種類は多種多様である。特に、A1・2とA3・4との間に流れている自然流路から大量に出土している。時期は17～20世紀である。近世の陶磁器は肥前陶磁が大半を占め、次に、立山町の越中瀬戸製品が続く。近世後期になると、富山市の越中丸山製品や小矢部市・牧谷製品が若干入る。県内ではあまり目立たない瀬戸美濃製品が、この遺跡では多く出土している。



第13図 中世遺構位置図 (1/2000・1/8000)



第14図 近世～近代遺構位置図 (1/2000・1/8000)

## 2 A地区

A地区では、A2・6～8地区で中世の遺構、全地区で近世～近代の遺構を検出した。

### (1) 遺構と遺物

A地区の中世の遺構には掘立柱建物・井戸・土坑・方形区画溝・溝・畠、近世～近代の遺構には掘立柱建物・土台建物・井戸・土坑・方形区画溝・溝がある。

#### A 掘立柱建物

##### 1号掘立柱建物（SB1, 第15・16図、図版19）

A2地区に位置する2間×1間の建物である。主軸方向は、N-21°-Eを示す。桁行4.4m、梁行4.3mで面積は18.92m<sup>2</sup>である。柱穴の大きさは直径45～70cm、深さ4～11cmの円形である。

##### 2号掘立柱建物（SB2, 第15・16図、図版19）

A2地区に位置する2間×2間の側柱建物である。主軸方向は、N-5°-Eを示す。桁行3.60m、梁行2.60mで面積は9.36m<sup>2</sup>である。柱穴は梢円形を呈し、深さ18～36cmで柱間は1m前後と狭い。埋土は灰色粘土質ロームで、梢円柱穴の方向は一定しない。

##### 3号掘立柱建物（SB3, 第15・17図、図版20）

A2地区的遺構群の南端に位置する区画溝SD102の北側2mにある。主軸方向は、N-5°-Wを示す。2間×1間の建物である。桁行4.10m、梁行2.80mで面積は11.48m<sup>2</sup>である。柱穴の大きさは、長軸で66～144cm、深さ7～33cmの梢円形であり、規模は様々である。

##### 4号掘立柱建物（SB4, 第18・19・24図、図版20・21・59・68）

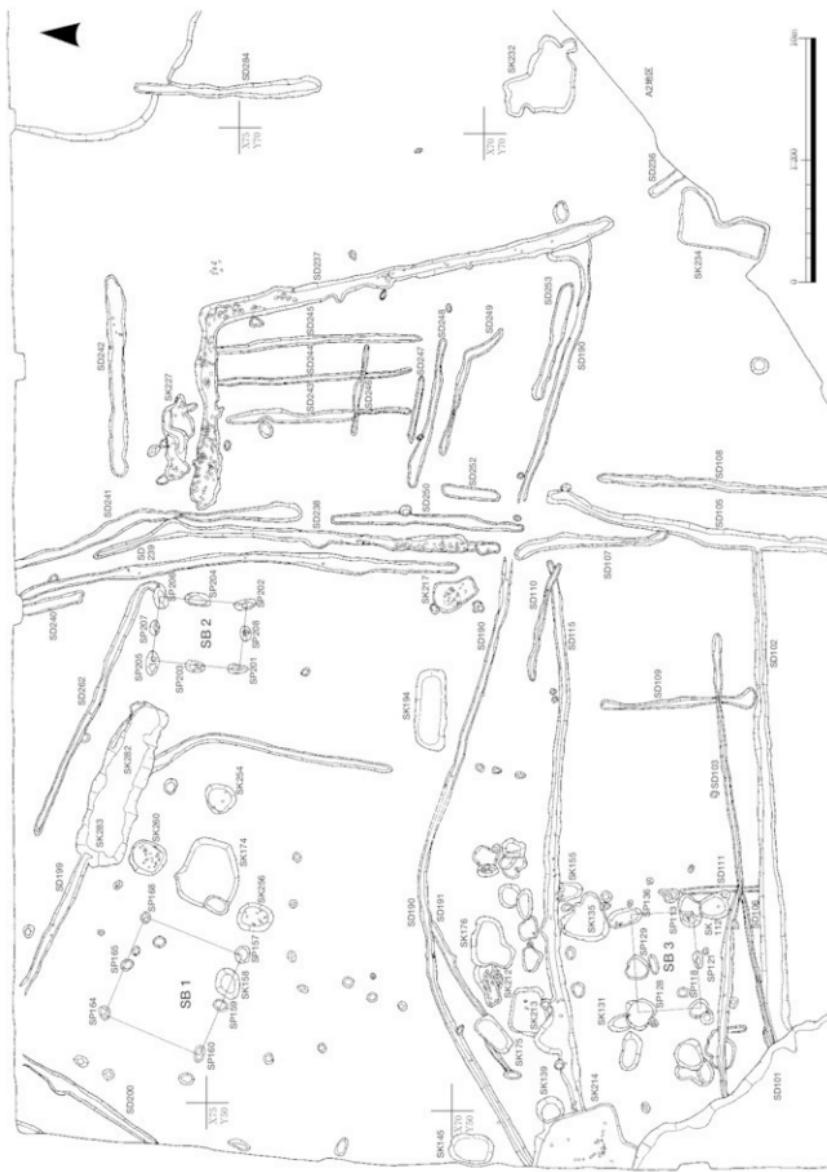
A5地区に位置する方形区画溝SD901の西側でSB6と重複して検出した。柱穴は5基確認し、3間×1間の東西棟と考えられる。桁行4.95m、梁行3.15m、面積は15.59m<sup>2</sup>、主軸はN-88°-Wである。5基の柱穴のうち、2基（SP845・886）には柱根が遺存し、残りの2基にも断面には柱痕跡が観察できる。掘形埋土はにぶい黄色シルトに暗黃色シルトや黒褐色シルトブロックが混じる土である。SP888には20～30cmの自然石が投げ込まれており、その中には割れた石臼（上臼1/4）片（104）も混じる。SP845は遺構検出時から柱根の先端が確認されており、その周囲には根固めの石と思われる自然石が埋め込まれていた。柱根（101）は断面が四角形で、底部は鋸で切断されており平坦である。基部近くの側面の2方向からは縄掛け用の抉り込みが認められる。樹種はヒノキ亜科である。SP886の柱根（103）は断面が円形であるが、底部に2方向からの鋸引きの後折り取ったような跡が認められる。遺物はこれらの他に掘形埋土から、肥前陶磁が出土している。時期は17世紀後半～18世紀である。

##### 5号掘立柱建物（SB5, 第18・19図、図版21）

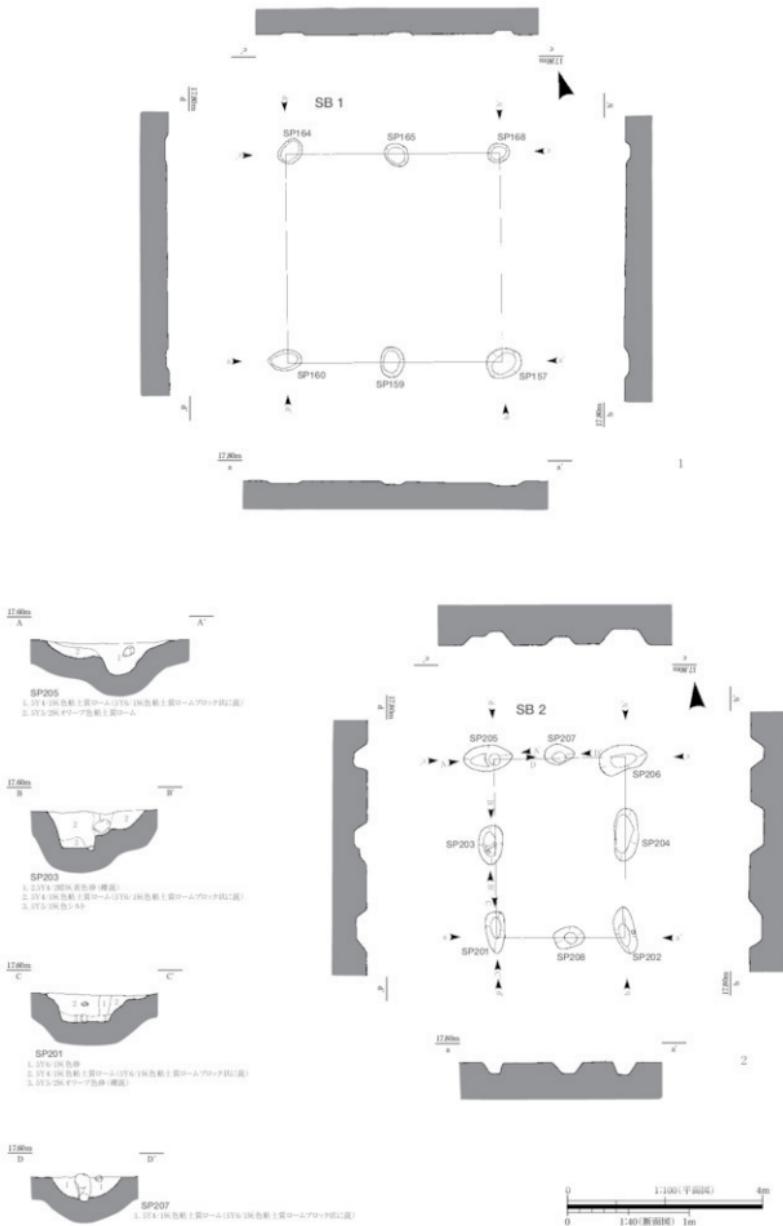
A5地区に位置する区画溝SD901の内部中央で検出した1間×1間の建物である。桁行3.88m、梁行3.78m、ほぼ正方形を呈し、面積は14.67m<sup>2</sup>である。主軸はN-8°-Eで、桁行は溝の西辺とはほぼ平行する。柱穴を検出できたのは3基のみで、平面形は梢円形を呈し、深さは20～25cmである。掘形埋土は暗黃色シルトが主体で、溝の埋土と同じである。遺物の出土は無い。

##### 6号掘立柱建物（SB6, 第18・20図、図版20・21）

A5地区に位置するSB4と重複する、3間×2間の南北棟の建物である。桁行は6.82m、梁行3.66mで、面積は24.96m<sup>2</sup>、主軸はほぼ北を向く。SB4とは柱穴同士の切り合い関係は認められず、



第15図 遺構実測図 (1/200)  
A2地区 SB1~SB3



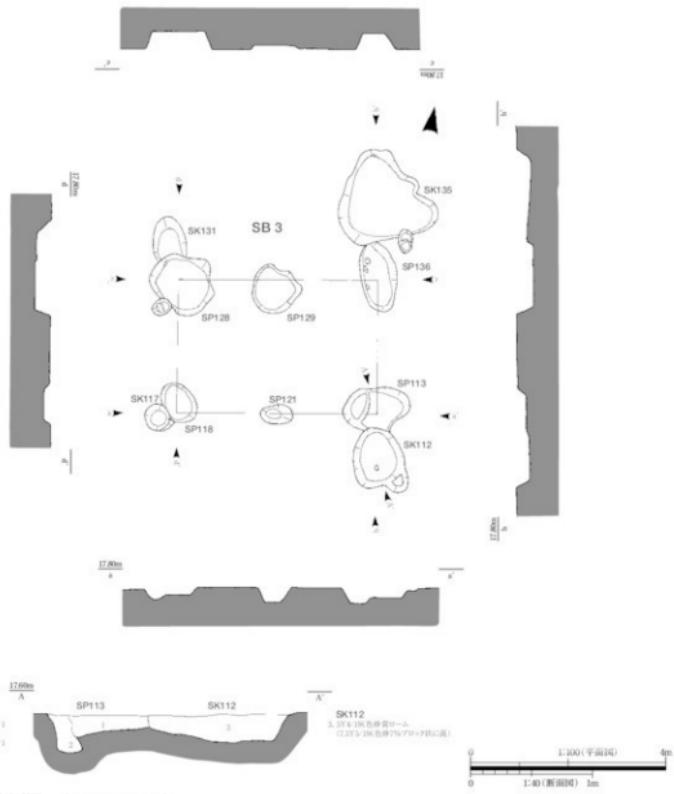
新旧関係は不明である。掘形埋土は暗灰黄色シルトににぶい黄色シルト・黒褐色粘土質ロームがブロック状に混じる土で、SB 4 の埋土とは変化は認められない。SP 835・894の断面には柱痕跡が残る。SP 835は柱痕跡の周囲を自然礫で根固めしている。遺物は越中瀬戸が出土している。時期は17世紀後半～18世紀で、SB 4 よりやや古いか。

#### 7号掘立柱建物 (SB 7, 第18・20図, 図版21)

A 5 地区に位置する区画溝 S D901の内部の北西隅では溝に接するように検出した、2間×1間の東西棟の建物である。桁行4.30m, 梁行3.34m。調査面積は14.36m<sup>2</sup>, 主軸はN-6°-Eである。柱穴は平面形が梢円形を呈し、深さは20～35cmで、断面には明確な柱痕跡は認められない。埋土は暗灰黄色シルトににぶい黄色シルト・黒褐色シルトが混じった土で、SB 3 と似る。溝と同時存在はありえないので、埋土の様子から溝より新しいと考えられる。遺物には肥前陶器がある。時期は17世紀後半～18世紀である。

#### 8号掘立柱建物 (SB 8, 第21・22図, 図版22)

A 6 地区中央の南側に位置し、S D902・1185・1335に囲まれた空間に立地する。3間以上×2間

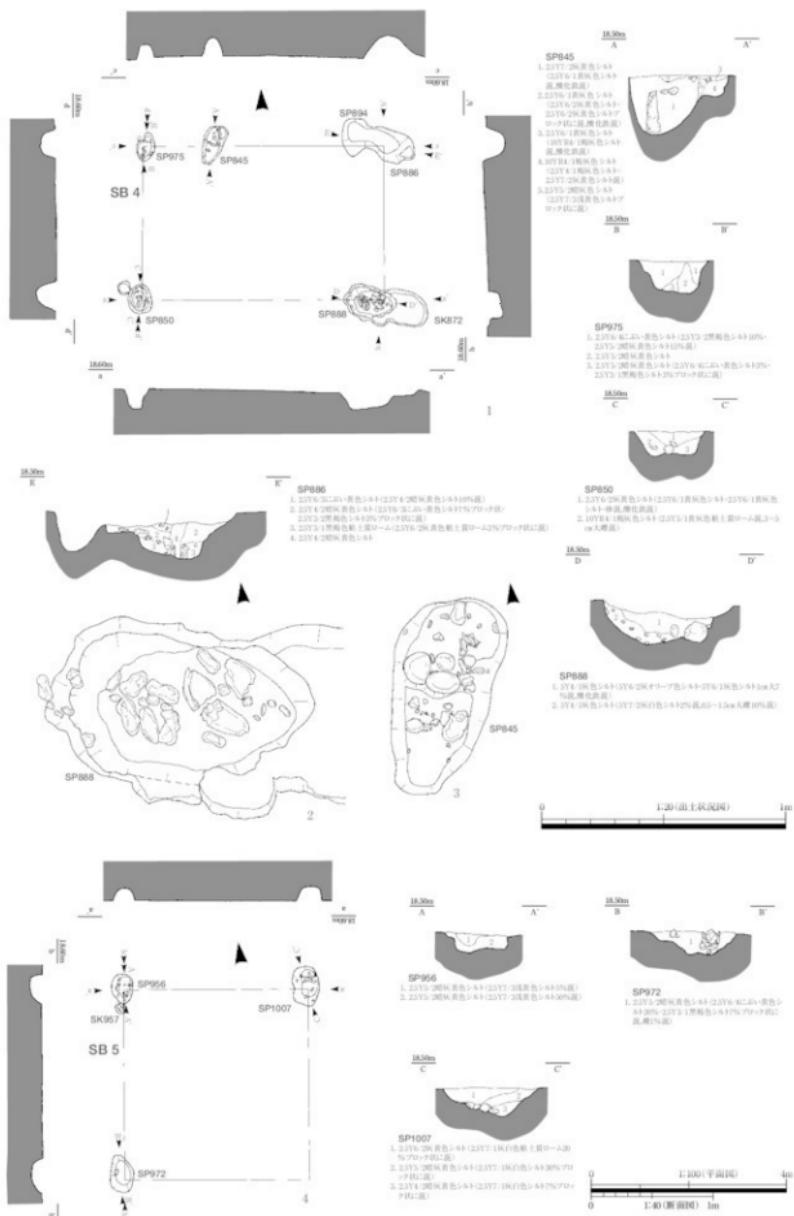


第17図 遺構実測図 (1/40・1/100)

A 2 地区 SB 3

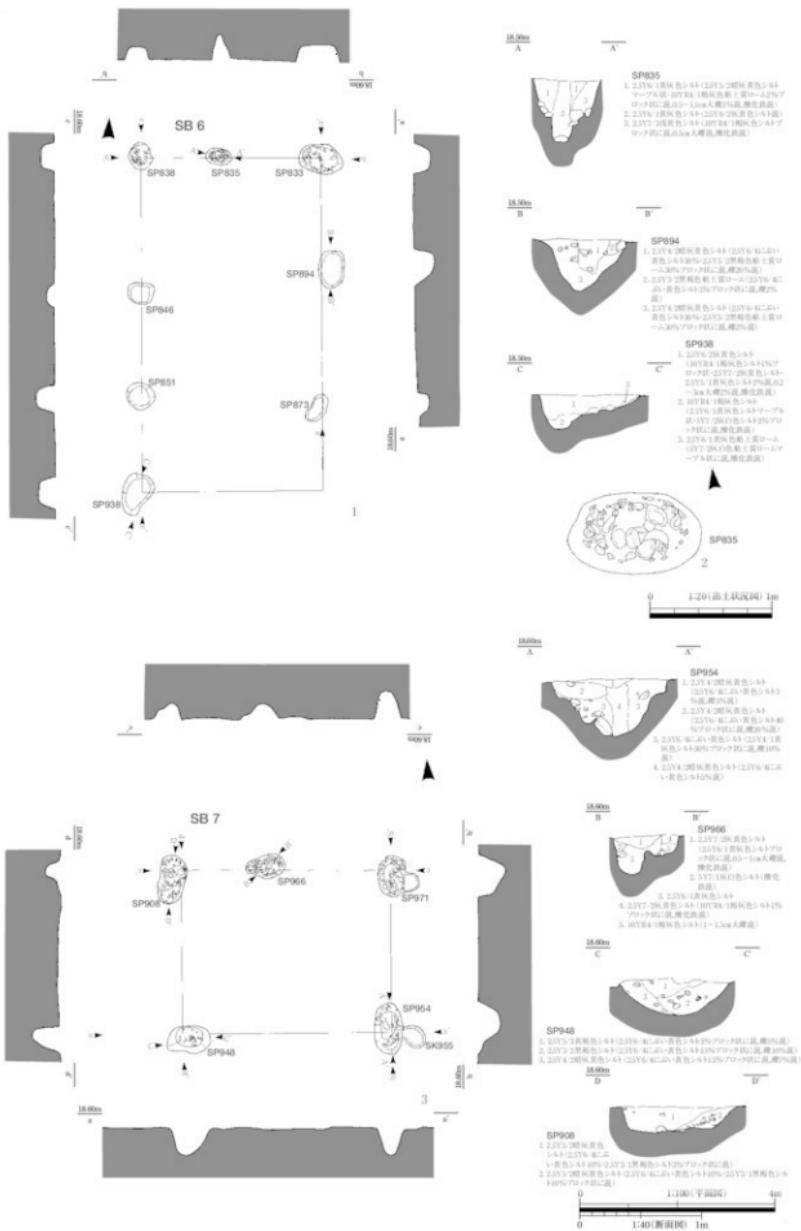


第18図 遺構実測図 (1/100)  
A5地区 SB4～SB7



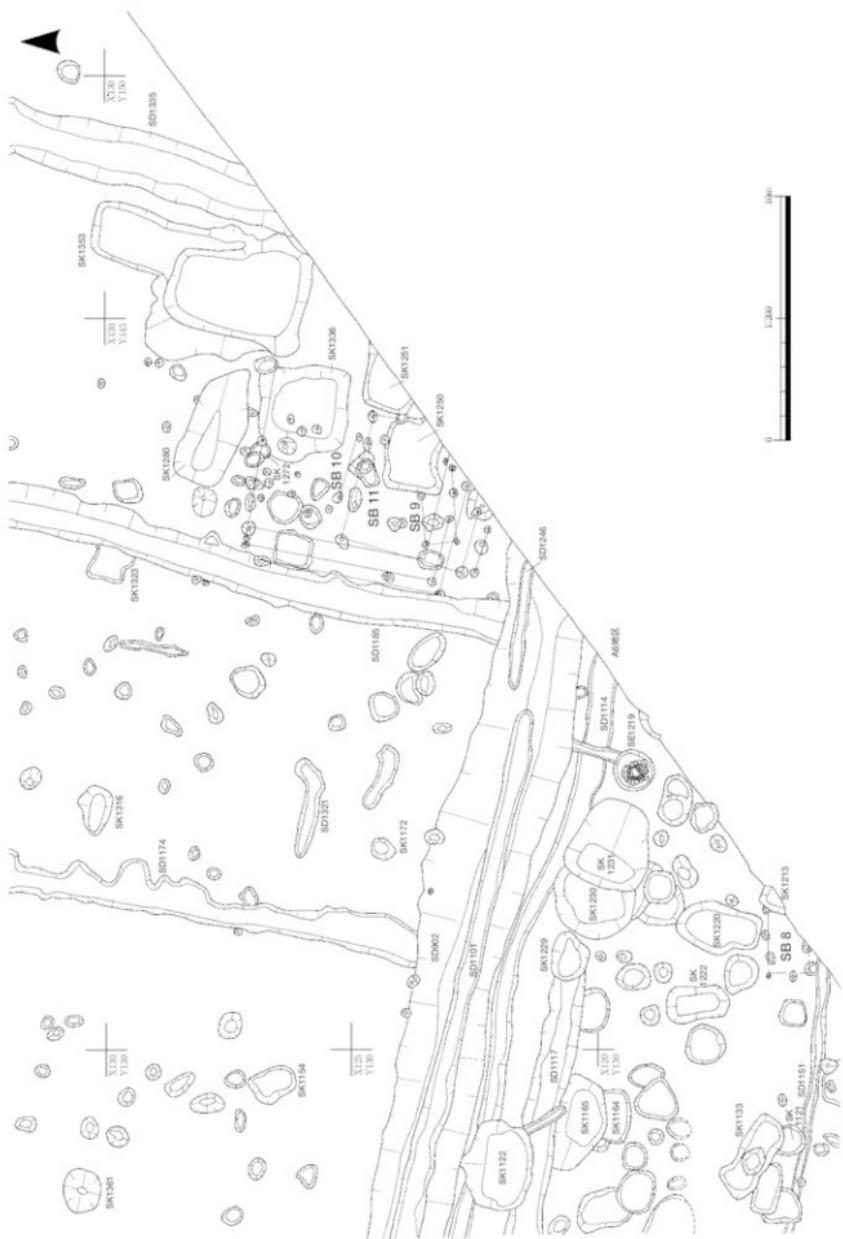
第19図 遺構実測図 (1/20・1/40・1/100)

A 5 地区 1. S B 4 2. S P 888 3. S P 845 4. S B 5

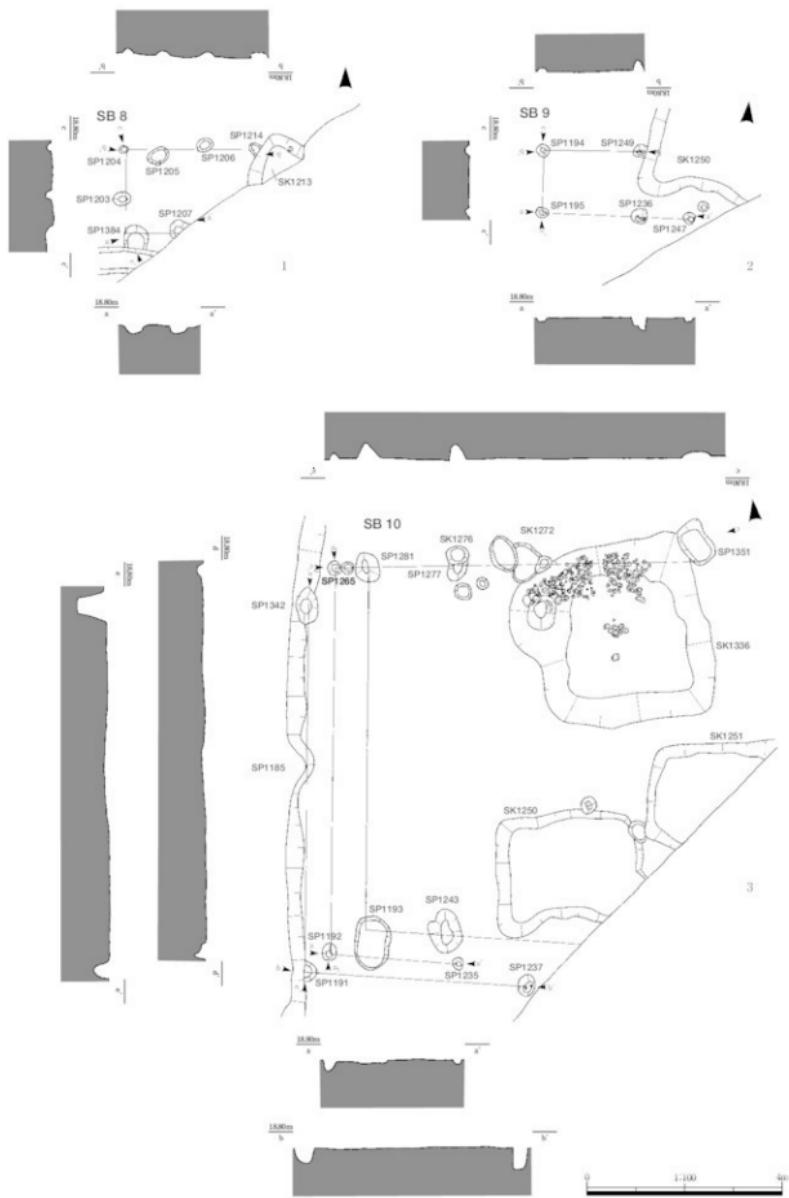


第20図 遺構実測図 (1/20・1/40・1/100)

A 5地区 1.SB 6 2.SP 835 3.SB 7

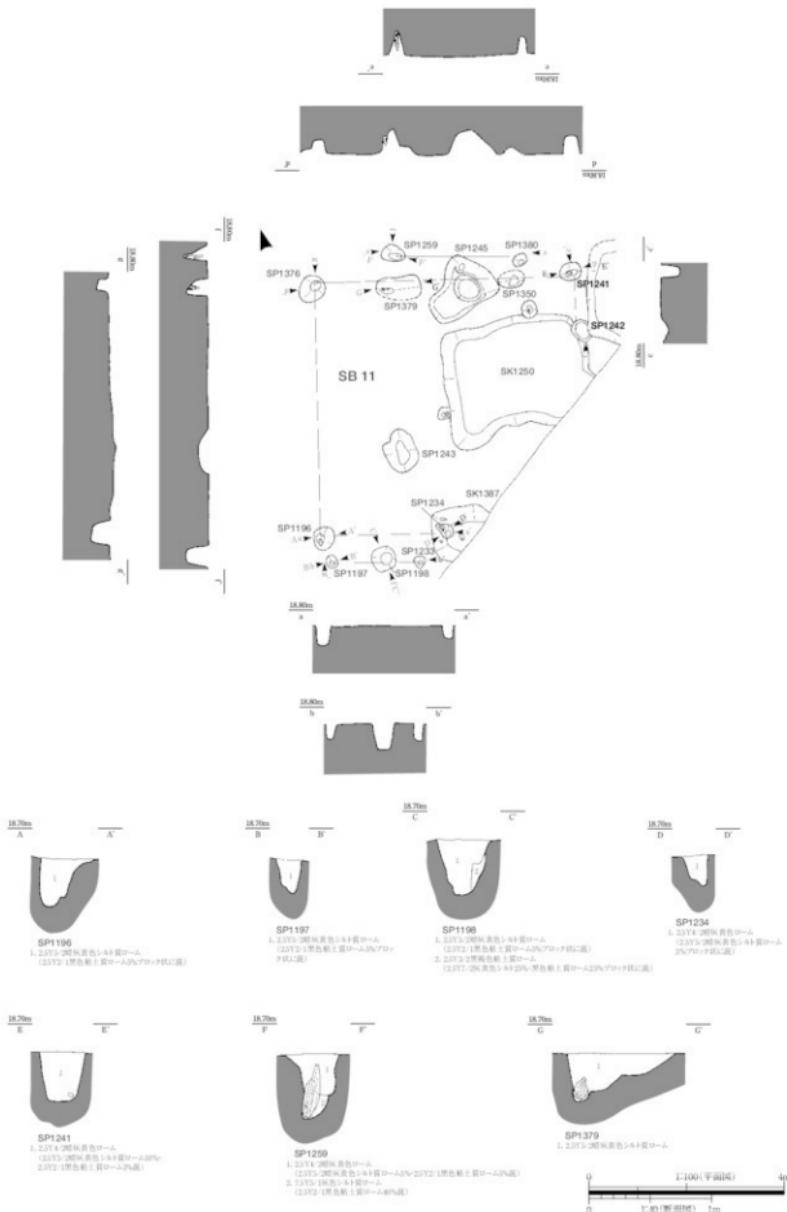


第21図 遺構実測図 (1/200)  
A6地区 SB8～SB11



第22図 遺構実測図 (1/100)

A 6地区 1.SB 8 2.SB 9 3.SB 10



第23図 遺構実測図 (1/40・1/100)  
A 6 地区 SB 11

の側柱建物で、さらに調査区外の東側に延びる可能性がある。桁行2.66m以上、梁行1.71mの大きさで、平面積4.55m<sup>2</sup>以上である。主軸の方位はN-91°-Wを測る。柱穴は楕円形で、遺物はS P1203から珠洲が出土している。

#### 9号掘立柱建物 (S B 9, 第21・22図, 図版22)

A 6地区中央の南側に位置する。2間以上×1間の側柱建物で、さらに調査区外の東側に延びる可能性がある。桁行3m以上、梁行1.28mの大きさで、平面積3.84m<sup>2</sup>以上である。主軸の方位はN-95°-Wを測る。柱穴は円形で、S P1236・1249は断面が2段落ちになっている。柱穴S P1249がS B11に伴うと思われるS K1250に切られ、S B11よりも古い建物と思われる。遺物は出土していない。

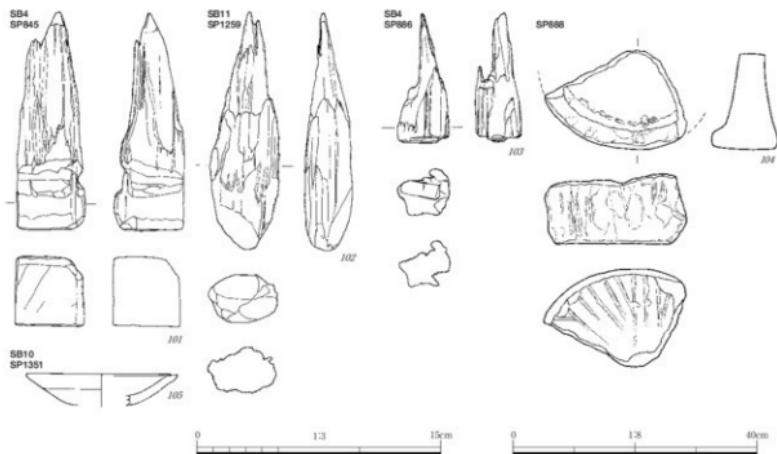
#### 10号掘立柱建物 (S B10, 第21・22・24図, 図版22・33)

A 6地区中央の南側に位置する。2間以上×1間の側柱建物である。桁行7.42m以上、梁行6.8mの大きさで、平面積50.46m<sup>2</sup>である。主軸の方位はN-12°-Eを測る。建物内部には方形堅穴状土坑S K1336が検出され、土間の可能性がある。S B10の西側と南側に位置するS P1265からS P1192を経てS P1235へ続く柱列と、S P1342からS P1191を経てS P1237へ続く柱列は、S B10の構となる可能性がある。柱穴は楕円形で、遺物はS P1351から中世土師器が出土している。

105は中世土師器の皿である。非クロコ成形で、体部は直線的に開き、口縁端部はつまんでやや尖らせる。16世紀のもの。

#### 11号掘立柱建物 (S B11, 第21・23・24図, 図版22・59)

A 6地区中央の南側に位置する。3間以上×1間の側柱建物で、さらに調査区外の東側に延びる可能性がある。桁行5.36m以上、梁行5.18mの大きさで、平面積27.76m<sup>2</sup>以上である。主軸の方位はN-16°-Eを測る。建物内部には方形堅穴状土坑S K1250が検出され、土間の可能性がある。S P1259とS P1380、S P1197からS P1233までの東西に並ぶ柱列はS B11の庇となる可能性がある。柱穴は楕円形で遺物はS P1196から中世土師器、S P1259(102)・1379から柱根が出土している。樹種はS P1259がスダジイ、S P1379がフジキである。



第24図 遺物実測図 (105 1/3, 101~104 1/8)

A 4・A 6地区 S B4 SP845(101) S P886(103) S P888(104) S B10 S P1351(105)  
S B11 S P1259(102)

## B 土台建物

### 12号土台建物（S B 12, 第25・26・27図, 図版23）

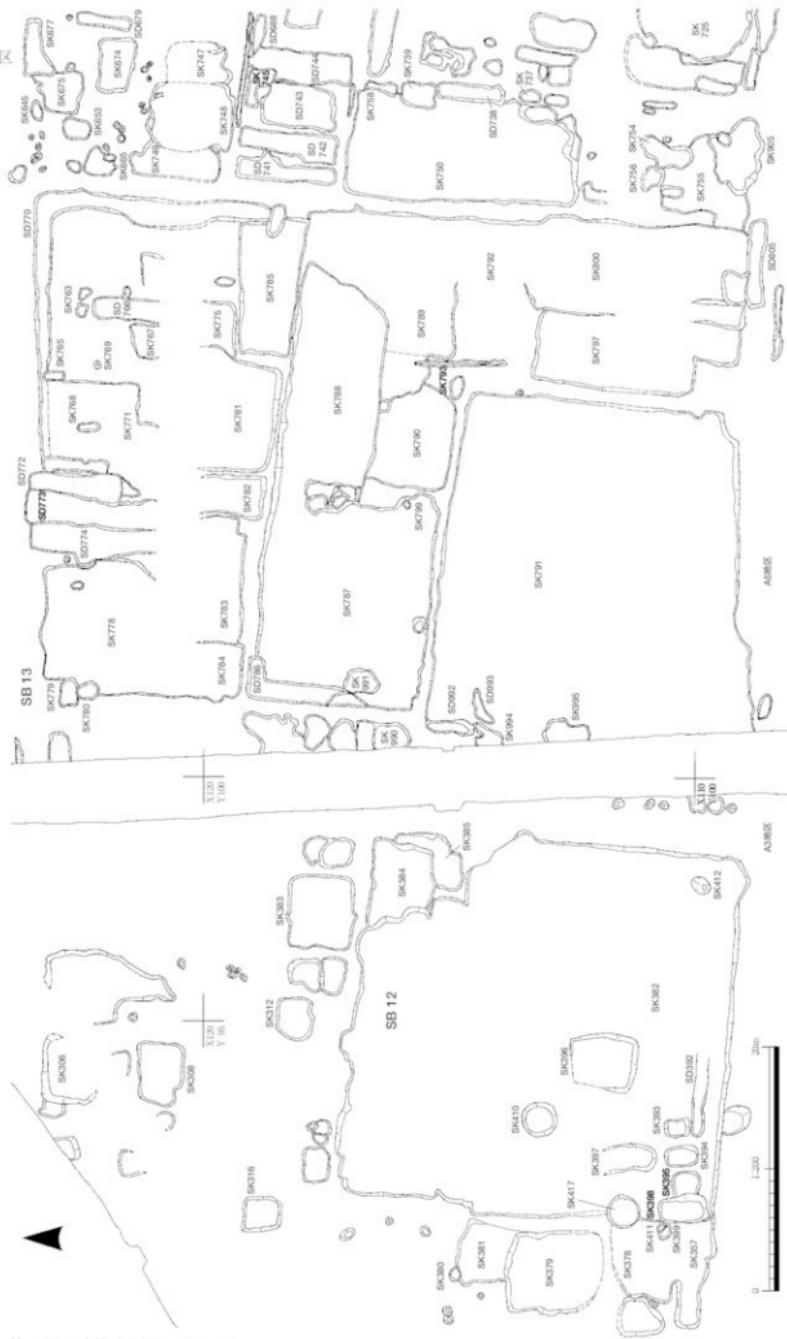
A 3 地区の東側中央に位置し, 平面形態はやや歪な方形を呈する。土坑の壁がオーバーハングしており, 埋土には付近の土がブロック状に混じる。遺構内部から石列や貼床, パラスなどは確認していないが, S B13と軸方位を同じくし, 構造的にも類似することから, ここでは土台建物<sup>(注1)</sup>の基礎構造と考えたい。一辺約15m, 深さ25cmの掘り込みで, 平面積約225m<sup>2</sup>を測り, 中核部分と考えられる。また隣接してS K378・379・381・384などがあり, 張り出し部にあたる。遺物は細片が多く図示していないが, 近代陶磁器が出土しており, S B13と同時期の建物と考えられる。S B13と共にL字状の配置を呈し, 建物規模の比較からその補助屋的な機能を持っていたものであろう。

### 13号土台建物（S B 13, 第25・28～37図, 図版23・37・40・42・50・56・57・58）

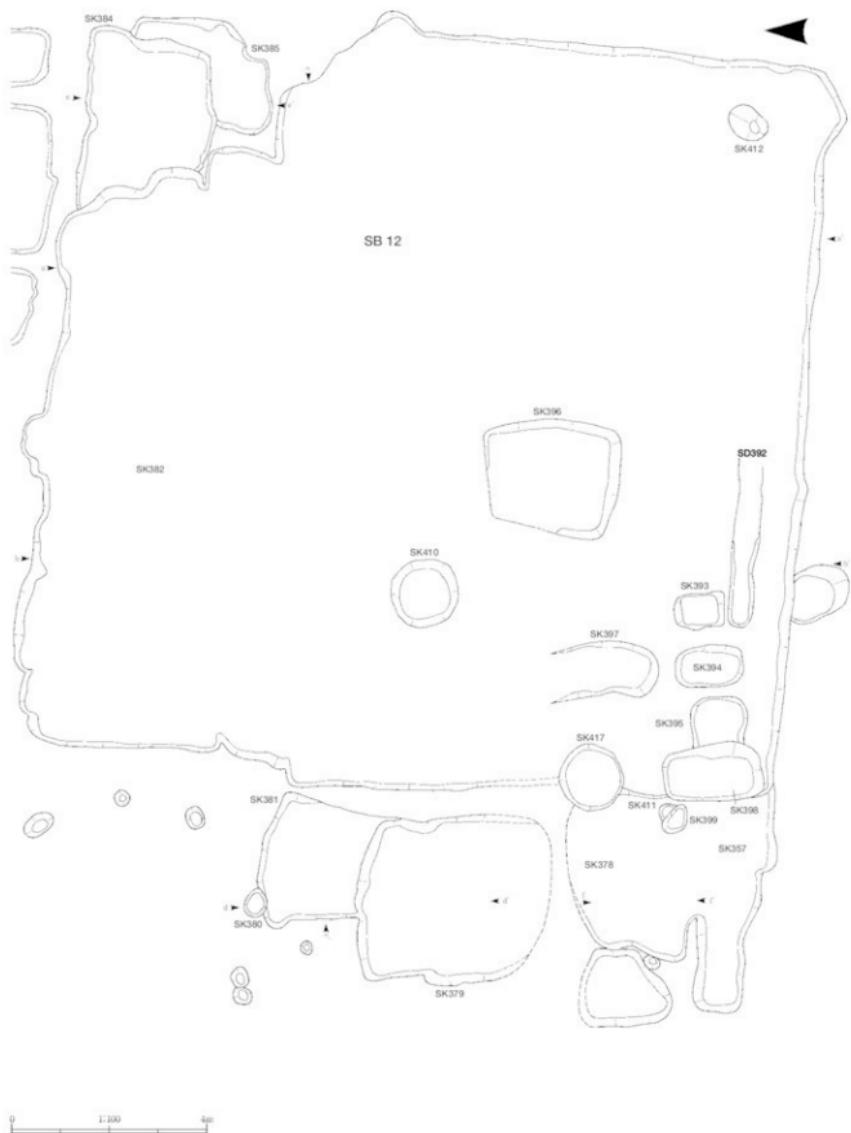
A 5 地区に位置し, 大小の浅い長方形の土坑が密集し, 1軒の屋敷地を構成しているものである。最大幅で南北29m, 東西26.5mである。当初, わずかの土の変化で平面形が確認されるものから遺構番号を付与していくが, 調査を進めていく過程でそれらの土坑の辺が一定の間隔を空けて平行していることに気付き, 同一の建物, または敷地と考えるようになった。埋土は灰黄褐色シルト・黄灰色シルトが混じる土が主体で, 場所によって双方の割合が変化したり, 褐灰色シルトや暗灰黄色シルト・炭化粒が混じったりするものである。個々の土坑の床面は平坦であるが, 深さに大きく分けて2種類あり, 東側は概して約10cmと浅く, 西側の大型の方形の土坑は一番深いS K787で約25cmある。それぞれの土坑の掘形は整地時のものと思われ, これから上屋構造は全く想像する術は知らない。ただ, 中央西寄りの上面で検出した不整形の土坑S K991周辺から焼土ブロックに混じて鋳型片が出土していることから鋳物師の作業場的建物であった可能性がある。S K991はS B13の一部S K787の上面で検出した不整形の土坑である。埋土はオリーブ褐色砂質ローム, 黄褐色砂質ロームの順で堆積しており, 烧土粒・炭化物の混入が認められたが, 炉跡と想定するには底面はやや凸凹しているが, 壁面には被熱は認められなかった。ただ, この土坑を土台建物の整地面で検出したことを考えれば, 作業床はより上面であった可能性は高く, 炉壁等が出土していないことも問題ではないかもしれない。

遺物は, 各土坑の理土から越中瀬戸・肥前陶磁・瀬戸美濃などの近世陶磁器・土人形・鋳型・砥石が出土している。106・107は越中瀬戸の丸皿である。106は口縁部に白濁した灰釉が掛けられ, 内堀の見込み中央には菊花文が押印される。高台は削り出し高台である。107は口縁部に鉄釉が掛けされた小振りの皿で, 底部には回転糸切り痕が残る。108は瀬戸美濃の広東碗。高台外側には1本の青色の圈線が巡る。時期は19世紀である。109は肥前陶器の壺の底部で, 内外面鉄釉掛けで, 内部には格子状のタタキメが残る。建物の時期は, 遺物の時期から19世紀以降と考えられる。

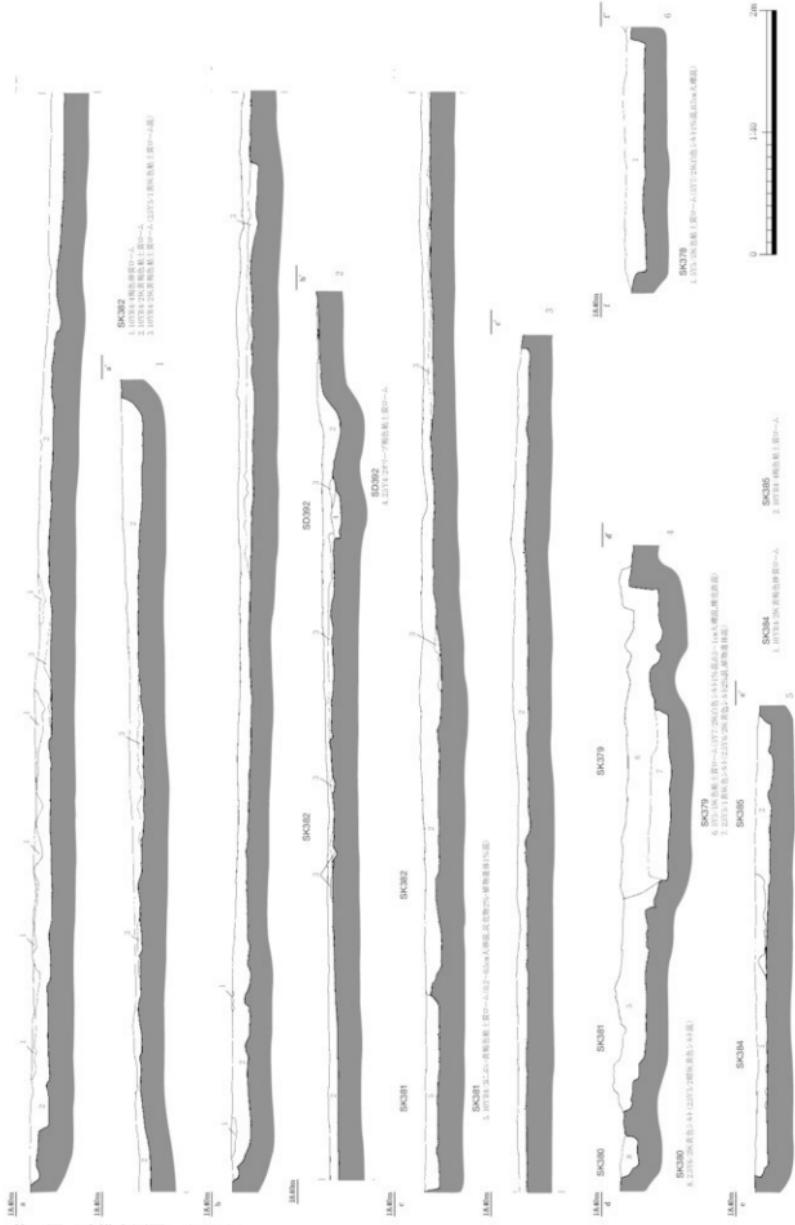
注1 地内の土台建物については、河西龍二：1984「近世土台建物の範囲」『梅原湖摩立源時発掘調査報告（選択編）』財团法人富山県文化振興財团蔵文化財調査事務所に論考がある。



第25図 遺構実測図 (1/200)  
A 3・A 5地区 SB12・SB13

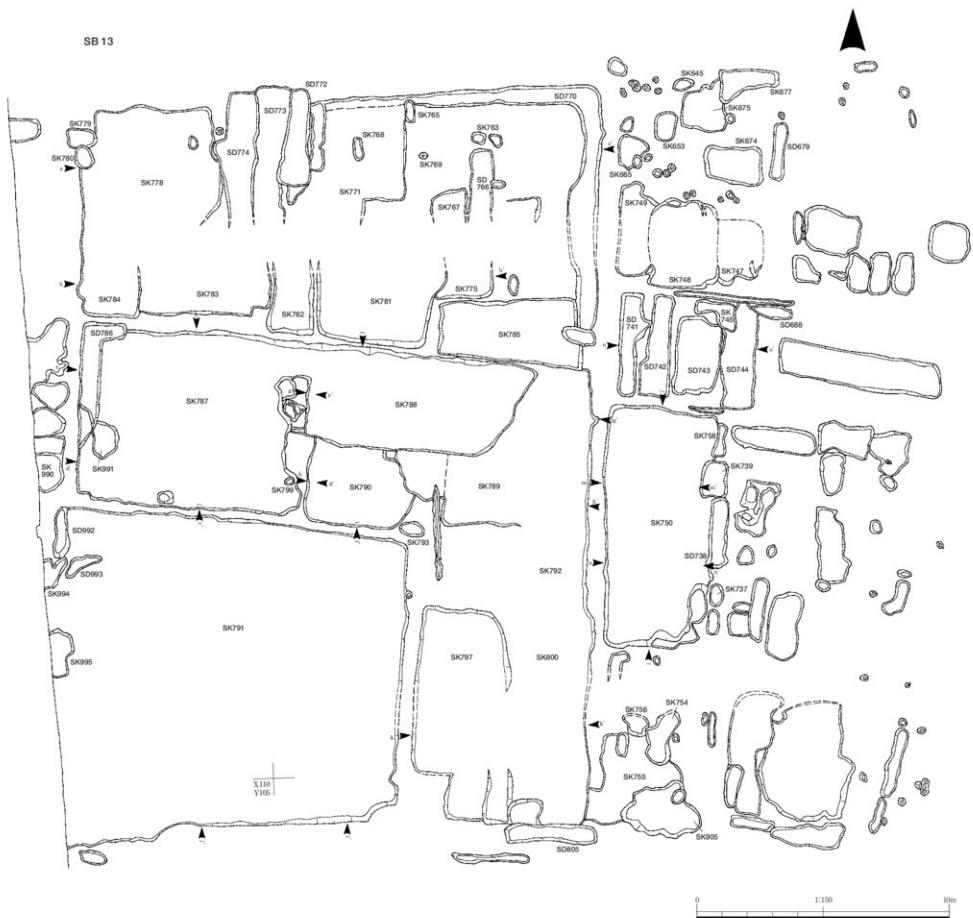


第26図 遺構実測図 (1/100)  
A 3 地区 SB 12

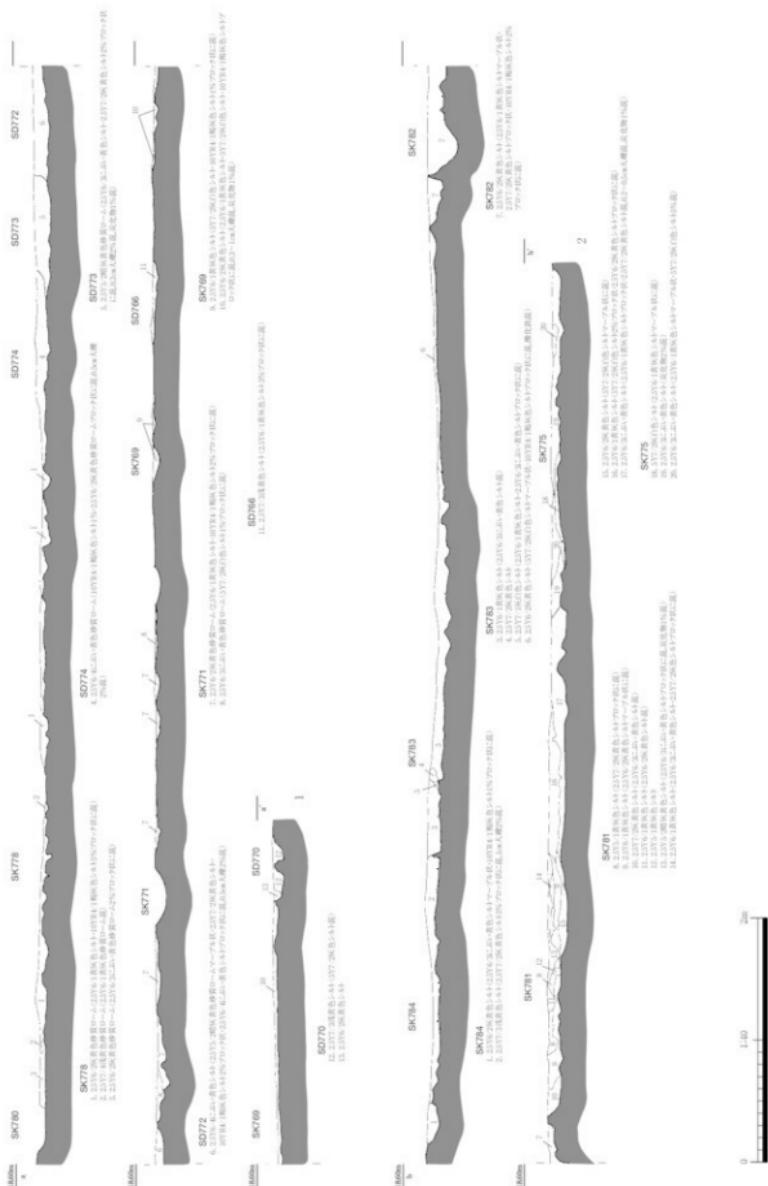


第27図 遺構実測図 (1/40)

A 3 地区 SB12 1. S K382 2. S K382 · S K392 3. S K381 · S K382 4. S K380 · S K381 · S K379  
5. S K384 · S K385 6. S K378

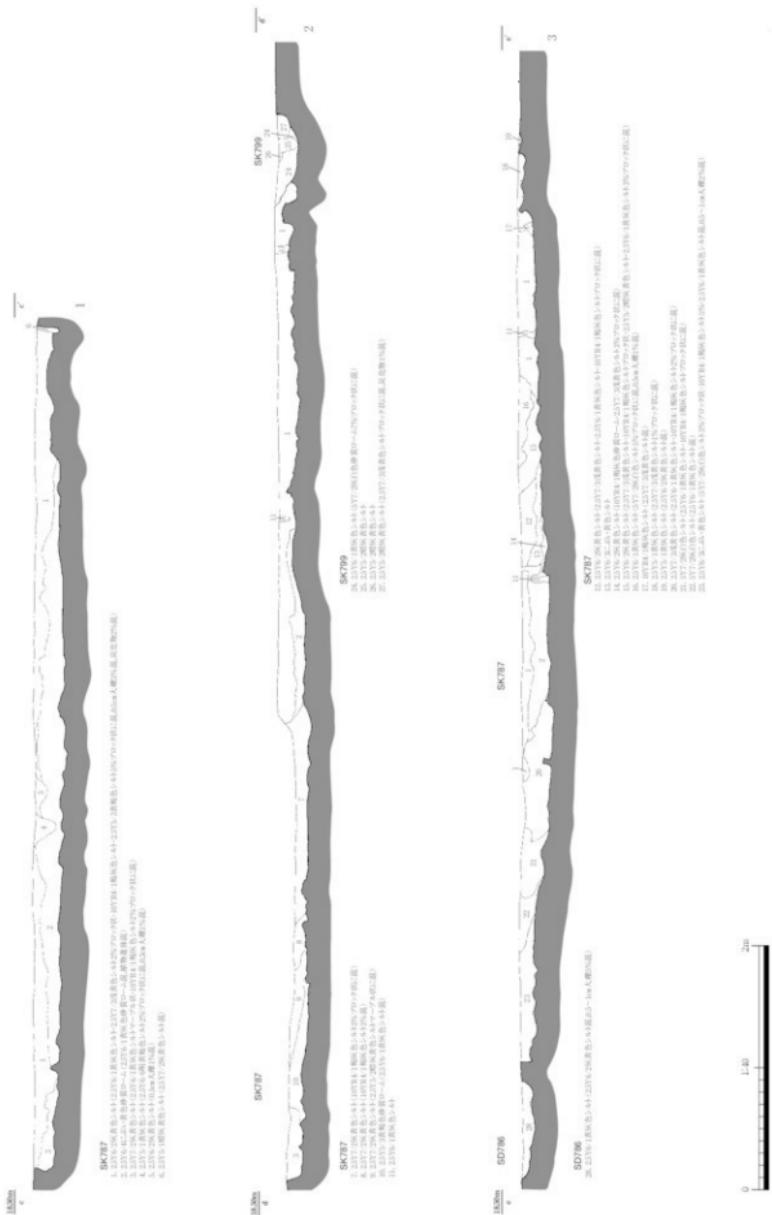


第28図 遺構実測図 (1/150)  
A 5地区 SB13



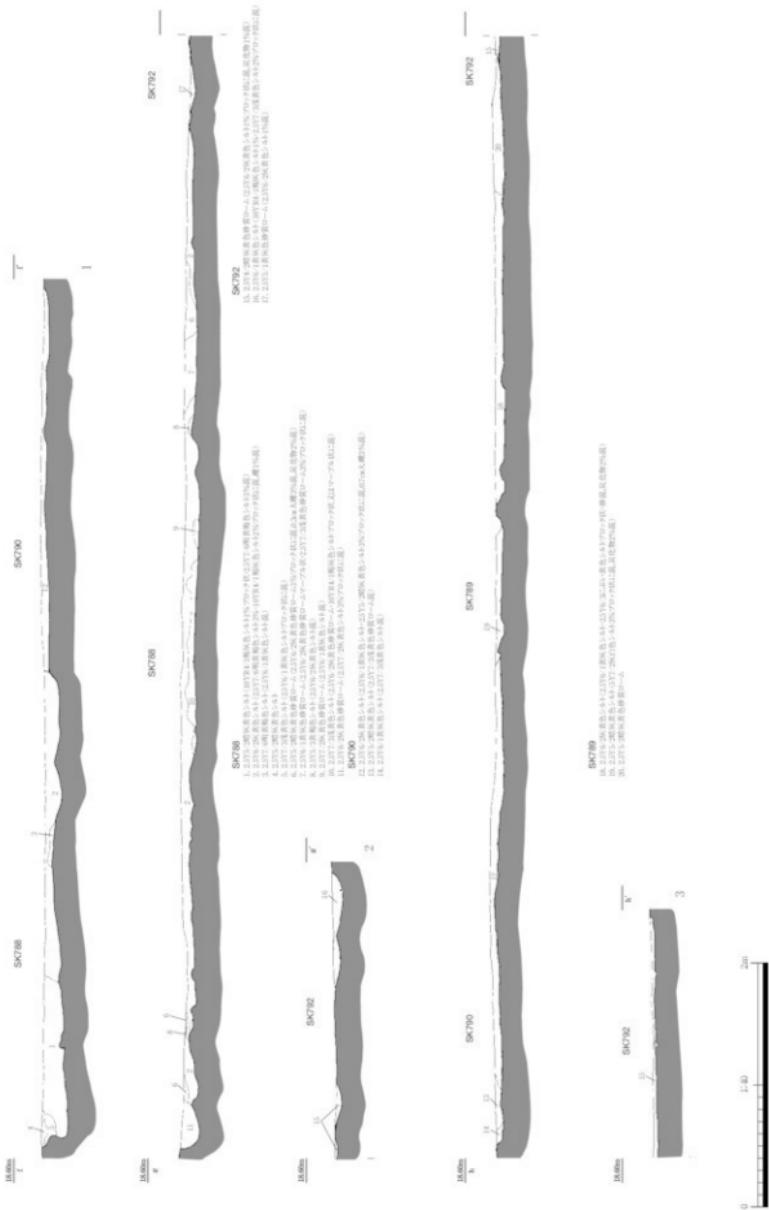
第29図 遺構実測図 (1/40)

A 5 地区 S B13 1. S K778 · S K779 · S K770 · S K770 · S D770 · S D772 ~ S D774  
2. S K775 · S K781 ~ S K784



第30図 遺構実測図 (1/40)

A 5地区 S B13 1. S K787 2. S K787 · S K799 3. S K787 · S D786

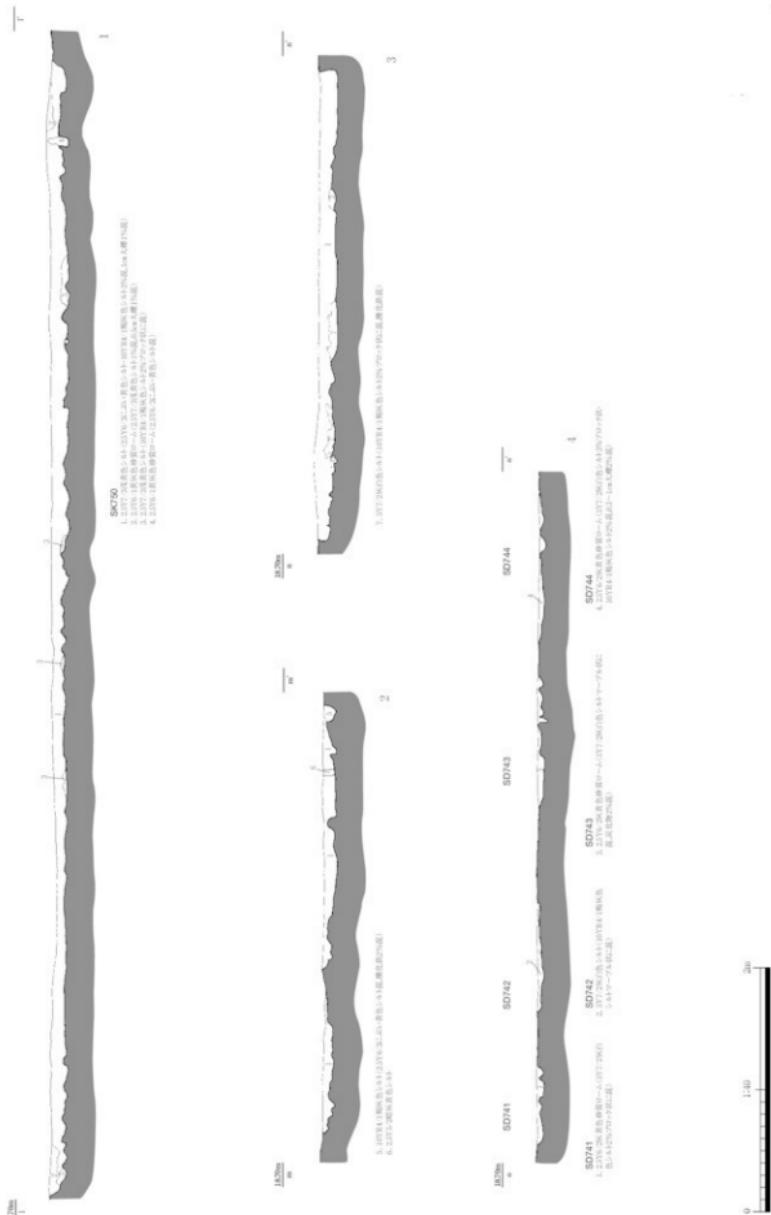


第31図 遺構実測図 (1/40)

A 5地区 SB13 1. SK788・SK790・SK792 2. SK792 3. SK789・SK790・SK792

第32図 遺構実測図 (1/40)  
A 5地区 S B13 1・2, S K791 3, S K797・S K800





第33図 遺構実測図 (1/40)

A 5 地区 SB13 1~3. S K750 4. SD741~SD744

鋳型はその形状から全て梵鐘と考えられ、中子は残っておらず外型のみである。

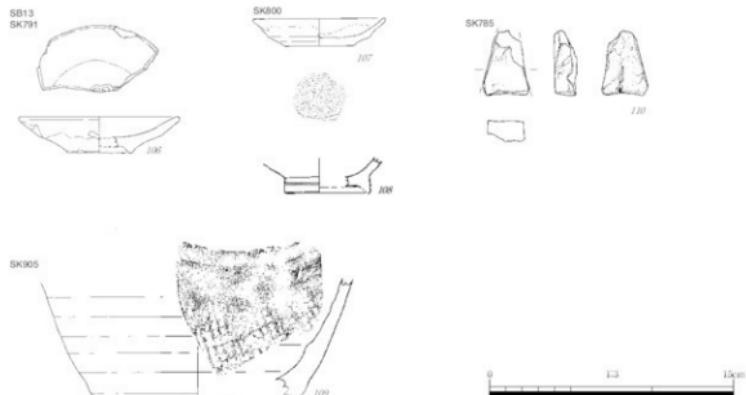
I11～I13は龍頭部分で半円形の割型。I11は、ヘラ押して表現したウロコと14条の沈線で表現した炎の部分からなる。I12・I13は欠損部分が多いが、ウロコの一部が残る。I12にはユビオサエの痕が残る。I13は割型の接合部分と考えられる平坦面が残る。

I14～I23は文様はないが、その厚さや胎土（にぶい黄橙色）から龍頭割型の外側と考えられるもの。I14・I15は残存部分が弧状で、表面に荒砂が付着している。I16は平坦面が2つ残り、胎土にはガス抜きをよくするためのワラ痕が残る。I17は平坦面が1つ残る。I18は平坦面が3つあり、1面には小さな突起が付くなど、他のものと様相が異なるため、違う部位なのかもしれない。I19・I21は平坦面が1つ、I20は平坦面が2つ残り、それぞれ型ばらしの際につけられたと見られる断面V字状の鋭い傷跡が残る。I22は平坦面が1つ残り、胎土にワラ痕が残り、表面に砂粒が固まっていた。I23は表面に鉄こぼれと考えられる銅が多く付着していた。胎土にはワラ痕が残る。

I24～I26は長軸短軸ともに内湾していることから笠部分と考える。径は推定40～56cmを測る。

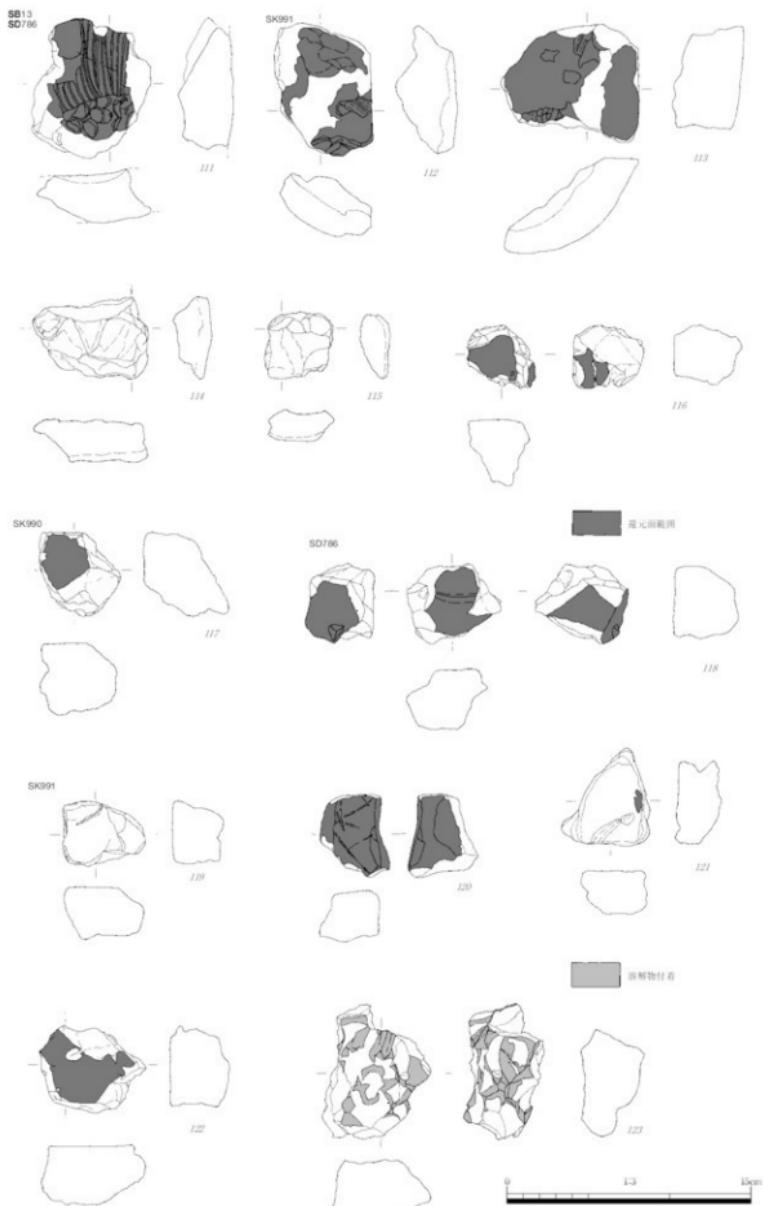
I27～I39は1～2条の凹線があり、帯の紐部分と考える。I27・I29・I31～I33・I35・I37・I39は1条の凹線（紐1本）、I28・I30・I34・I36・I38は2条の凹線（紐2本）が残っている。I27・I28・I31・I32・I39は内湾せず鋳型面が平坦なため、継帶であろう。I28の2条の凹線間の長さである紐間は3.8cm。I29は内湾し、推定径52～56cm。I30は内湾し、推定径54～56cm、紐間2.3cm。I33はやや内湾し、推定径76～80cmである。I34は推定径52～54cm、紐間0.3cm。I35は推定径52～54cmである。I36は推定径62～70cm、紐間0.5cm。鋳型面のみうすく残る。I37は欠損部分が多いが、1条の凹線が残り、推定径46～54cm。I38は2条の凹線の他、側面が残る。推定径60～64cm。I39は欠損部分が多いが、1条の凹線が残る。以上、推定径から見ると、I29・I30・I34・I37が上帶（推定径46～56cm）、I36・I38が中帶（推定径60～70cm）、I33が下帶（推定径76～80cm）にそれぞれ相当するであろう。

I40は文字の埋型。池の間に書かれる銘文の一部と考える。2字あるが判読できない。



第34図 遺物実測図 (1/3)

A 5地区 S B13 S K785(I10) S K791(106) S K800(107・108) S K905(109)



第35図 遺物実測図 (1/3)

A 5 地区 SB13 SK990(117) SK991(112~116・119~123) SD786(111・118)

141・142は帯の紐部分の交点。141は欠損部分が多いが、2条の凹線が直角に交わり、横帯と縦帯との交点と考える。142は2条の凹線が鋭角に交わり、縦帯と中帯との交点と考える。

143～148は下帯紐・駒の爪と考えられるもの。143は1条の凹線（下帯紐1本）と、内湾する部分（駒の爪）からなる。推定径68～74cm。144はゆるく内湾し、駒の爪と考える。推定径70～72cm。145・146は2条の凹線（下帯紐2本）と、内湾する部分（駒の爪）からなる。接合しないが、同一個体と考えられる。推定径76～80cm。147は欠損部分が多いが、1条の凹線（下帯紐1本）と、内湾する部分（駒の爪）からなる。推定径72～78cm。148はゆるく内湾し、駒の爪と考える。

149～153は龍の埋型。草の間に相当するものと考える。149～151・153はウロコとツメ部分が残り、152はツメのみ残る。厚さは0.7～1.3cm。153は側面2面が残る。他は側面1面。いずれも接合せず、全体を復元できないが、1体の龍となろう。

154～163は部位を特定できない鋳型。160・161は平坦面の表面が赤色化している。158は推定径56～68cm。159は大型の鋳型であるが、平坦で径が出ず、失敗品か。162・163は平坦面1面のみ。162は胎土にワラ痕が多く見られた<sup>(注2)</sup>。

以上の鋳型片から梵鐘を復元すると、駒の爪上部が径約70～80cmとなり、口径は約80～85cmと推定される。口径との関係で推定すると、総丈は140～150cmと考えられる。県内で紀年名のある梵鐘では同じ大きさのものは、砺波市万福寺（1759年）口径85cm・総丈146cm、高岡市瑞龍寺（1768年）口径87cm・総丈148cm、富山市念法寺（1822年）口径76cm・総丈136cmなどがある。ただし、出土した鋳型片は小破片ばかりで全体を復元することは難しく、あくまで推定<sup>(注3)</sup>。

鋳型片は、土台建物内のSK991から集中的に出土している他は、その周囲から数点出土している程度で、SK991は鋳造遺構の可能性がある。このことから土台建物は、梵鐘鋳造施設と関係することがわかる。しかし、見つかった鋳型片は、梵鐘1体分弱しか無く、梵鐘をつくるための施設というよりは、出吹きであろう。付近にはこの遺構から北西約200mに法筵寺という古寺があり、戦争供出まで梵鐘があったという。現在では残念ながら記録は残っていないが、立地からこの寺の梵鐘と関係する可能性が高いと考える。つまり、法筵寺が梵鐘をつくるために出吹きで工人を招いたものと考えられる。高岡は当時銅器を奨励しており、旧城下町金屋町には多くの工人がいた。これらの工人が出てきて、下老子笠川遺跡で梵鐘鋳造を行ったのである。

18～19世紀の梵鐘鋳造遺構の検出された遺跡は、福島県伊達郡川俣町河股城跡（18世紀末～19世紀前半）<sup>(注4)</sup>、東京都国立市閔鶴物跡遺跡（18～19世紀）<sup>(注5)</sup>、神奈川県愛甲郡清川村北原遺跡内長福寺址（18世紀前半）<sup>(注6)</sup>、滋賀県栗東市辻遺跡（18～19世紀）<sup>(注7)</sup>、大阪府枚方市田中家鋳物工場跡（17～19世紀）<sup>(注8)</sup>などがある。このうち下老子笠川遺跡と同様に出吹きと考えられているのは、長福寺址である。

注2 出土した鋳型については、「(稿)老子製作所の光舟實・西川實の両氏に遺物を呈見していただき、ご教示いただいた。なお、「(稿)老子製作所の創業者老子次石専門は、高岡市福岡町下老子出身」といわれている。何かの書籍でもあるか。

注3 猛内の梵鐘については、森藤善夫、1998「道山・石川梵鐘考」、2001「筑・富山・石川梵鐘考」北陸石仏の会が詳しい。

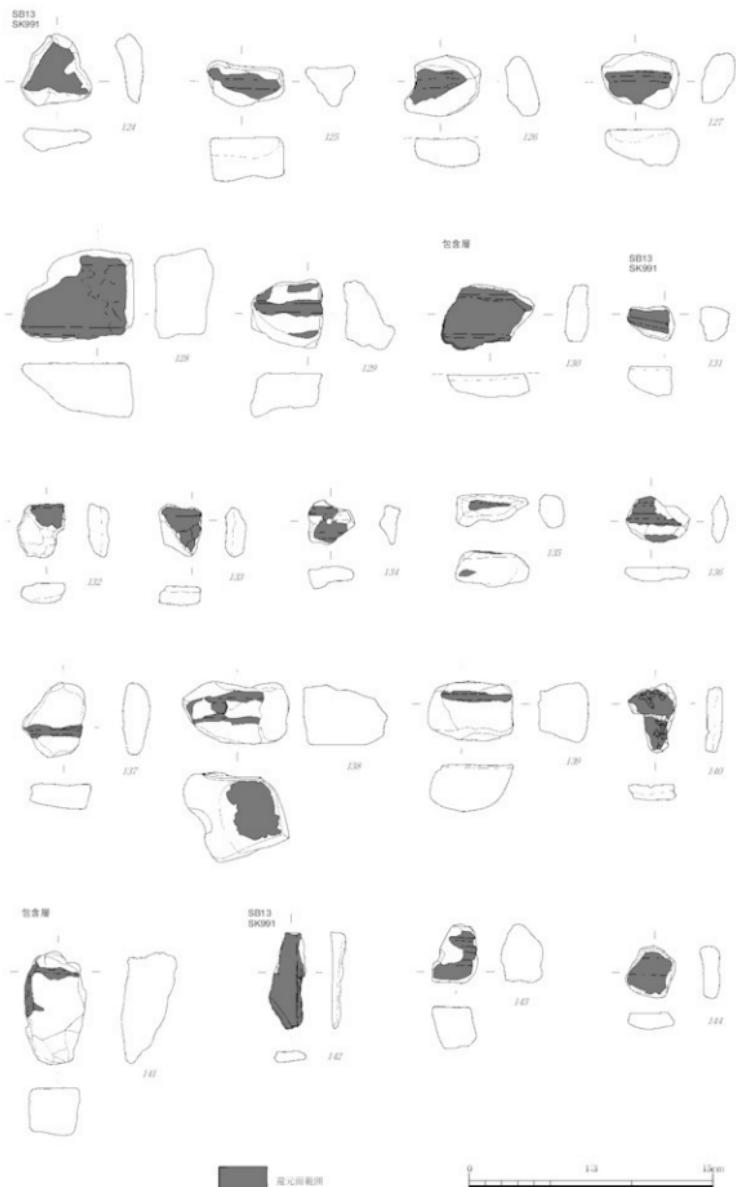
注4 高橋圭次、西川義、金子勝利、2002「河原崎山発掘調査報告書」川俣市教育委員会

注5 和田和、野瀬利行、真木本克美、2001「閔鶴物跡遺跡」井手古墳群調査会

注6 佐藤和也、長谷川正、2000「北原遺跡」北原遺跡調査会、北原遺跡調査会

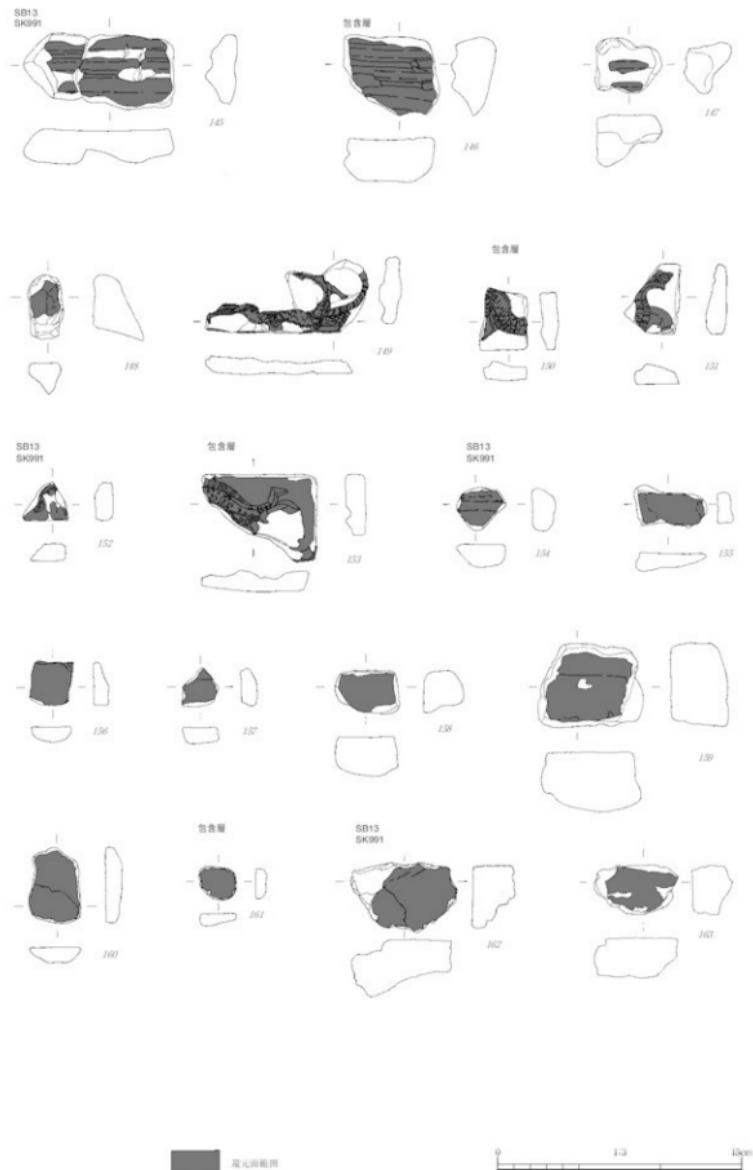
注7 佐藤和也、2000「辻遺跡」田中家の光舟實文化財研究調査会、田中家研究委員会

注8 井出晶子・大竹弘之、2000「田中家鋳物工場跡」(稿)枚方市歴史文化財研究調査会、枚方市教育委員会



第36図 遺物実測図 (1/3)

A 5 地区 SB13 SK991(124~129・131~140・142~144) 包含層(130・141)



第37図 遺物実測図 (1/3)

A 5地区 SB13 SK991(145・147~149・152・154~160・162・163) 包含層(146・150・151・153・161)

## C 井戸

510号井戸（S E510, 第38・40図, 図版24・37・39・44・63・64・69・71）

福岡町史跡「一步の菩提樹」東側のA 4 地区南東壁寄りで検出した結桶積みの井戸である。近世の溝 S D505を切る。桶を2段組んで井戸側とし、水溜には木臼を据えていた。下部構造については、崩落の危険のため確認取り上げ調査のみを行っており、図示はしていない。上段の桶は遺存状況が悪かったが、下段の桶は高さが53cmで、4箇所に竹製の箍が巻かれていた。裏込め土には砂礫を含む黄灰色粘土質ローム・灰色シルトが充填されており、下段の桶と木臼の間には固定のために拳大の石を詰め込んでいる。木臼は上臼の中央の芯棒部分を削り抜き水溜としている。

遺物には越中瀬戸・肥前陶器・近世磁器・木製品・石製品がある。164・165は越中瀬戸の鉄軸の丸皿で、口縁部は外反し、内面は内凸で、軸止めの段はない。高台は削り出し高台である。166は肥前陶器の灰釉皿で、口縁部は内湾する。167は肥前陶器の皿。外面は透明釉が高台内側まで、内面には緑釉が施釉され、見込みは蛇目釉剥ぎされる。遺物の時期は17世紀後半～18世紀である。木製品は井戸側材の他に、竹製の柄杓・箸・下駄の歯などがある。169は節を利用して作られた直径5.8cmの竹製の柄杓で、柄は側面中央から下方に向かって斜めに差し込んで装着されていたと推定される。口縁部は内側に面を取って薄く仕上げられている。171は露卯下駄の歯の一部で、ホゾ部分は欠損する。樹種はヒノキ亜科。179の砥石は1面のみにしか砥面が残ることから、破碎したものが廃棄されたと考えられる。180は石臼の下臼。石材は、いずれも凝灰岩。

895号井戸（S E895, 第38・41図, 図版25・64）

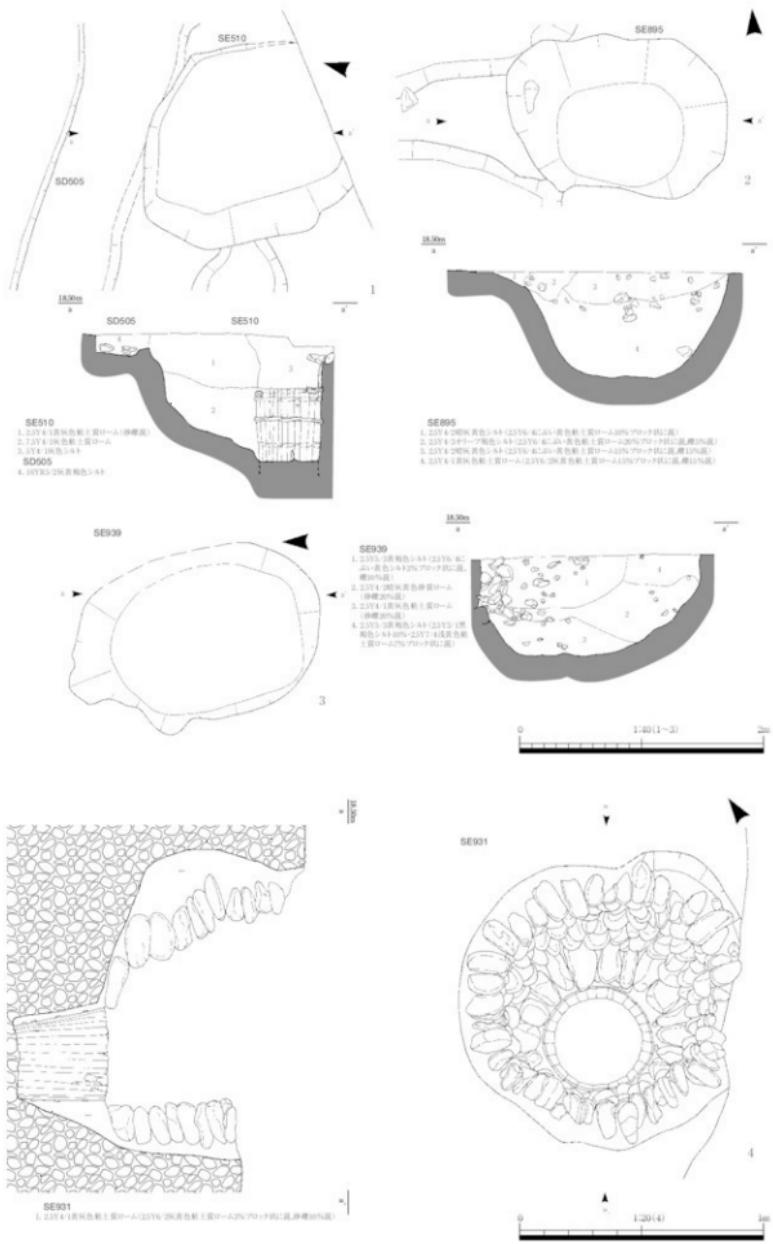
A 5地区の楕円形の掘形をもつ素掘りの井戸。長軸約1.9m, 短軸1.25m, 深さは87cmと井戸としては浅い。周囲は方形の土坑などが密集し、その中にあって単独で、深さがあることから井戸である可能性を考えた。埋土は上層には暗灰黄色シルトにぶい黄色粘土質ロームブロックが混じった土、下層には黄灰色粘土質ロームに灰黄色粘土質ロームブロックが混じった土が堆積しており、ともに礫が混じる。堆積状況から井戸側等の施設があったとは考えにくい。

遺物には内外面総黒色漆の漆器椀（181）がある。外面には僅かに赤色漆の痕跡が残る。底部の器壁は厚く、体部との境は曖昧で、底部は丸味を帯び摩滅している。樹種はブナ。

931号井戸（S E931, 第38・41図, 図版24・25・64・65）

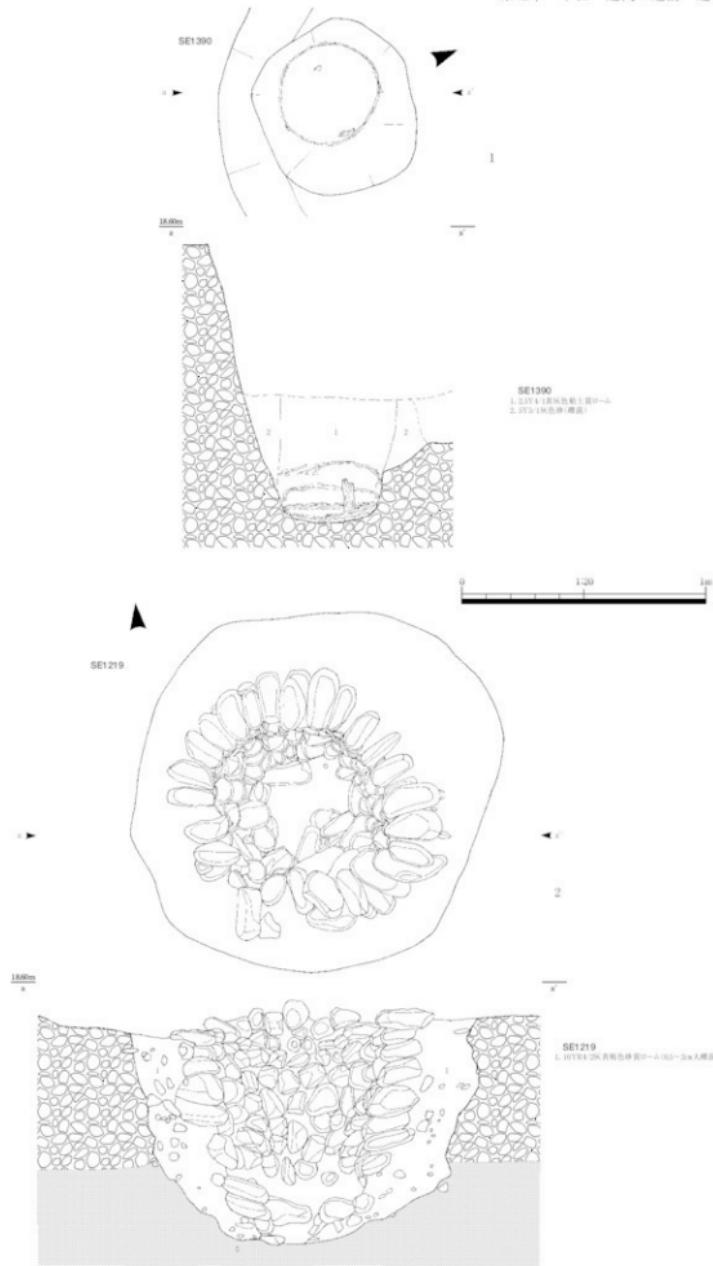
A 5地区南東壁寄りで検出した石組井戸である。区画溝 S D901の内空間で検出したが、周辺には不整形の土坑を検出したのみで、建物等は検出できなかった。平面形は直径1.1mの円形であるが水溜が穴の中心より南に寄っており、そのため石組も南側がほぼ垂直の立ち上がりを示すのに北側はやや膨らんで積まれている。これは穴の掘形の制約を受けたようで、水溜用に深く掘った位置が著しく南に寄っている。深さは1.35mを測り、砂礫層を掘削している。裏込め土は砂礫の混じる黄灰色粘土質ロームで、埋土は上層が暗灰黄色シルト、下層が黒褐色粘土質ロームである。水溜の桶（190）は正位で据えられており、途中崩落したが竹製の箍で4箇所縛められていた。側板は27枚で、長さは約90cmである。樹種はサワラである。その上の石組は下から時計回りに積まれている。

井戸の中からは珠洲、漆器・茶筅・しゃもし・箸（183～185）・円形板などの木製品が出土している。漆器（182）は内外面総黒色漆の椀で、内面には蓬萊文と思われる文様が赤色漆で描かれる。高台は低くやや踏ん張る形態である。樹種はブナ。茶筅（186）は直径約3cmの竹を長さ約13cmに裁断し、一方の端を約6cmにわたって細かく裂いたものである。187は厚さ0.8cmの扁平な板状の木製品で、一方の先端が先細りに加工されている。欠損品であるが、匙等の柄と考えられる。188・189は円形板

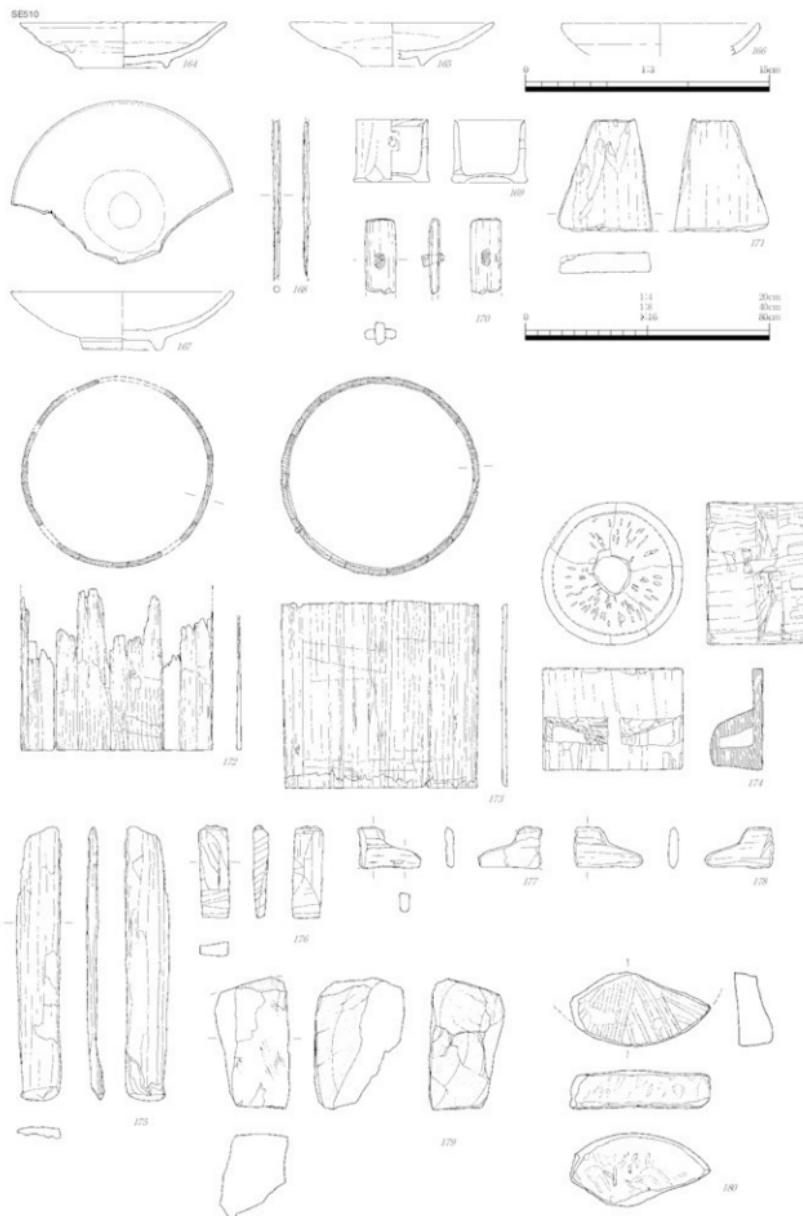


第38図 遺構実測図 (1/40・1/20)

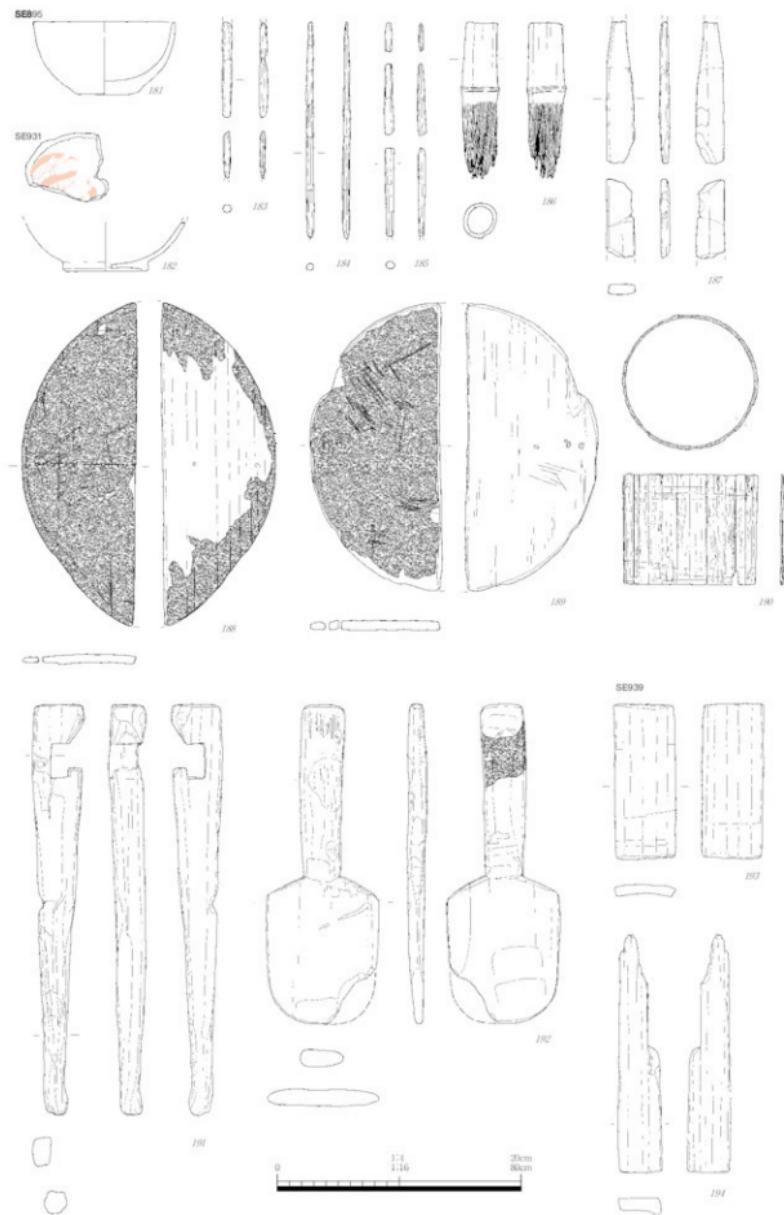
A 4・A 5地区 1. SE510・SD505 2. SE895 3. SE939 4. SE931



第39図 遺構実測図 (1/20)  
A 6 地区 1. S E1390 2. S E1219



第40図 遺物実測図 (164~167・179 1/3, 168~171・175~178 1/4, 180 1/8, 172~174 1/16)  
A地区 SE510



第41図 遺物実測図 (181~189・191~194 1/4, 190 1/16)  
A 5 地区 S E895(181) S E931(182~192) S E939(193~194)

で、共に縁辺に小孔が2孔穿たれる。I88は表面全面と裏面周縁部が、I89は裏面全面が炭化している。これらの状況から蓋として使用されていた可能性が考えられる。I91はホゾ穴を持つ加工木。下端は断面円形の先細りの形態を呈し、上端は逆台形状に板状に削り出されており幅1.5cm、長さ3cmの長方形のホゾ穴が穿たれる。組み合わせ式の部材の一部と考えられる。I92は一部欠損するがほぼ完形のしゃもしである。柄の長さは約14cm、一部黒色に変化する所が認められる。二次的被熱か。匙部分の周縁部は丸く仕上げられる。

この井戸は井戸の形態、及び出土遺物の内容から中世後半のものと考えられ、この西側で検出されている素掘りの井戸 S E895・939に比べて時期は古いと考えている。

#### 939号井戸 (S E939, 第38・41・42図, 図版65)

A 5 地区 S B 6 の南で検出した素掘りの井戸。南側の土坑群に伴うと考えられ、建物には伴わない。S E895と同様の形態で、長軸2m、短軸1.3m、深さ83cmである。埋土も同質な様子で、黄褐色シルト・暗灰黄色砂質ロームを主とした土に砂疊が混じるが、堆積状況には北側と南側に違いが見られる。遺物に桶側板が出土していることから井戸側や水溜に桶を利用した可能性もある。

I93・I94は桶側板で、I93は長さ12.8cmの小型の桶である。I95は平面形が長方形の連歯下駄で、長さは14cm、最大幅が前歯より若干前にある。緒穴は裏面から長方形に穿たれており、歯は幅広く、歯の間には線状の加工痕が残る。形態から16世紀後半以降と考えられる。この他の遺物には、珠洲・越中瀬戸・肥前陶磁がある。

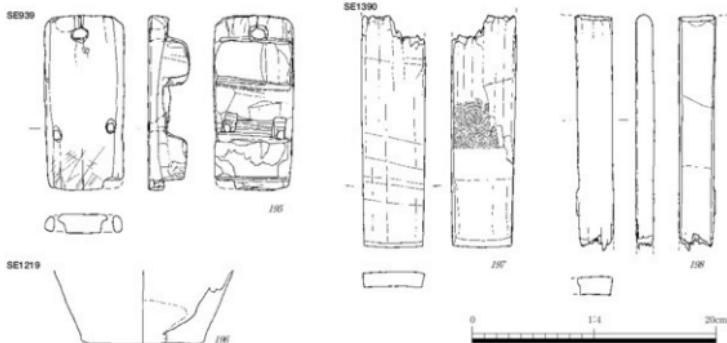
#### 1219号井戸 (S E1219, 第39・42図, 図版25・33)

A 6 地区の区画溝に囲まれた空間に位置する、石組井戸である。掘形の規模は直径1.6m、深さは91cmを測る。水溜施設は残存していないかった。掘形の埋土は疊混じりの砂（地山を埋め戻した土）と砂質ロームの互層になっており、石を組みながら少しづつ土を入れ固めていった様子が窺える。石組内部の埋土は灰黄褐色砂質ロームで、遺物は土師器・珠洲・越中瀬戸が出土している。

I96は珠洲の壺の底部である。ロクロ成形で、底部は静止糸切りである。内面に降灰がみられる。

#### 1390号井戸 (S E1390, 第39・42図, 図版25)

A 6 地区の区画溝に囲まれた空間に位置する。S K1165掘削中に検出した。壺が3段とこれに桶側板1枚が立った状態で検出され、井戸底部の水溜施設のみが残存する。壺の最大径は42cmを測る。井戸内部の埋土は黄灰色粘土質ロームで、掘形と思われる部分は疊の混じる灰色砂である。



第42図 遺物実測図 (1/4)

A 5・A 6 地区 S E939(I95) S E1219(I96) S E1390(I97・I98)

なお底から肥前陶器の皿が出土しており17世紀後半～18世紀前半以降に埋没したものと考えられる。

197・198は桶の側板で、同一個体かと考えられる。197は外面に箍の痕跡がある。

#### D 土坑

145号土坑（SK145、第43図）

A2地区中央に位置する楕円形の土坑である。長さ1.79m、幅1.18m、深さ28cmを測り、埋土は灰色砂質ロームである。遺物は出土していない。

174号土坑（SK174、第43・55図、図版38・49）

A2地区のSB1の南東に位置する隅丸長方形の土坑である。長さ2.81m、幅2.40m、深さ10cmと浅く広い土坑で、埋土は灰色砂質ロームである。

199は越中瀬戸の鉄軸火入れである。18世紀か。200は瀬戸美濃の太白手陶器皿である。体部外面は草文、体部内面は草花文、見込みは二重圓線の中に花弁文がある。18世紀後半～19世紀前半である。

176・212号土坑（SK176・212、第43図）

A2地区のSB3の北側に位置する土坑群である。SK176は長さ1.90m、幅1.40m、深さ15cmの不整形な土坑で、埋土は灰色砂質ロームで炭化物が混じる。SK212はSK176と重複する土坑で、長さ2.60m以上で幅80cm、深さ10cmの楕円形の土坑である。埋土は黄灰色砂質ロームと灰色砂が1:1で混じり、直径10～30cm大の砾が多数捨てられている。遺物は出土していない。

217号土坑（SK217、第44図、図版26）

A2地区中央に位置し、長さ1.82m、幅1.37m、深さ9cmの不整形の土坑である。内部からは人骨片<sup>(注9)</sup>が炭化物と共に多量に出土した。骨片は白くなっている、恐らく火葬されたものであろう。また、炭化物に混じって小さな焼土ブロックを確認したが、土坑の底全体に広がるような焼土面は確認できず、骨は他所で焼かれてここに埋められた可能性が高い。

256号土坑（SK256、第43図）

A2地区のSB1の南東に位置し、長さ1.44m、幅1.10m、深さ29cmの楕円形を呈する土坑である。埋土は灰色砂質ロームである。また同程度の規模をもつSK260がSK174を挟んで対置しており、これらの土坑の配置がSB1と同じ軸線上に並ぶ。遺物は出土していない。

282・283号土坑（SK282・283、第45・55図、図版26・37・66）

A2地区のSB1の北西2mに位置する土坑で、SB1と同方位を示す。SK282とSK283には重複関係が成立するが、掘形および形態から同一遺構の可能性もある。両者を合わせた規模は、東西7.12m、南北1.58m、深さ14cmの隅丸長方形の土坑である。西側のSK283には5～30cm大の焼けた石の集石、東側のSK282の底部には有機物層と炭化物層が広がっていた。

202は、越中瀬戸の灰釉皿である。18世紀。203は木造りの連歛下駄で、近世のものである。ヤシヤブキの板目材を堅木取りしている。台表が木裏側になる。後方は欠損しているが、隅丸長方形である。台裏中央部の断面が、逆台形にはなっていないが、丸く盛り上がっている。

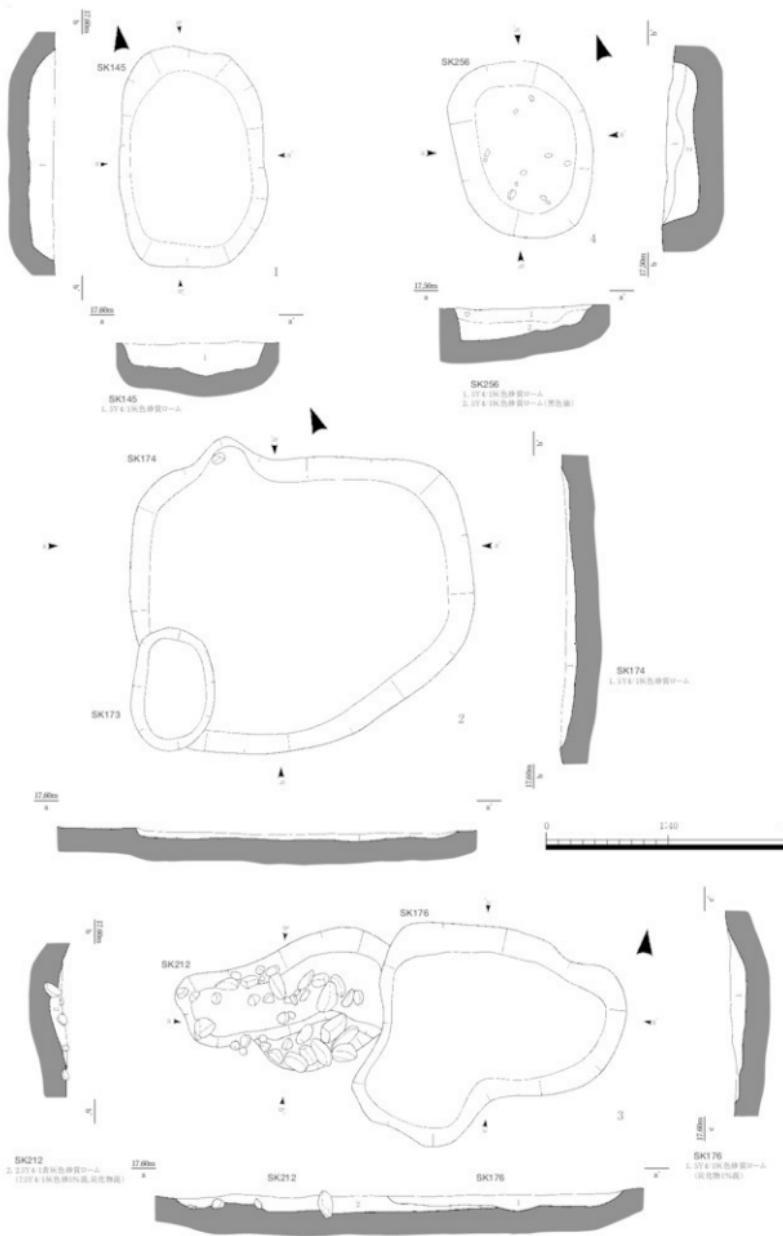
312号土坑（SK312、第46図）

A3地区のSB12の北側に位置し、長さ1.78m、幅1.51m、深さ9cmの方形の土坑である。SB12とは方位を異にする。埋土は暗灰黄色砂質ロームに浅黄色粘土質ロームがブロック状に混じる。遺物は肥前磁器が出土した。

316号土坑（SK316、第46・55図）

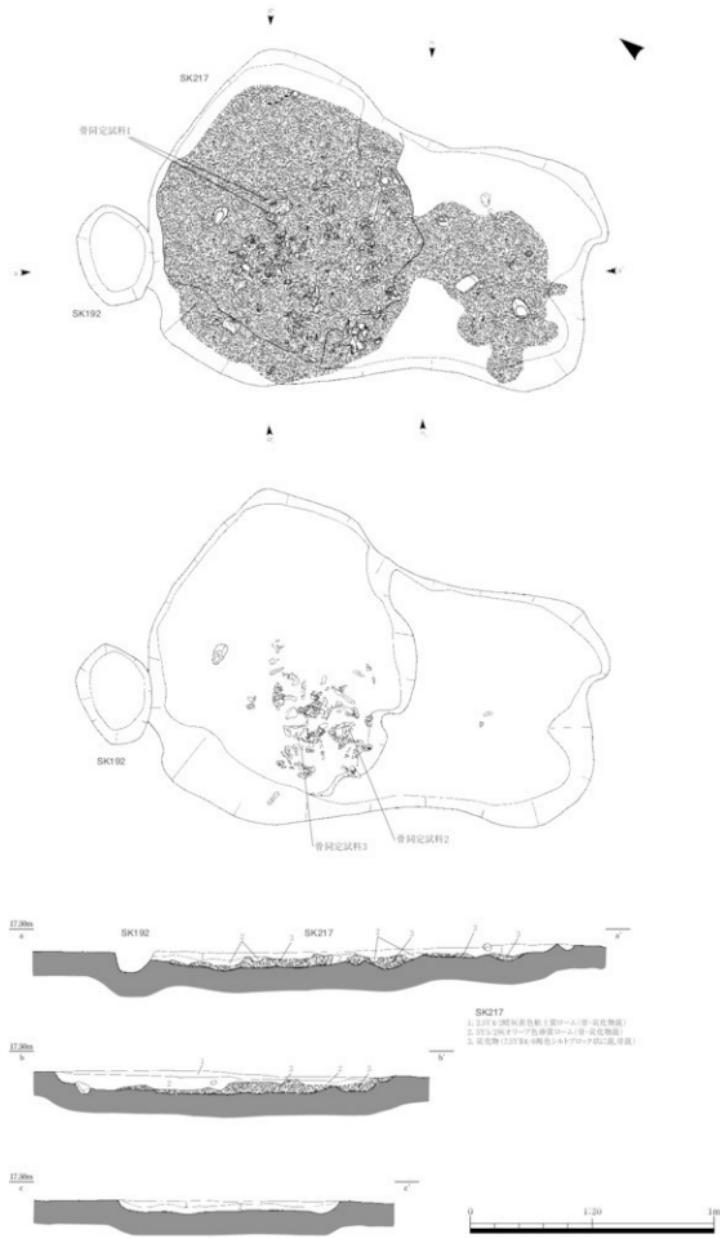
A3地区のSB12の北西に位置し、長さ1.54m、幅1.40m、深さ23cmの方形の土坑である。SB12

注9 墓の開定については、幕末明治初期開定を参照されたい。

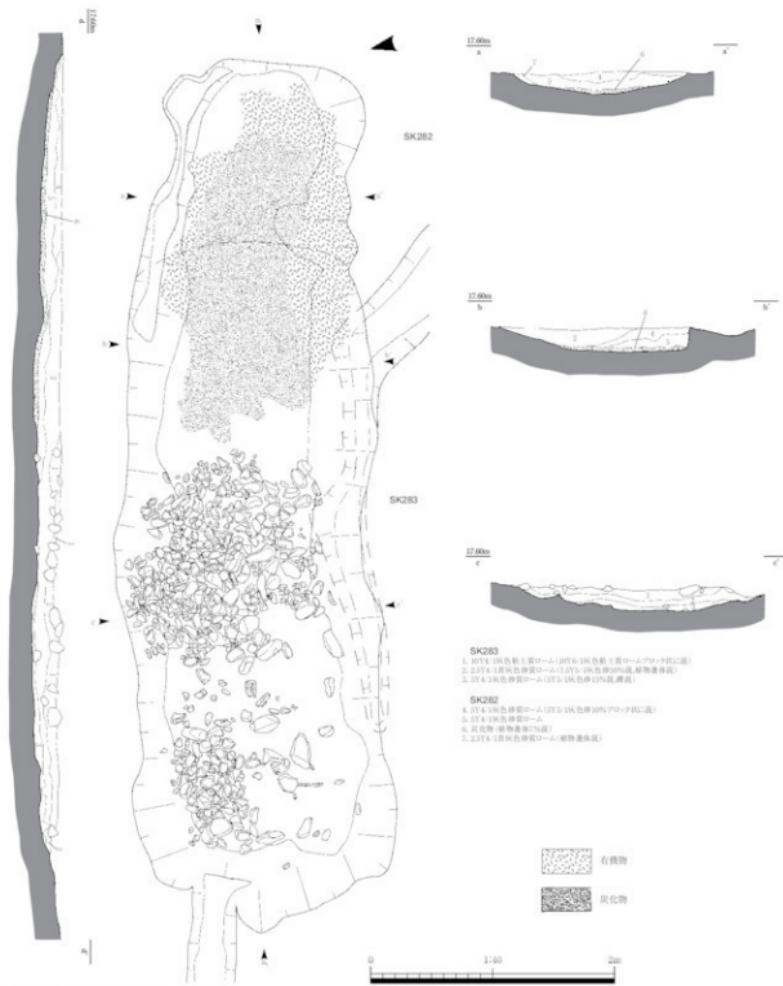


第43図 遺構実測図 (1/40)

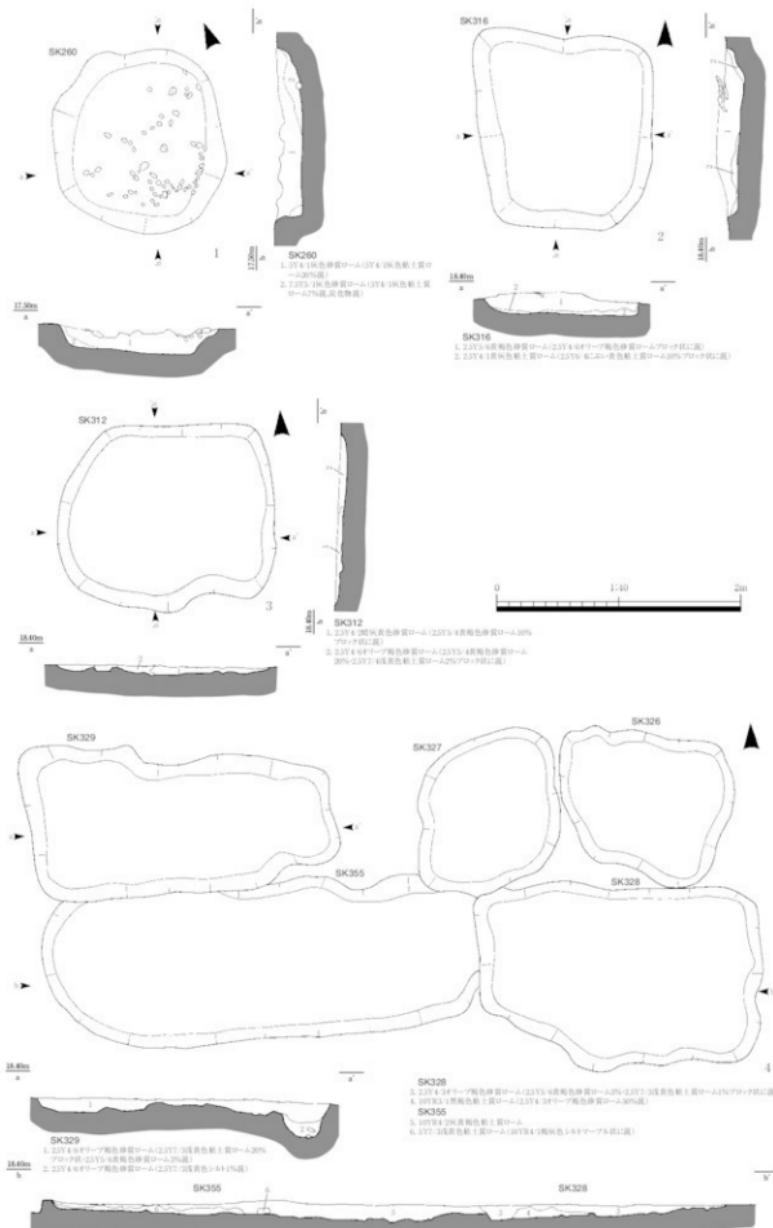
A 2地区 1.S K145 2.S K174 3.S K176・S K212 4.S K256



第44図 遺構実測図 (1/20)  
A 2 地区 1. S K217



第45図 遺構実測図 (1/40)  
A 2 地区 SK282・SK283



第46図 遺構実測図 (1/40)

A地区 1.SK260 2.SK316 3.SK312 4.SK328・SK329・SK355

とは方位を異にする。近代陶磁器や薬瓶などのガラス類が投げ込まれていた。

204は、四角形の断面で、先端がカーブを描きながら直角に曲がる鉄製品である。

328～330・351～353・355号土坑（S K328～330・351～353・355, 第46・47図）

A 3 地区 S B12 の西側10mに位置する土坑群で、方形および長方形を呈する土坑が多い。S B12とは方位が異なり、S K350・353以外は掘形が浅い。長さ1.4～3.5mと様々な規模をもつ土坑群で、ブロック状およびマーブル状に混じった埋土をもつ。遺物は須恵器・肥前陶磁などが出土した。

506・507号土坑（S K506・507, 第49・55図, 図版37～39）

A 4・5 地区境の町道寄りで検出した不整形の2基の土坑。S D505を切る。重複する2基はS K506がS K507より新しい。S K506の埋土は上層に灰黄褐色シルト、次いでにぶい黄褐色粘土質ロームが水平堆積するもので、断面は偏った逆台形状である。

遺物はS K506から越中瀬戸（207）、S K507から越中瀬戸（208～210）・肥前陶器が出土している。207は丸皿。口縁部には褐色の鉄釉が施され、内底面には釉止めの段がないが、重ね焼き痕が残る。底部は削り出し高台で、高台内側には判読できないが、墨痕が残る。208も丸皿で、口縁部のみに鉄釉が施され内底面は内禿である。高台は削り出しの高台で、その径は207より小さく、その内側には「十」の墨痕が残る。209は内底面内禿の鉄釉向付で、削り込み高台内側には直線上の墨痕が残る。210は擂鉢の底部で、10本1束の卸目が反時計回りに施される。いずれも時期は17世紀後半～18世紀前半のものである。

511号土坑（S K511, 第49図）

A 4 地区のS K506・507の西に位置する不整形の土坑。床面は平坦ではなく段を持つ。埋土は黄灰色シルトの单層である。遺物は越中瀬戸・肥前陶器がある。

523号土坑（S K523, 第48・55図, 図版37）

A 4 地区に位置し、浅くて不整形な落ち込み状の土坑。灰黄褐色シルトの单層で、周囲のS K525～528に切られる。遺物には土師器・瀬戸美濃・越中瀬戸・肥前陶磁がある。212は瀬戸美濃で、灰釉丸皿の口縁部小破片である。

528号土坑（S K528, 第48図）

A 4 地区のS K523の南に重複し、これとS K527を切る。平面形は調査区外へ延びるため不明で、深さは22cmである。埋土は上層に灰黄褐色シルト、下層に浅黄色粘土質ロームが水平堆積する。遺物は肥前陶器がある。

601号土坑（S K601, 第49図, 図版27）

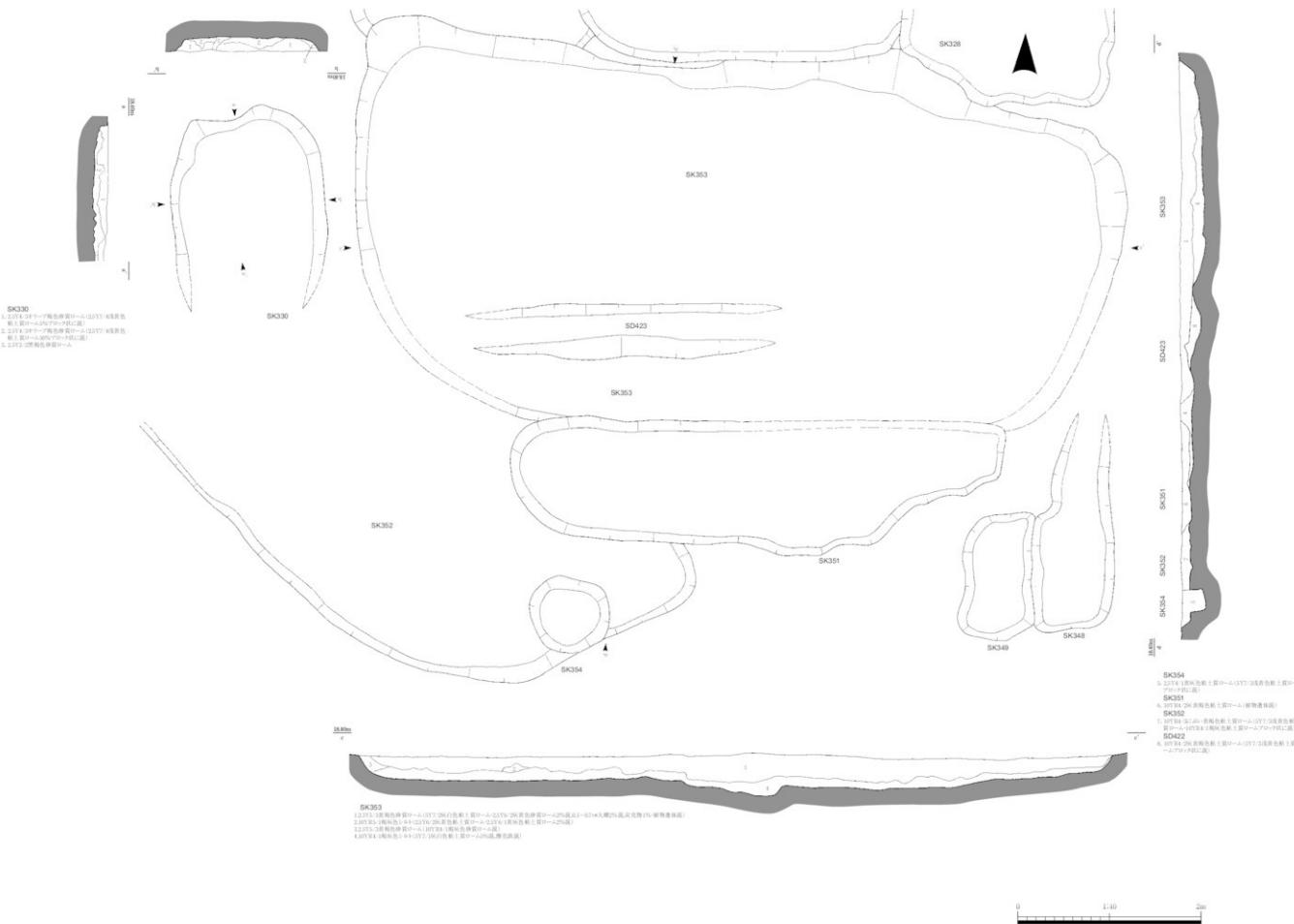
A 5 地区北端で検出した長方形の土坑。長軸4m, 短軸2.3m, 深さ約20cmで、しまりのある黄灰色砂質ローム、にぶい黄色シルト、黄灰色砂質ロームが不規則に堆積する。床面は礫層まで達しており、土取り穴の一種かと考えられる。遺物は、越中瀬戸・肥前陶磁が出土している。

633号土坑（S K633, 第49図, 図版27）

A 5 地区に位置する、長辺1.2m、短辺1mの長方形の土坑。中層の厚さは10cmで、焼土が混じる炭化物層の堆積が認められた。その上下層には炭化物の混じりはあまり認められず、壁面には焼けた痕跡は認められなかった。この北側には軸を同じくして同規模のS K634を検出したが、この土坑には炭化物の堆積は認められなかった。遺物は瓦質土器が出土している。

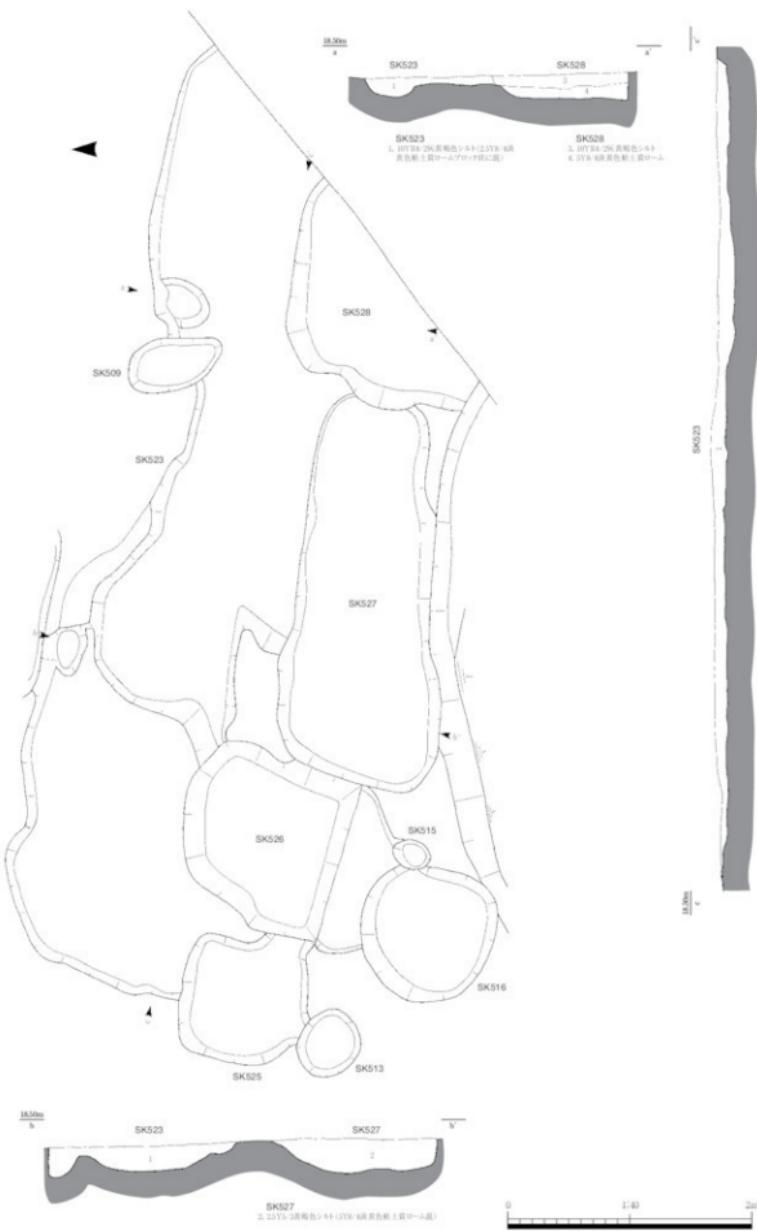
860号土坑（S K860, 第54図）

A 5 地区に位置する、溝状に南北に細長く延びる土坑。北側のS K892、南側のS D871を切る。床

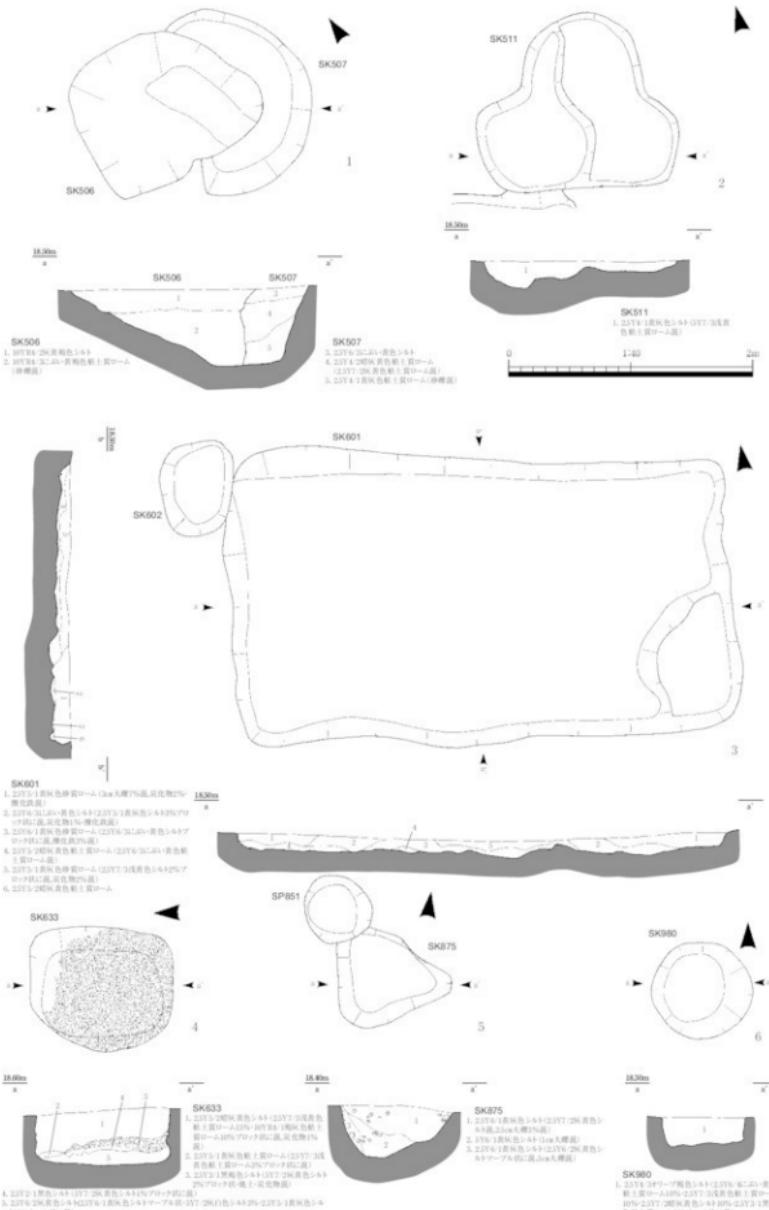


第47図 遺構実測図 (1/40)

A3地区 SK330~SK351~SK354~SD423

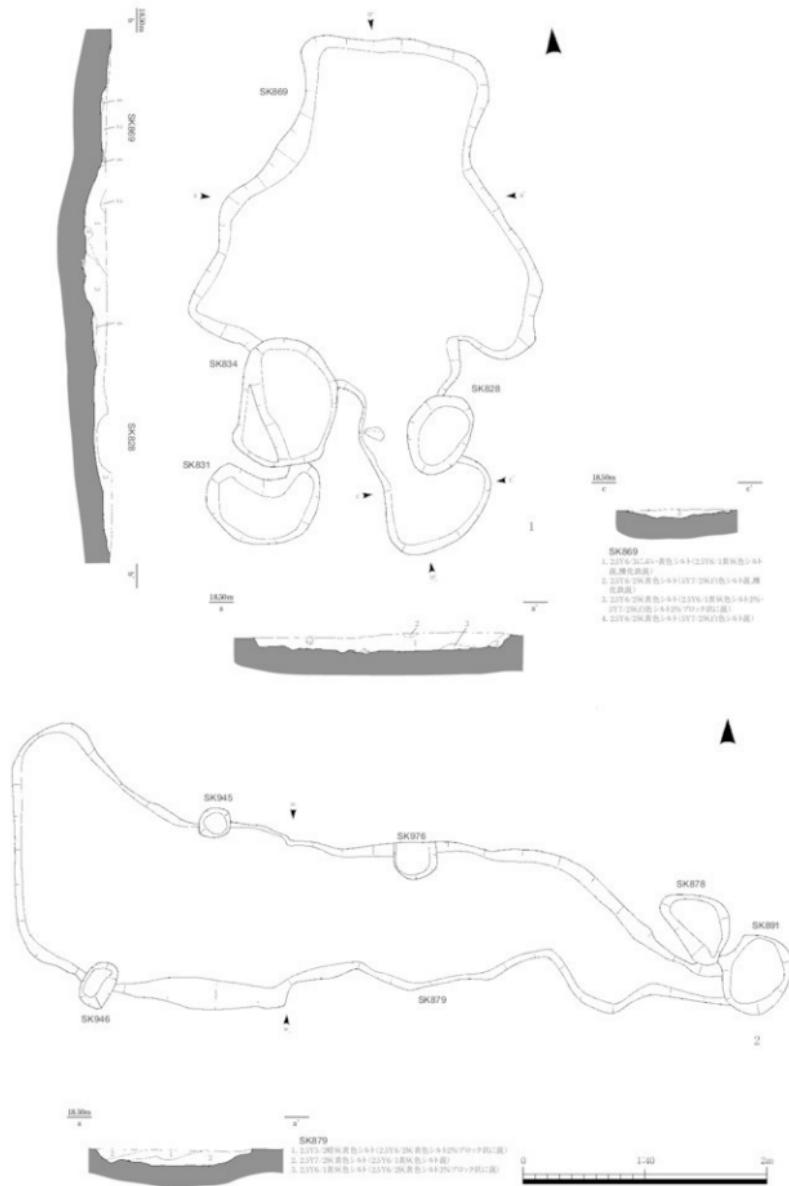


第48図 遺構実測図 (1/40)  
A 4 地区 SK523・SK527・SK528



第49図 遺構実測図 (1/40)

A 4・A 5地区 1. S K506・S K507 2. S K511 3. S K601 4. S K633 5. S K851 6. S K980



第50図 遺構実測図 (1/40)

A 5 地区 1. S K869 2. S K879

面はやや凸凹しており、埋土は黄灰色シルトの単層である。遺物は越中瀬戸・肥前陶器がある。

#### 869号土坑（S K869, 第50図）

A 5 地区に位置する、不整形の大型の土坑。S K828・834に切られる。深さは約10cm前後と浅いが、中央部はやや深くなり20cmを測る。埋土は灰黄色シルトに黄灰色シルトが混じる土が主体である。遺物は越中瀬戸・肥前陶器が出土している。

#### 875号土坑（S K875, 第49図）

A 5 地区に位置する、平面形が三角形の土坑で、S B 6 の S P851に切られる。断面形は擂鉢状で、埋土は黄灰色シルトに灰黄色シルトがブロック状に混じる土である。遺物には肥前陶器がある。

#### 879号土坑（S K879, 第50図）

A 5 地区に位置する、S B 6 の北側で重複する東西に延びる細長い落ち込み状の土坑。埋土は灰黄色シルト・暗灰黄色シルト・黄灰色シルトの順に北に片寄って堆積している。北側と南側の肩部分では S K945 と S K976, S K876 と S K946 の 4 基の円形の小土坑を検出している。遺物は土師器・越中瀬戸・肥前陶器がある。

#### 896号土坑（S K896, 第51・64図, 図版37・39）

A 5 地区南側で検出した長方形の土坑。南西隅は S K941 に切られ、北辺は試掘トレーニチに切られる。床面は平坦で、深さは24cm、上面には厚さ5cmの炭化物層が中央に堆積していた。その下層にはにぶい黄色シルト、ブロック土が混じる暗灰黄色シルトが堆積する。

遺物には、越中瀬戸（216～218）がある。216は鉄軸の向付。内底面内禿で、底部は削り込み高台である。217・218は丸皿。217は、直線的に延びる薄い口縁部に厚ぼったい鉄軸が施釉され、内底面は内禿である。高台は小さく、その内側には「十」の墨痕が明瞭に残る。218は鉄軸と灰軸の掛け分けの皿の底部で、内底面には軸止めの段が残る。時期は17世紀前葉～中葉頃である。

#### 897号土坑（S K897, 第51図）

A 5 地区の S K896 の南側に平行する長方形の土坑。S K896 に比べ東西に長く、南側は調査区外へ延びる。北側は S K898・941 に切られる。床面は平坦で、深さは約30cm、埋土はにぶい黄色粘土質ロームブロックが混じる暗灰黄色シルトの単層である。ただ、西側の堆積状況が異なるので、別の遺構が切り合っていたと判断する。遺物は越中瀬戸・肥前陶器がある。

#### 898号土坑（S K898, 第51図）

A 5 地区の S K897 を切る梢円形の土坑。北側の重複する S K944 も切る。深さは40cmで、ブロック土が混じる黄褐色シルトが主体である。遺物は越中瀬戸・瓦質土器がある。

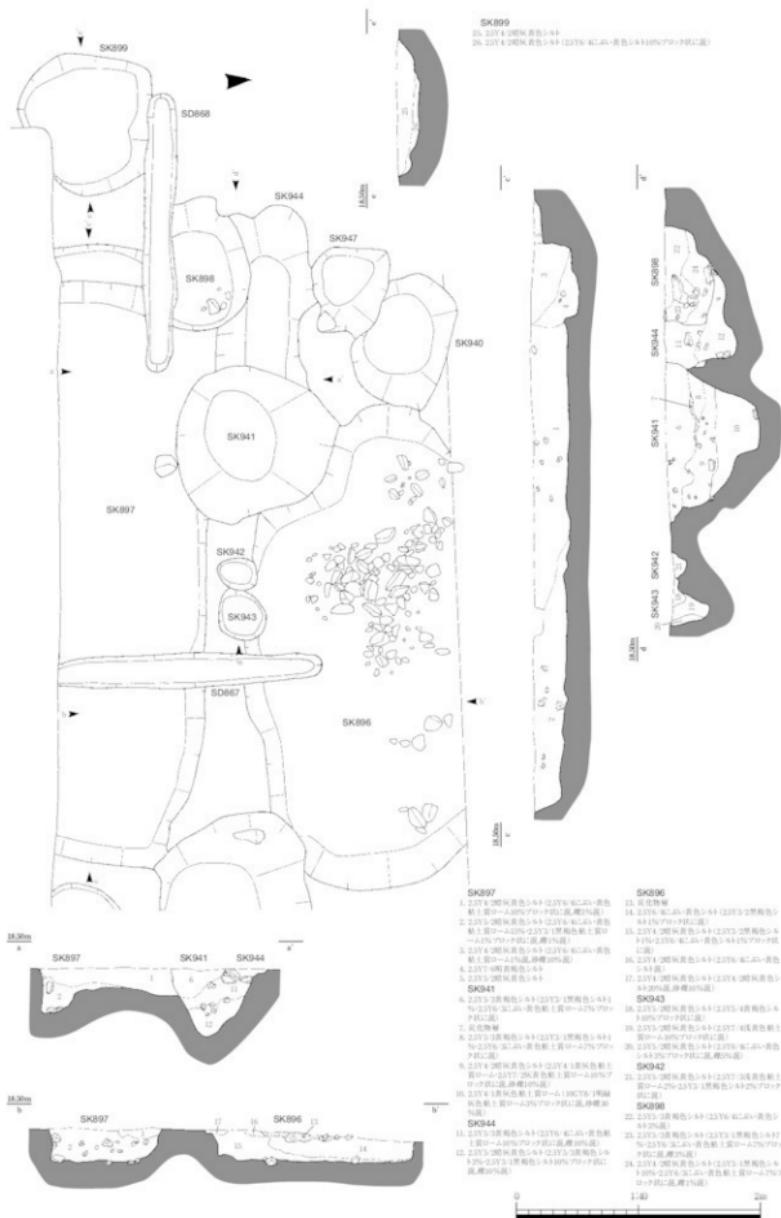
#### 899号土坑（S K899, 第51図）

A 5 地区の S K897 の西側で検出した不整円形の土坑。深さは18cmと浅く、暗灰黄色シルトが主体の土がレンズ状に堆積する。周囲の土坑の埋土がブロック土が混じる土であることに比すると性格がやや異なる。遺物は肥前陶器が出土した。

#### 915号土坑（S K915, 第53・64図, 図版70）

A 5 地区の区画溝 S D901 内部で検出した不整形の土坑。北西隅は試掘トレーニチに切られる。埋土は灰黄色シルトが主体で、わずかに炭化物が混じる。

遺物は、土器・陶磁器の出土はないが、砥石（219）が出土している。自然の円礫を利用したもので、大きさから置き砥石と考えられる。特に表面と右側面の2面が顕著に擦り減っているが、他の2面にも擦痕が残る。擦痕の他に線状痕も縁辺部に何箇所か認められる。また、裏面の窪んだ箇所も摩



第51図 遺構実測図 (1/40)

A 5 地区 SK896～SK899・SK941～SK944

耗していることから、直線状のものばかりではなく、小型の曲線状のものも磨いていたと考えられる。

#### 941号土坑（S K941, 第51図）

A 5 地区の S K896・897・944 を切る円形の土坑。断面形は擂鉢状で、上層には黄褐色シルトにブロック土が混じる土が堆積し、中層には炭化物層がレンズ状に堆積する。遺物の出土はない。

#### 944号土坑（S K944, 第51図）

A 5 地区の S K898・941 に切られる楕円形の土坑。埋土は上からブロック土が混じる黄褐色シルト、暗灰黄色シルトが堆積する。遺物の出土はない。一帯の周辺の土坑群は切り合い関係はあるものの埋土の状況にあまり変化はなく、遺物の時期も変わらないことからほぼ同時期の一連の遺構と考える。

#### 951号土坑（S K951, 第52・55図、図版45）

A 5 地区の S D901 の内側で検出した南北に延びる不整形の落ち込み。S B 7 と重複するが、新旧関係はこれより古い。深さは約10cm前後と浅く、埋土は暗灰黄色シルトを主体とする。区画溝の内部にありこれと平行することから、同時期代の関連ある遺構とも考えられるが性格は不明である。

遺物は、越中瀬戸・肥前陶器（214）が出土している。214は京焼き風の椀で、高台内側まで施釉される。時期は17世紀後半～18世紀前半のものである。

#### 960号土坑（S K960, 第54図）

A 5 地区の区画溝 S D901 の内部北辺に接するように検出した長方形の土坑。長軸 3 m、短軸 1.55 m、深さは37cmで、中央部分が深くなり、床面は平坦ではない。埋土は灰黄色シルトが主体で、上層に炭化物がわずかに混じる。遺物には肥前陶器がある。

#### 962号土坑（S K962, 第53図）

A 5 地区の区画溝 S D902 の西側で検出した不整形の落ち込み。S K963・S D902 に切られる。埋土は灰黄色シルトの単層で、性格は不明である。遺物には肥前陶器がある。

#### 980号土坑（S K980, 第49図）

A 5 地区の S K633 の北西で検出した円形の土坑。直径約68cm、深さ24cmで、埋土はオリーブ褐色シルトに多種類の土がブロック状に混じる。遺物には土師器・珠洲がある。周辺の北側は方形、又は円形の土坑が単発で散在しているといった状況で、埋土も単層か、ブロック状に混じった土が多い。近世以降の所産の遺構が多いと思われる。

#### 987～990号土坑（S K987～990, 第54図、図版27）

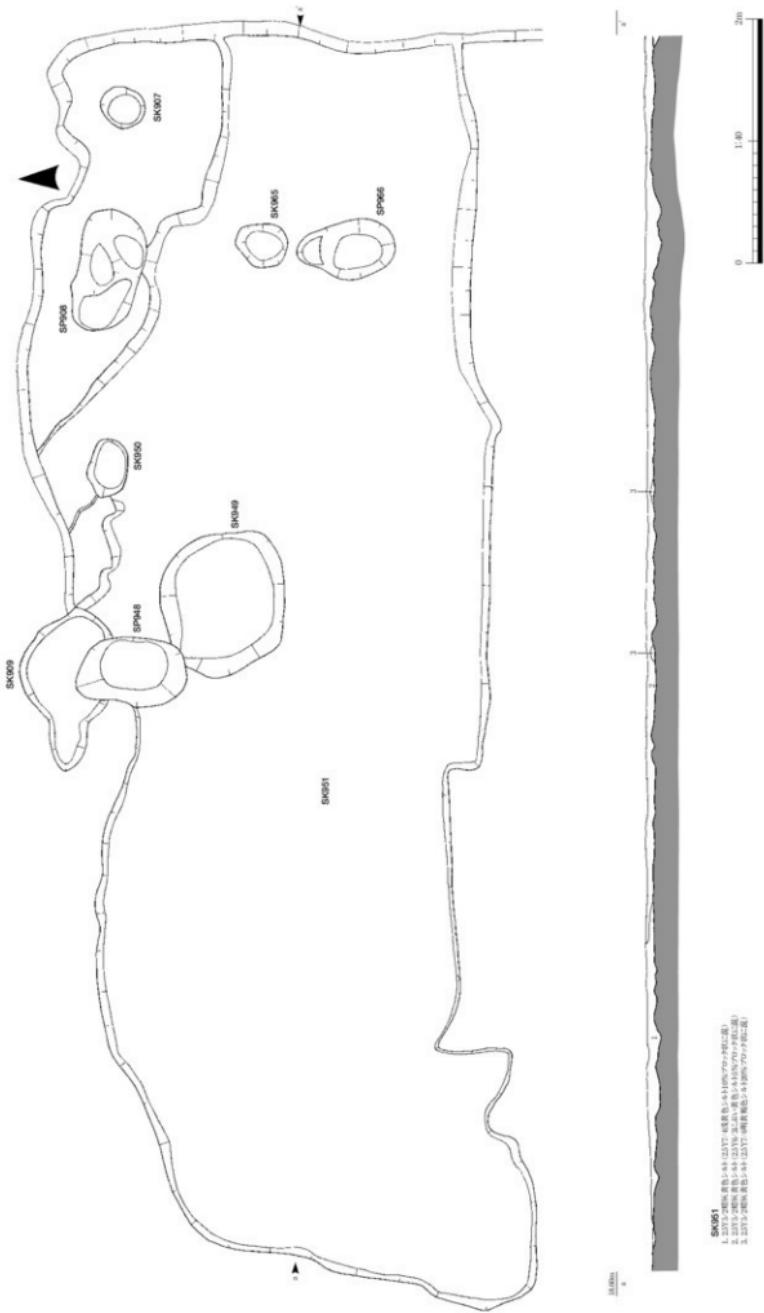
A 5 地区の土台建物 S B13 の西側、A 3 地区との境で検出した不整形の土坑群である。暗灰黄色シルトや黄褐色シルトが不規則に堆積している。埋土には炭化物や焼土の混入は見られないが、須恵器や肥前陶器の他に S B13 でも出土した鋳型片が出土している。

#### 1112号土坑（S K1112, 第56図）

A 6 地区西側の S D1114 と S D1117 に挟まれた空間に位置する、大型の楕円形土坑である。長軸 4.8m 以上、短軸 1.86m、深さ 17cm を測る。埋土は暗灰黄色シルト質ロームを基調とし、底に薄く炭が堆積している。S K1113・S D1114 を切る。遺物は越中瀬戸・肥前陶磁が出土している。

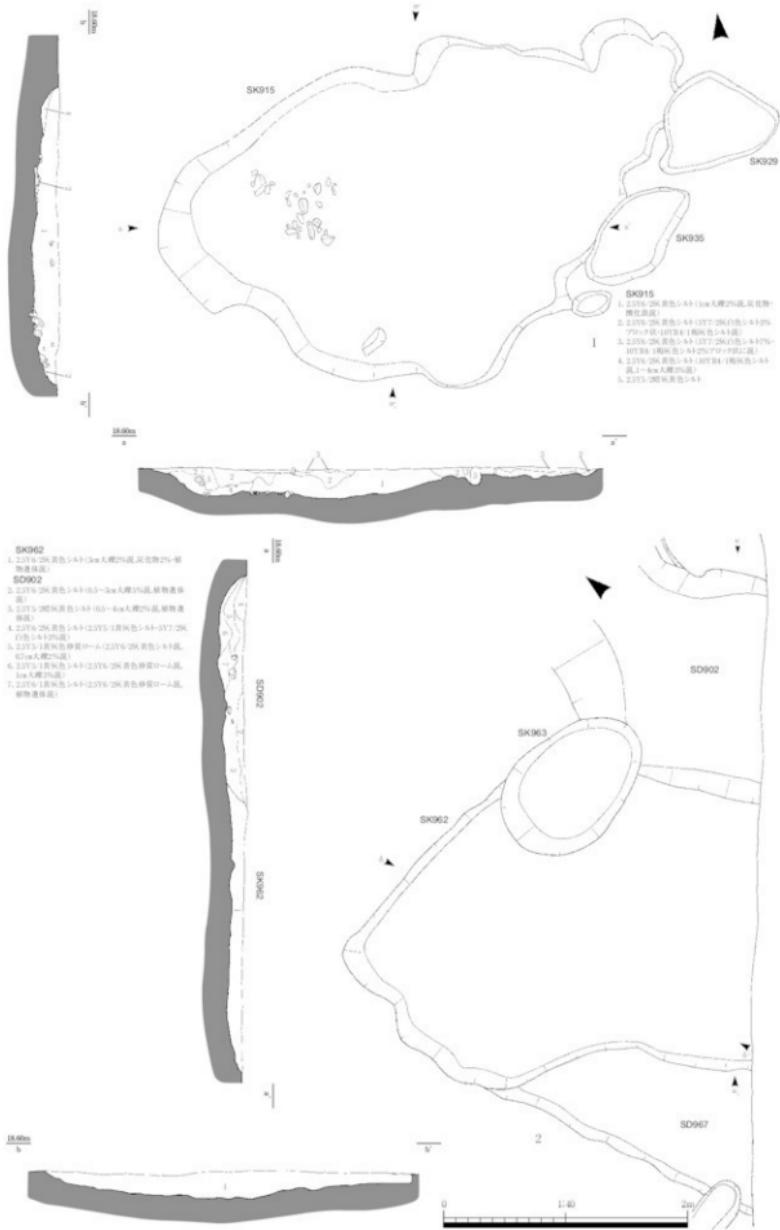
#### 1113号土坑（S K1113, 第56図）

A 6 地区西側の S D1114 と S D1117 に挟まれた空間に位置する。最大幅は 2.3m、深さ 14cm を測る。S D1114 を切り、S K1112 に切られる。埋土は暗灰黄色シルト質ロームを基調とする。遺物は出土していない。



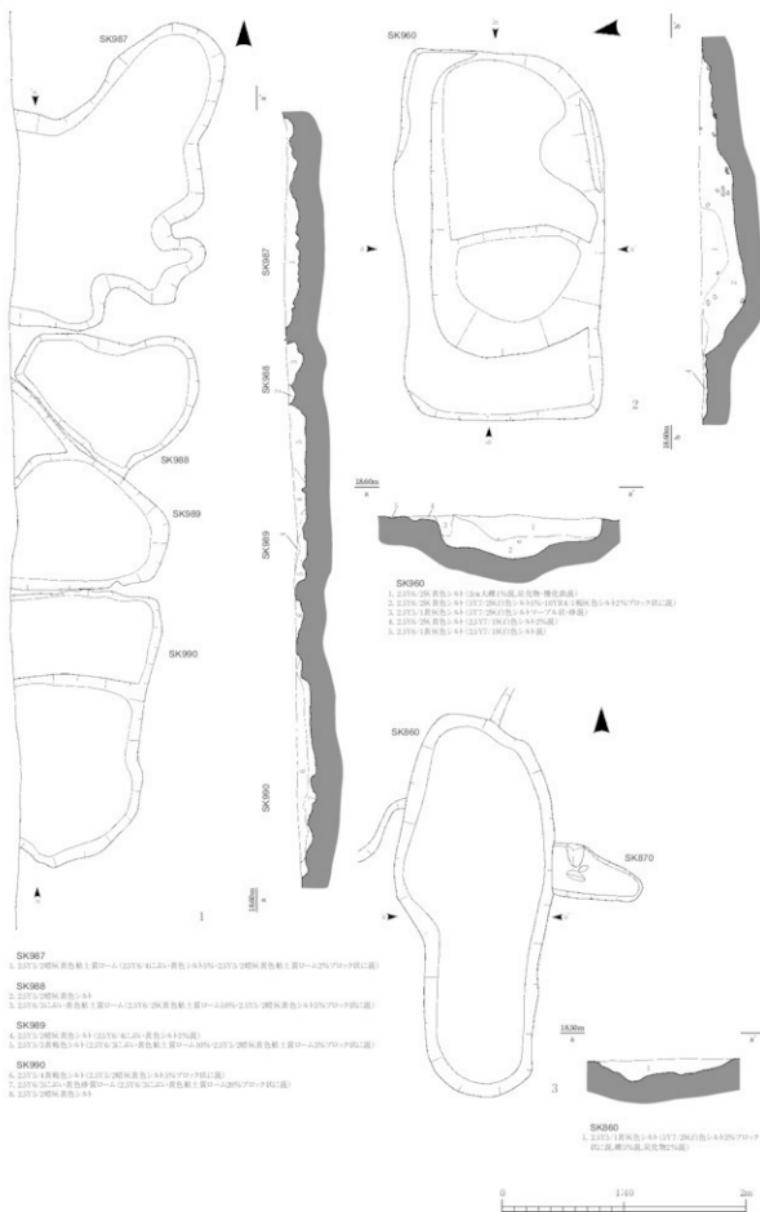
第52図 遺構実測図 (1/40)  
A5地区 SK951

SK951  
 1.237±0.005m  
 2.232±0.005m  
 3.237±0.005m  
 4.432±0.005m  
 5.437±0.005m



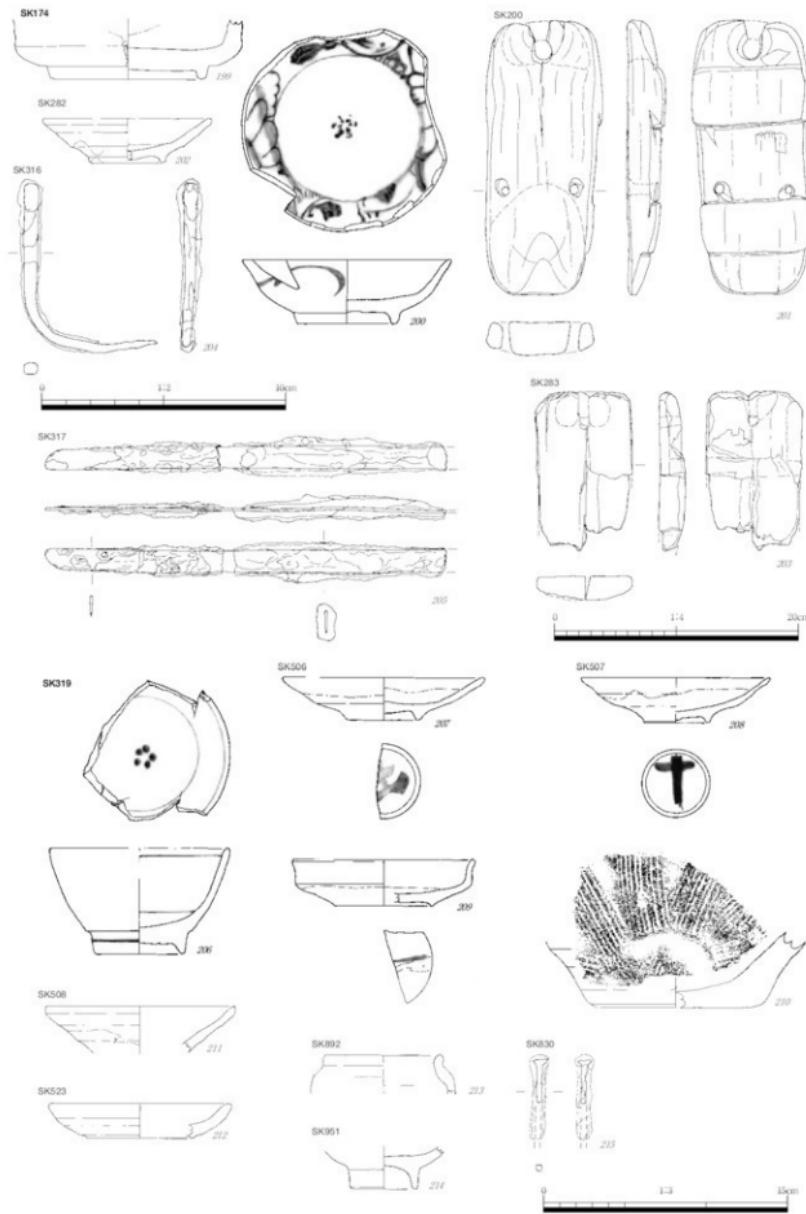
第53図 遺構実測図 (1/40)

A 5地区 1.S K915 2.S K962・S D902



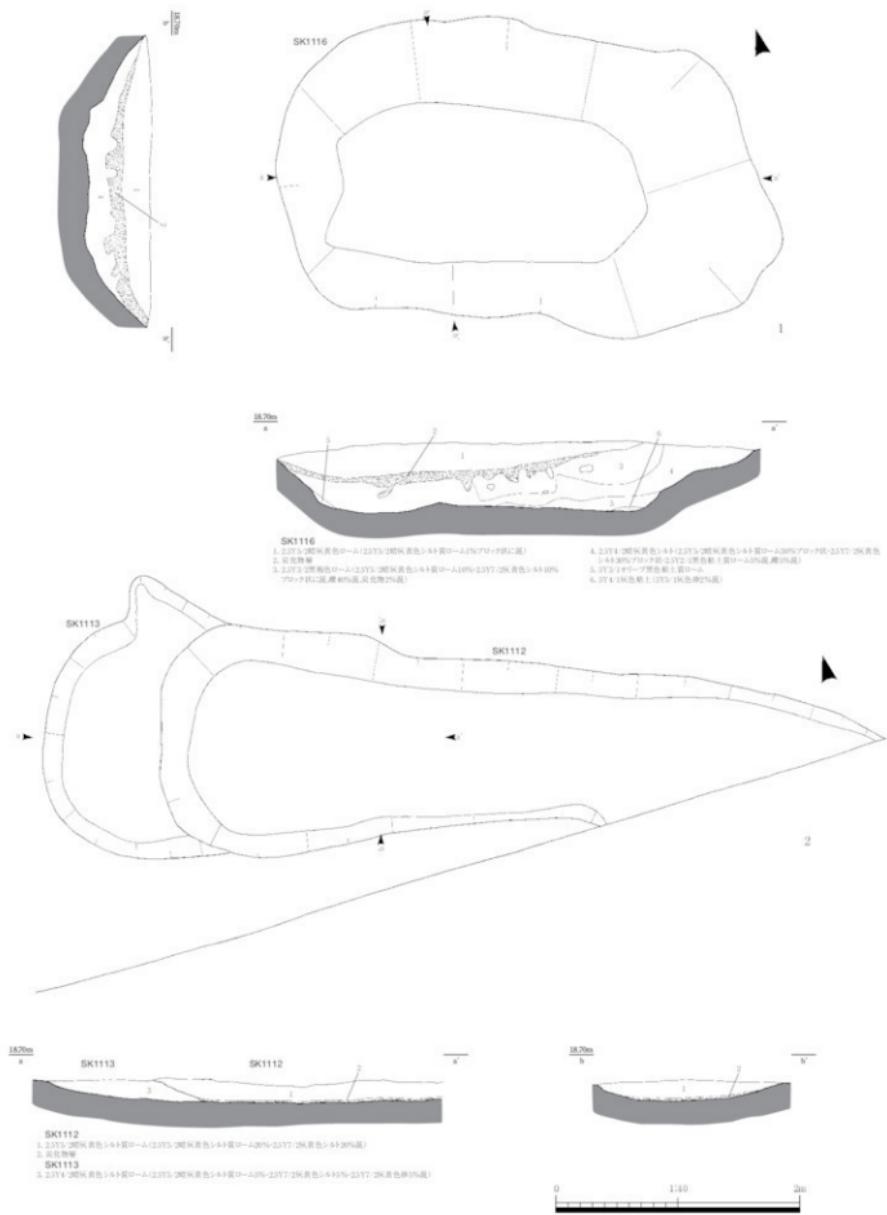
第54図 遺構実測図 (1/40)

A 5 地区 1. S K987～S K990 2. S K960 3. S K860



第55図 遺物実測図 (204・215 1/2, 199・200・202・206~214 1/3, 201・203・205 1/4)

A 2 · A 3 · A 5 地区 S K174(199・200) S K200(201) S K282(202) S K283(203)  
 S K316(204) S K317(205) S K319(206) S K506(207) S K507(208~210) S K508(211)  
 S K523(212) S K830(215) S K892(213) S K951(214)



第56図 遺構実測図 (1/40)

A 6 地区 1. S K1116 2. S K1112 + S K1113

## 1116号土坑（SK1116, 第56・64図, 図版28・66）

A6地区西側のS D1114とS D1117に挟まれた空間に位置する、大型の楕円形土坑である。一部搅乱を受けるが、残存部で長軸4.2m、短軸2.4m、深さ58cmを測る。炭層が5cm程の厚さでレンズ状に堆積している。S D1114・1117を切る。遺物は越中瀬戸・肥前陶磁・加工材が出土している。

220は用途不明の木製品で、破損しているが、ほぼ等間隔に3箇所にV字状の刻みが彫られたもの。接合しない破片にも刻みが1箇所彫られている。

## 1120号土坑（SK1120, 第57図）

A6地区の区画溝に囲まれた空間に位置する、楕円形土坑である。長軸1.04m、短軸87cm、深さ22cmを測る。S K1133の直上で検出した。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。遺物は出土していない。

## 1121号土坑（SK1121, 第57図）

A6地区の区画溝に囲まれた空間に位置する。最大径は1.36m、深さ12cmを測る。S K1133に切られ、S D1151を切る。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。遺物は越中瀬戸・肥前磁器が出土している。

## 1122号土坑（SK1122, 第57・64図, 図版28・38・43）

A6地区の区画溝に囲まれた空間に位置する、楕円形土坑である。長軸3.7m、短軸2.95m、深さ29.5cmを測る。埋土は上層が暗灰黄色砂質ローム、下層が黒褐色シルト質ロームとなる。南側の肩に礫が集中する。遺物は多量の肥前陶磁・越中瀬戸が出土しており、廃棄土坑と思われる。

221は越中瀬戸の灯明受皿で、底部は無釉で糸切りである。222・223は肥前陶器で、222の刷毛目椀、223の刷毛目皿は17世紀後半～18世紀中頃である。

## 1133号土坑（SK1133, 第57図）

A6地区の区画溝に囲まれた空間に位置する、楕円形土坑である。長軸3.52m、短軸1.44m、深さ40cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。遺物は肥前陶器が出土している。

## 1160号土坑（SK1160, 第58図）

A6地区の区画溝に囲まれた空間に位置する。S K1164・1165に切られ、平面形は不明である。深さは22cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。遺物は肥前陶磁が出土している。

## 1164号土坑（SK1164, 第58図）

A6地区の区画溝に囲まれた空間に位置する。北側をSK1165に切られ、残存部で最大幅2.19m、深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。遺物は白磁・青磁が出土している。

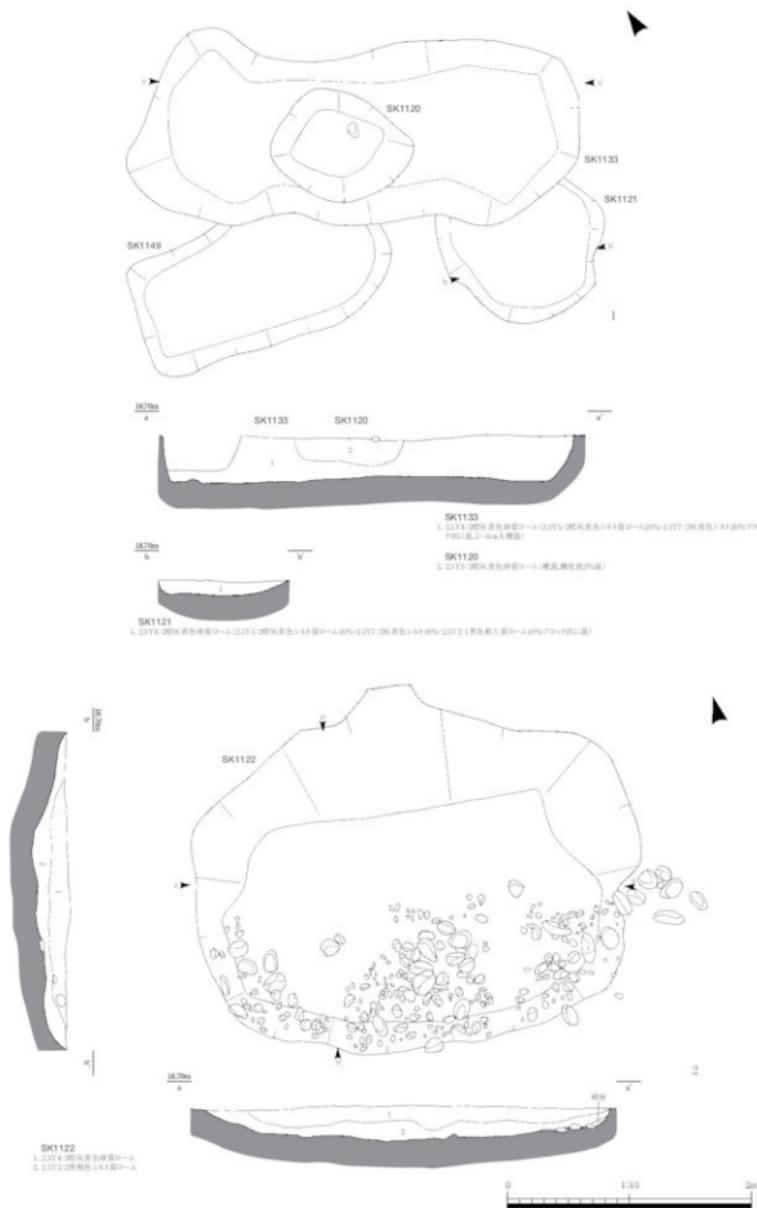
## 1165号土坑（SK1165, 第58・64図, 図版66）

A6地区の区画溝に囲まれた空間に位置する。北側をSD1117に切られ、一部SD1383に切られる。残存部で最大幅3.94mを測る。掘削中に井戸の底付近（SE1390）を検出しており、SK1165は井戸廃絶時の石組抜取りの際に生じた土坑かと思われる。

遺物は珠洲・肥前陶磁・柱根（224）が出土している。柱根（224）は立った状態で検出され、周辺に建物が存在したことが予想される。樹種はシイ類。

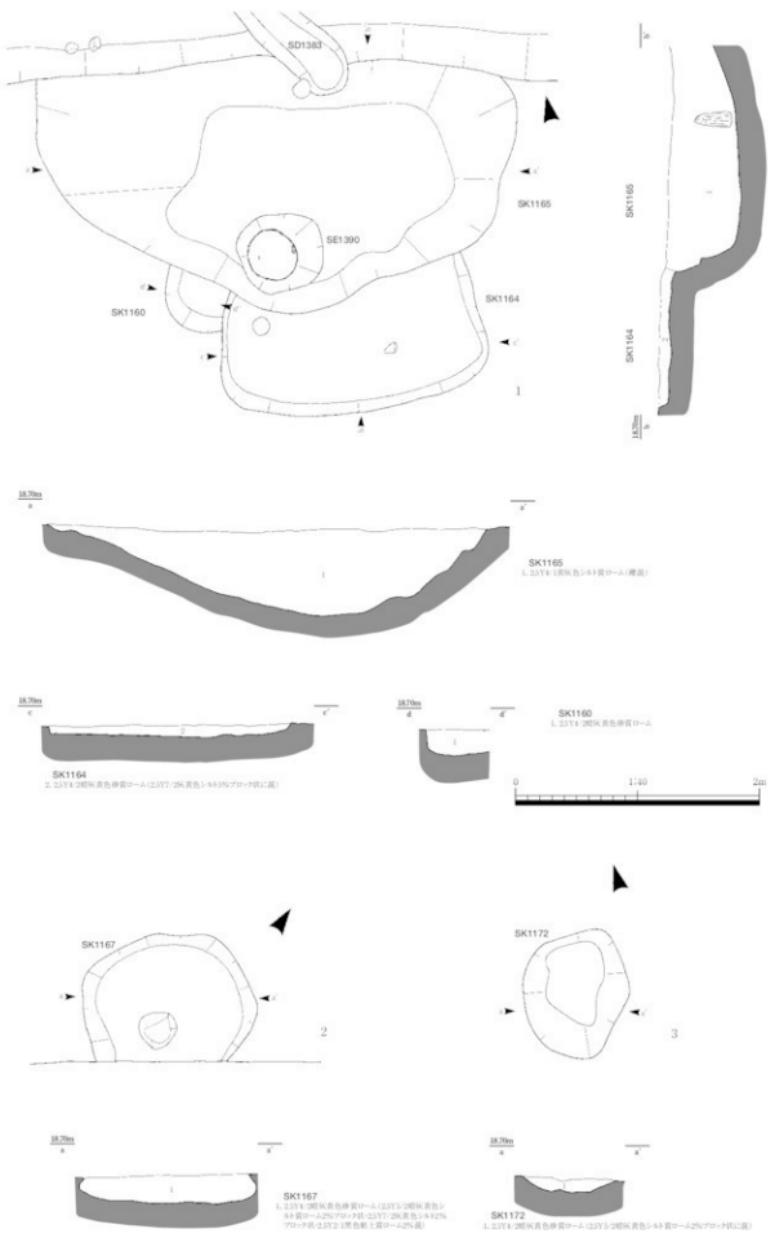
## 1167号土坑（SK1167, 第58図）

A6地区的南端に位置する。下端に対して上端が狭い袋状の土坑で、底はほぼ水平である。一部が調査区外にかかる。検出部分で最大径1.43m、深さ24cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。直径約30cmの礫が底の中心で検出された。遺物は肥前陶磁が出土している。



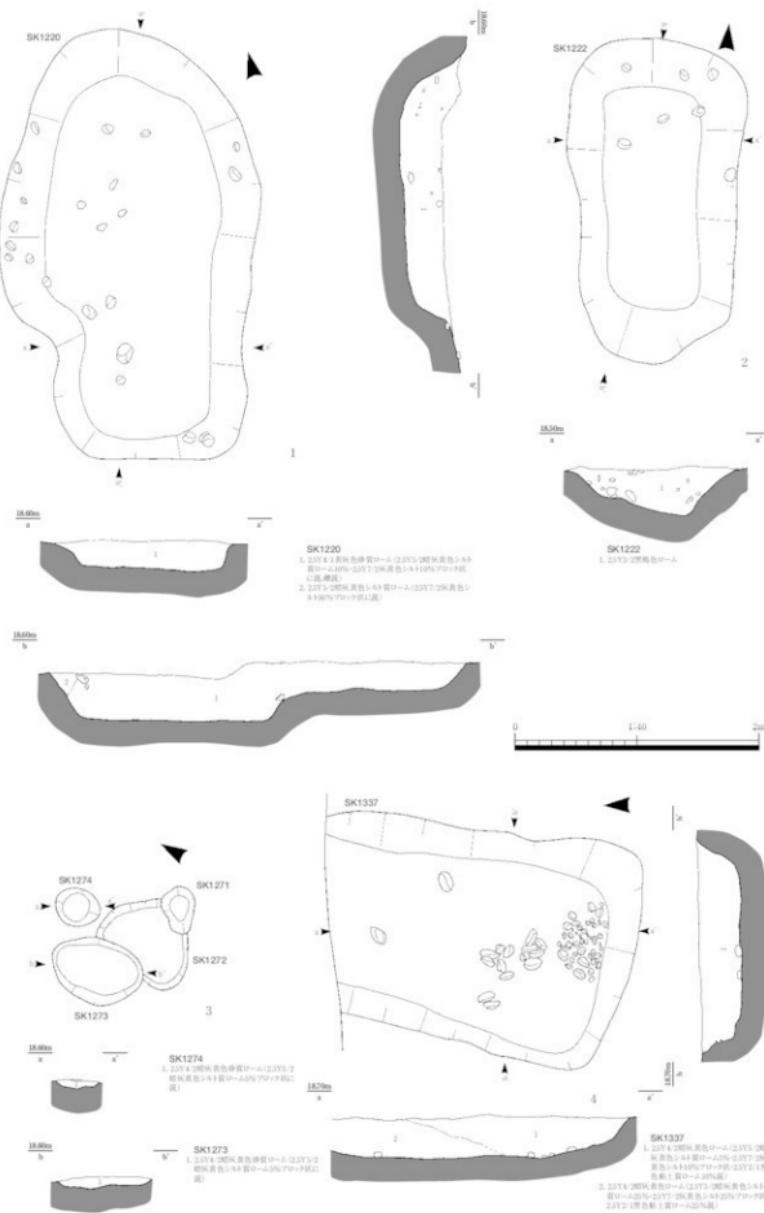
第57図 遺構実測図 (1/40)

A 6 地区 1. S K1120・S K1133 2. S K1122



第58図 遺構実測図 (1/40)

A 6地区 1.S K1160・S K1164・S K1165 2.S K1167 3.S K1172



第59図 遺構実測図 (1/40)

A 6 地区 1. S K1220 2. S K1222 3. S K1273・S K1274 4. S K1337

## 1172号土坑（SK1172、第58図）

A 6 地区の区画溝外の北側に位置する、楕円形土坑である。長軸1.06m、短軸86cm、深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。遺物は須恵器・中世土師器が出土している。

## 1220号土坑（SK1220、第59・64図、図版66）

A 6 地区の区画溝に囲まれた空間に位置する、楕円形土坑である。長軸3.52m、短軸2.08m、最深で46cmを測る。埋土は黄灰色砂質ロームで、北側肩に暗灰黄色シルト質ロームが張り付くように検出された。遺物は肥前磁器・加工材・釘が出土している。

225は用途不明の木製品で、不規則な孔が6箇所、これらと垂直な孔も1箇所あけられている。  
226・227は釘で、いずれも角釘である。

## 1222号土坑（SK1222、第59図）

A 6 地区の区画溝に囲まれた空間に位置する、楕円形土坑である。長軸2.65m、短軸1.45m、最深で深さ42cmを測る。埋土は黒褐色ロームで、礫を多く含む。遺物は越中瀬戸・肥前磁器が出土している。

## 1229号土坑（SK1229、第60図）

A 6 地区の区画溝に囲まれた空間に位置する、楕円形土坑である。S D1117を切り、SK1230に切られる。残存部で最大幅2.06m、深さ26cmを測る。埋土は礫を含む黒褐色シルトで、上面に薄く炭化物層を検出した。遺物は土師器が出土している。

## 1230号土坑（SK1230、第60図）

A 6 地区の区画溝に囲まれた空間に位置する、土坑である。残存部で最大幅3.54m、深さ40cmを測る。埋土は上層が暗灰黄色砂質ローム、下層が礫を含む黒褐色シルト質ロームである。SK1382、SD1114を切り、SK1231に切られる。遺物は越中瀬戸・肥前陶器・漆器片が出土している。

## 1231号土坑（SK1231、第60図）

A 6 地区の区画溝に囲まれた空間に位置する、楕円形土坑である。SK1230・1382、SD1114を切る。長軸3.63m、短軸3.38mを測る。埋土は礫を含む暗灰黄色ローム。東側の肩は西側に比べ緩く下がる。遺物は珠洲・越中瀬戸・肥前陶器が出土している。

## 1250号土坑（SK1250、第61図）

A 6 地区のSD1185とSD1335に挟まれた空間に位置する、方形の堅穴状土坑である。長軸3m、短軸2.18m、深さ30cmを測る。埋土は上層が暗灰黄色ローム、下層が黒褐色シルトとなる。SB11に伴う土間と考えられるが、貼り床などはみられなかった。SB9の柱穴SP1249を切り、SK1242に切られる。SK1242はSK1250と同様の構造をもつと思われるSK1251に切られており、SK1251に先行するものと思われる。遺物は出土していない。

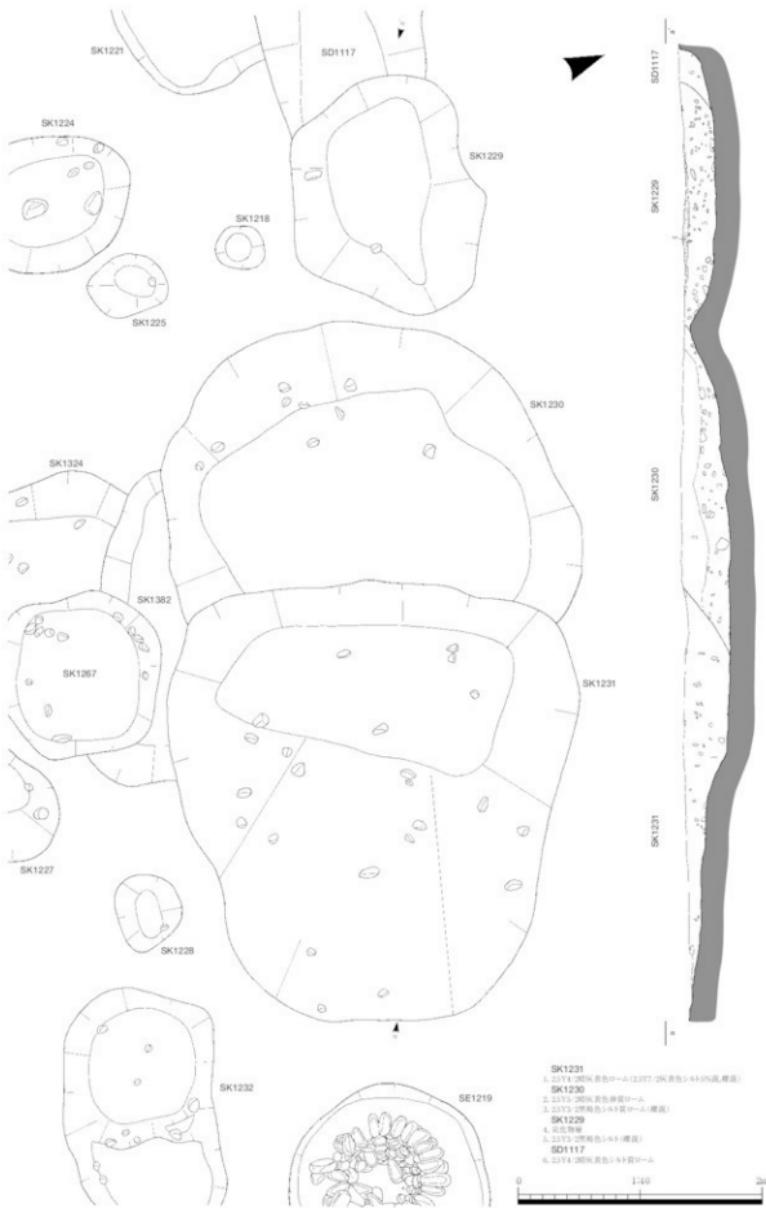
## 1251号土坑（SK1251、第61図、図版28）

A 6 地区のSD1185とSD1335に挟まれた空間に位置する、堅穴状土坑である。貼り床などではなく、SK1250と同様の構造をもつと思われる。残存部で最大幅2.38m、深さ36cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト質ロームを基調とする。SK1242を切る。遺物は杭が出土した。

## 1273号土坑（SK1273、第59・64図、図版33）

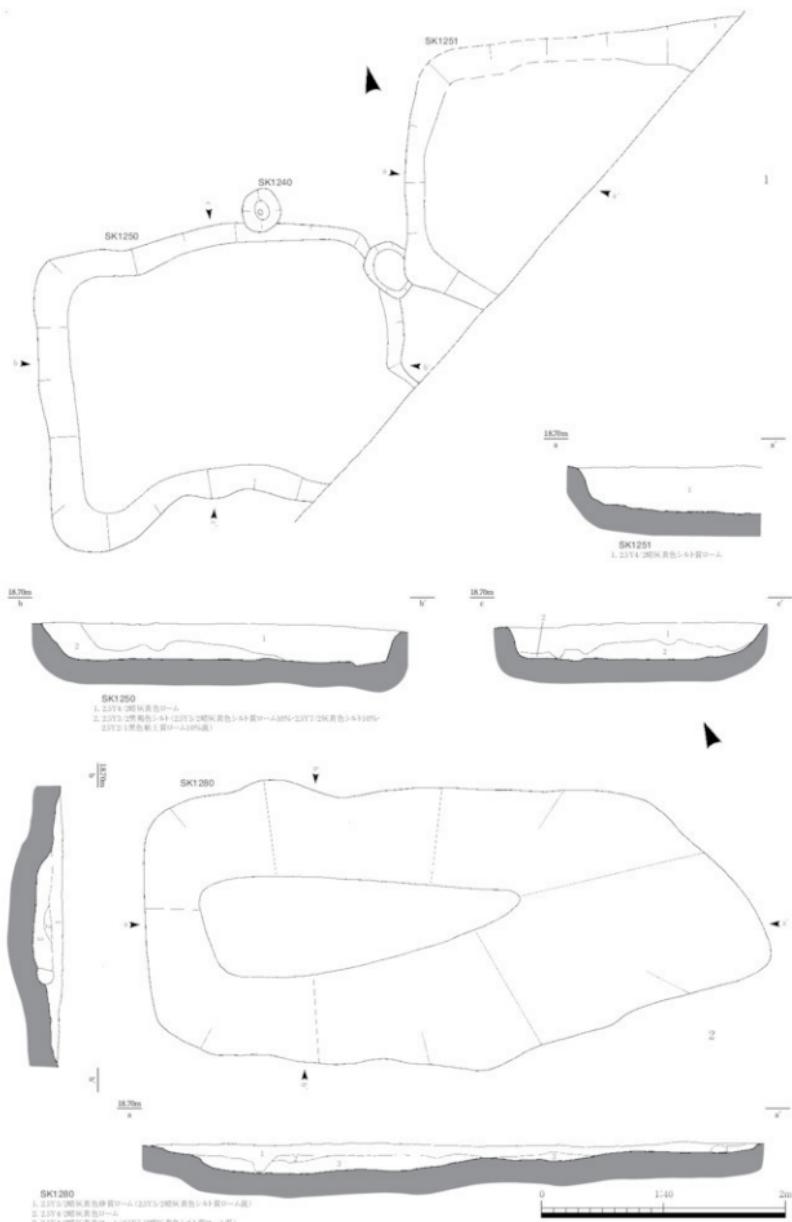
A 6 地区のSD1185とSD1335に挟まれた空間に位置する、楕円形土坑である。長軸77cm、短軸54cm、深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。SK1271を切る。

遺物は、中世土師器が出土している。228は中世土師器の皿で、口縁部は外反し、端部を上へつまみあげる。15世紀後半～16世紀のもの。



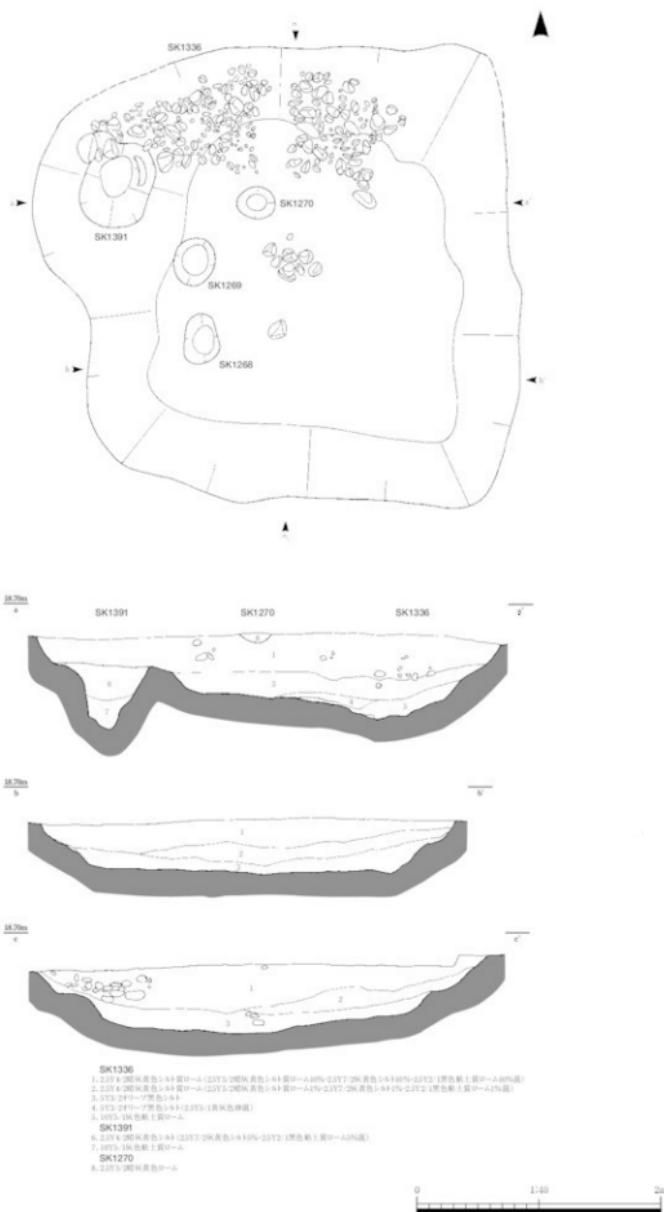
第60図 遺構実測図 (1/40)

A 6 地区 SK1229 - S D1117 · S D1117



第61図 遺構実測図 (1/40)

A 6 地区 1. S K1250 - S K1251 2. S K1280



第62図 遺構実測図 (1/40)  
A 6 地区 SK1270 - S K1336 - S K1391

## 1274号土坑（S K1274, 第59図）

A 6 地区の S D1185 と S D1335 に挟まれた空間に位置する、円形土坑である。直径38cm、深さ 7 cm を測る。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。遺物は瓦質土器が出土している。

## 1280号土坑（S K1280, 第61図）

A 6 地区の S D1185 と S D1335 に挟まれた空間に位置する、楕円形土坑である。長軸5.15m、短軸 2.3m、深さ24cmを測る。埋土は上層が暗灰黄色砂質ローム、下層が暗灰黄色ロームを基調とする。遺物は中世土師器、瓦質土器が出土している。

## 1336号土坑（S K1336, 第62図、図版28）

A 6 地区の S D1185 と S D1335 に挟まれた空間に位置する、隅丸方形の堅穴状土坑である。S B10 の土間となる可能性がある。一辺3.53～3.72m、深さ68cmを測る。埋土は上層が暗灰黄色シルト質ローム、下層がオリーブ黒色シルトを基調とする。廃絶後は礎の廃棄土坑となっていたようで、北側肩付近の上層から直径10cm大の礎が多く出土した。遺物は珠洲・瀬戸・瓦質土器が出土している。

## 1337号土坑（S K1337, 第59・64図、図版28・33）

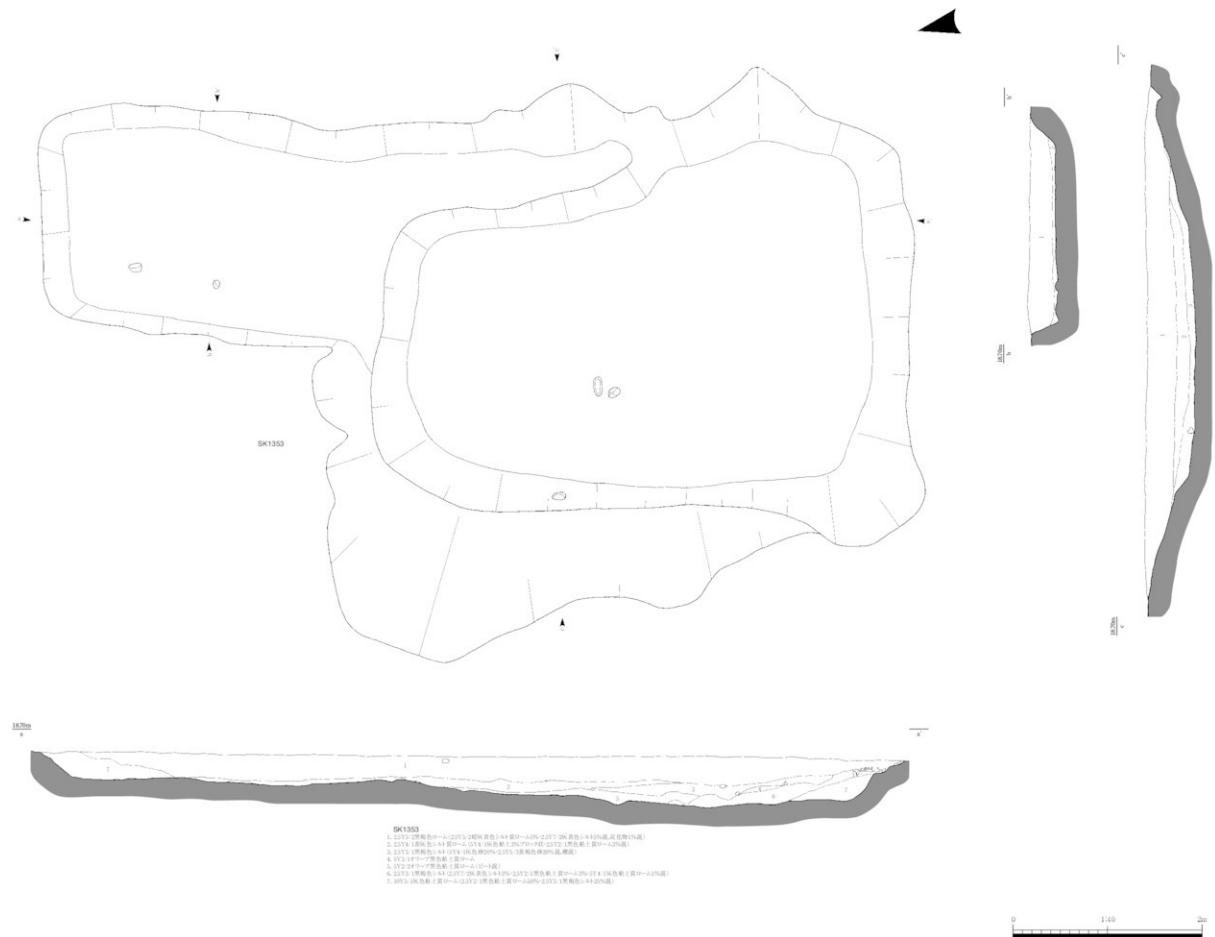
A 6 地区の S D1185 と S D1335 に挟まれた空間に位置する、方形の堅穴状土坑である。調査区の端に切られるが、残存部で長辺2.62m、短辺1.9m、深さ36cmを測る。南側の肩から床面直上にかけて直径10～15cm大の礎が多く散らばり、石敷きのようになっていた。埋土は暗灰黄色ロームを基調とする。遺物は中世土師器、珠洲が出土している。

229は中世土師器の皿で、口縁部はやや外反し、端部を小さく上につまみあげる。体部外面にススが付着する。15世紀後半～16世紀のもの。

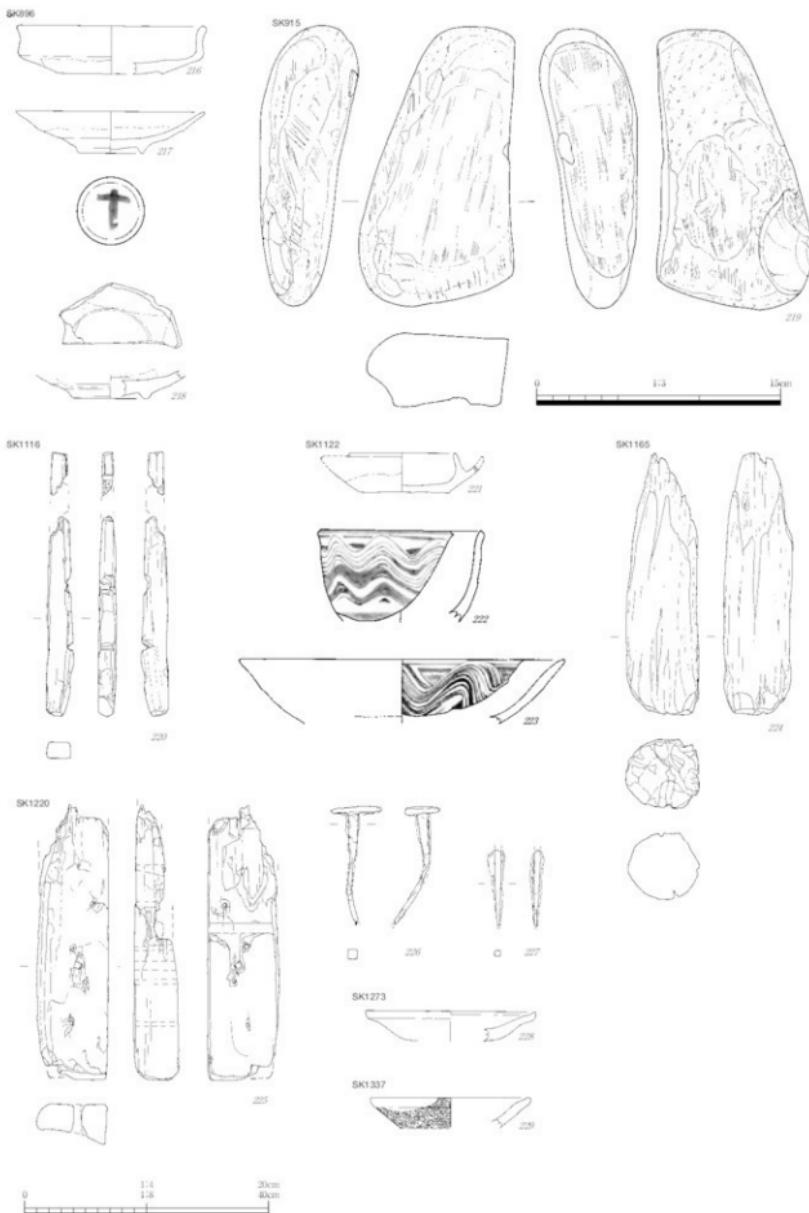
## 1353号土坑（S K1353, 第63図、図版28）

A 6 地区の S D1185 と S D1335 に挟まれた空間に位置する、不整形の堅穴状土坑である。長軸方向は S D1335 とほぼ平行に位置し、長軸91.7m、短軸5.44m、深さ50.5cmを測る。埋土は上層が黒褐色ローム、黄灰色シルト質ロームとなり、下層がオリーブ黒色粘土質ロームとなる。伴う遺構は不明であるが、土間状のものと思われる。遺物は中世土師器・珠洲・越前が出土している。なお埋土から魚骨（タイ腹椎）が出土している。

中世の遺構は S D1185 から S D1335 に挟まれた空間に多く分布し、A 6 地区では建物関連の遺構はここのみに立地する。溝で区画し、そこに建物を建てた様子が窺える。



第63図 遺構実測図 (1/40)  
A 6地区 SK1353



第64図 遺物実測図 (216~219・221~223・228・229 1/3, 220・225~227 1/4, 224 1/8)  
 A5・A6地区 SK896(216~218) SK915(219) SK1116(220) SK122(221~223)  
 SK1165(224) SK1220(225~227) SK1223(228) SK1237(229)

## E 溝・自然流路

## 1・4号溝（S D 1・4, 第65・66・69図, 図版29・37・51）

A 1 地区の南西隅に位置する溝である。東西方向に平行に延びる 2 本の溝で、S D 1 は、幅52cm, 深さ10cmであり、S D 4 は幅53cm, 深さ7cmを測る。溝より北側と南側では遺構密度に差があり、境界的な様相が窺える。また平行に延びる様相から道路の側溝と考えられる。両溝からは近世陶磁器が出土している。また両者の溝間は1.5mと狭く、S D 2・3・6・37が溝間にあり、同方向に延びる。おそらく轍などの痕跡と考えられる。

230は肥前磁器の白磁皿である。231は基筒底風に高台を削りだす越中瀬戸鉄釉皿で、見込みに釉止めの段がある。17世紀。

## 5号溝（S D 5, 第65・66・69図, 図版29・54）

A 1 地区の S D 1・4 の北東に位置する南北溝である。幅67cm, 深さ8cmを測る。南側の延長には S D 239・241があり、調査区中央を南北に継続する道路または区画の一部と考えられる。

232は肥前の磁器碗で、見込みは二重圓線の中に草花文を描く。18世紀。

## 101号自然流路（S D 101, 第65・66・69図, 図版29・50・60）

A 2 地区の南西隅に位置する自然流路である。幅11m以上、深さ43cmを測る。近代磁器・肥前磁器(233)・瀬戸美濃・越中瀬戸・木製の盤(234)・下駄(235)などが出土し、近世から近代にかけて存続したものと考えられる。S D 101は跡遺の西側境界部分にあたり、遺構はこれより東に分布する。

## 102号溝（S D 102, 第65・66図）

A 2 地区に位置し、S D 101から東西方向に走り、S D 105に合流する溝で、幅約60cm、深さ14cmを測る。また、北側約8mの地点には、同方向に延びる S D 115がある。溝間が広いことから、道路というよりはむしろ区画の作り替えと考えられる。S D 102より南に遺構がなく区画の南端に相当する。遺物は出土していない。

## 105号溝（S D 105, 第65・66・69図, 図版35）

A 2 地区中央を南北に走る溝群の一部で、他に S D 105・107・108・238・239・241などがあり、道路の側溝およびそれに関連する溝と考えている。規模は幅49~79cm、深さ5~15cmで、それぞれ同方位を示す溝が平行に南北に走る。S D 105は S D 108と平行に走っており、溝間は約1.5m程度である。

236は瀬戸美濃の天目茶碗で、16世紀前半である。

## 190号溝（S D 190, 第65図）

A 2 地区中央を東西に延び S B 1 の南側12mに位置する。また S B 1 と同方位を示す遺構群に属し、同方位を示す溝群には S D 1・4・199・200・262などがある。S D 190の規模は幅36cm、深さ12cmであり、S D 110と平行に延びる部分が一部あり、S D 110と S D 115に重複関係が成立し、S D 110の方が新しい。遺物は出土していない。

## 199号溝（S D 199, 第65・67図）

A 2 地区に位置し L 字状に折れ曲がる溝。S K 182・183と重複関係が成立し、土坑の方が新しい。また北辺に対して平行に延びる S D 262がある。遺物は出土していない。

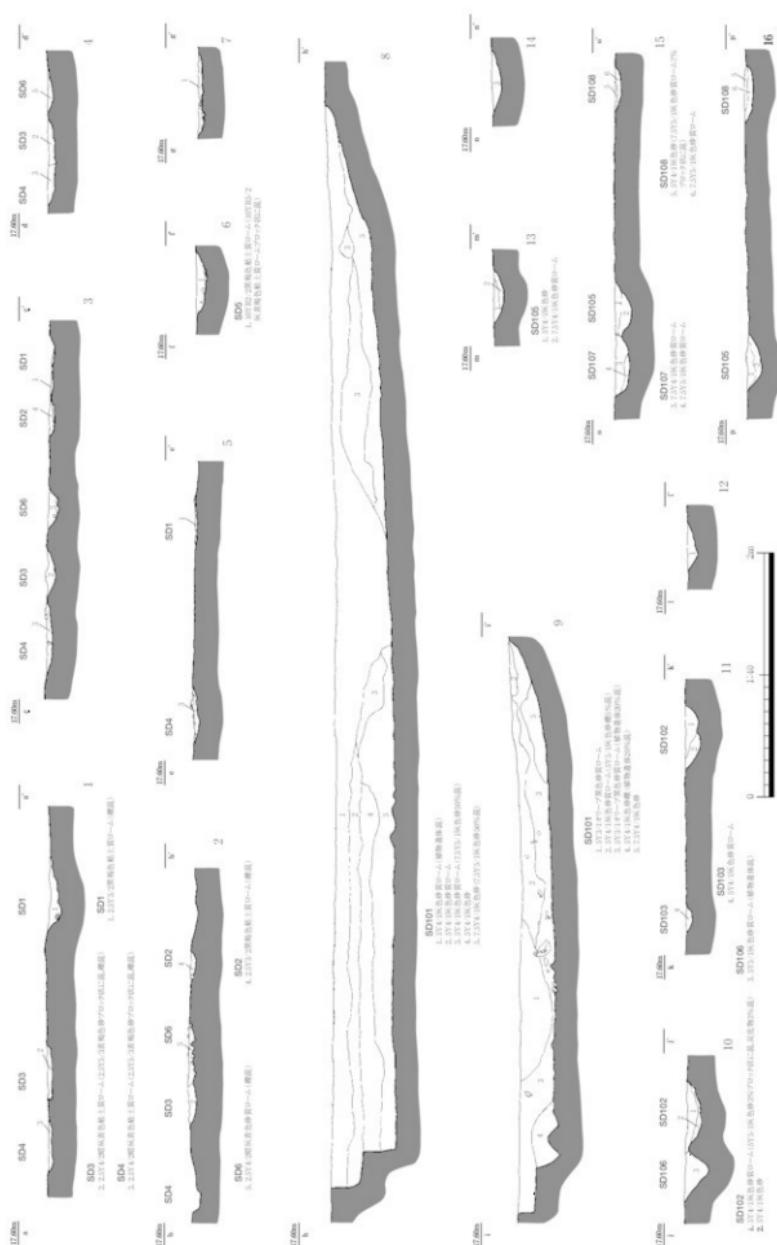
## 237号溝（S D 237, 第65・67・69図, 図版50・59）

A 2 地区西側に位置する L 字状の溝。溝の北辺に対して平行に延びる S D 242がある。S D 242が S B 3 と同方向に延びることや、S D 237の区画内部に S B 3 と同方向に延びる丘（S D 243・244など）があることから S B 3 と同時期の溝と考えられる。溝の北側では10cm大の礫が多量に捨てられていた。



第65図 遺構実測図 (1/300)

A1・A2地区 S P136・S K135・S K155・S D1～S D6・S D101～S D103・S D105～S D108・  
S D115・S D199・S D237～S D239・S D241・S D243～S D245・S D250・S D262

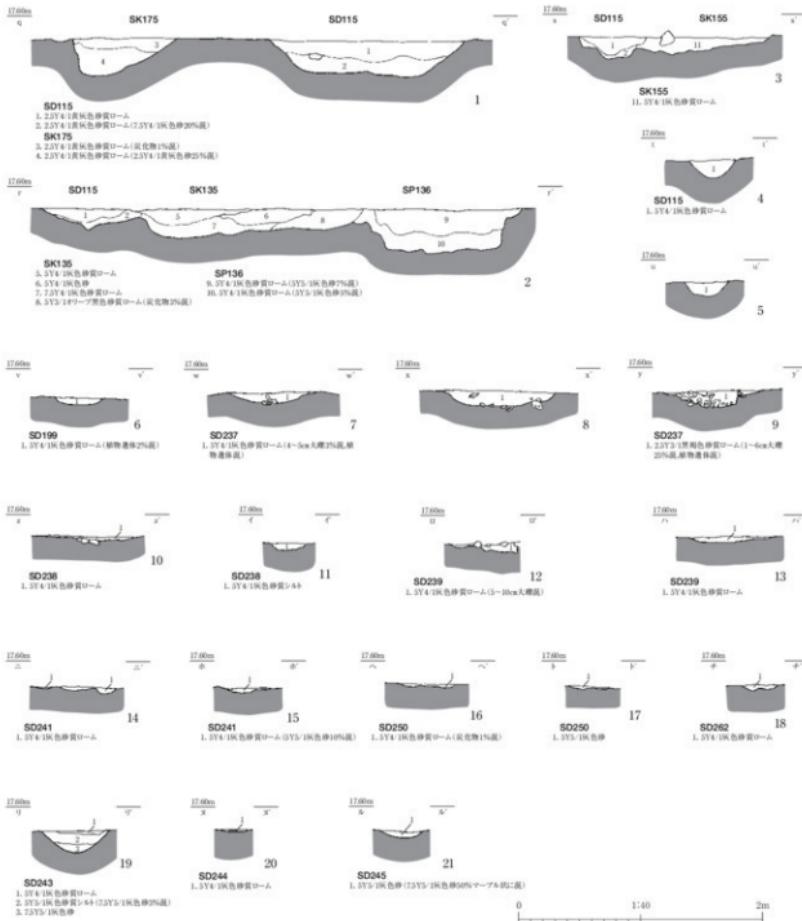


第66図 遺構実測図 (1/40)

A 1 · A 2 地区 1. SD1 · SD3 · SD4 2. SD2 ~ SD4 · SD6 3. SD1 ~ SD4 · SD6 4. SD3 · SD4 · SD6 5. SD1 · SD4 6 · 7. SD5 · 8 · 9. SD101 10. SD102 · SD106 11. SD102 · SD103 12. SD102 13. SD105 14. SD107 15. SD105 · SD107 · SD108 16. SD105 · SD108

237は越中瀬戸の灰釉筒形碗である。18世紀。238は高台の欠損した漆器碗で、体部内外面は黒色漆である。239はスギの柾目材を使用している側板である。鍵状の穴に柄を差し込む手桶側板であろう。243・244・245号溝（S D243・244・245、第65・67図）

A 2 地区中央に位置する溝群である。同規模の溝が3本南北方向に平行に並んだ溝で、溝間は約1mである。S B 3と同方位の遺構群で、畠と考えられる。遺物は出土していない。



第67図 遺構実測図 (1/40)

A 2 地区 1. S K175 2. S D115 3. S P136 4. S K135 5. S D115 6. S D119 7. S D237 8. S D238 9. S D239 10. S D238 11. S D239 12. S D239 13. S D239 14. S D241 15. S D241 16. S D250 17. S D250 18. S D262 19. S D243 20. S D244 21. S D245

422号自然流路（S D422, 第68~72図, 図版29・38・39・43~45・48~53・60~62・75）

A 1・2地区とA 3・4地区との境界に位置する自然流路であり, この流路の東西で遺構の様相が異なる。幅は推定約40mで, 確認出来ている最深部は確認面から80cmの深さである。埋土には暗黒黄色砂や灰色粘土質ロームなどがあり, 流路東岸の底部には厚い黒色ビート層が堆積する。またSD 422からは近世・近代の陶磁器片200点以上が出土（18世紀以降が大半）し, 1~2世帯の家族が消費しない程の量であった。恐らく修復不能となった陶磁器の捨て場として利用されたものであろう。

出土した遺物には, 越中瀬戸・瀬戸美濃・肥前陶器などの近世陶磁器, 漆器・下駄などの木製品, 錢貨があり, 多くは近世後期のものである。

240~249・277は越中瀬戸である。240~242は鉄釉皿である。240は見込みに菊の印花文がある。243・244は鉄釉灯明皿で, 243は受け部が口縁部よりも低く, 18世紀後半である。244は受け部のみ残存しているが, 受け部が口縁部より高くなることが推測される。19世紀前半である。245は鉄釉耳付壺で, 耳が2つか4つかは不明である。246・247・249は内外面に鋸釉がかかる擂鉢である。246は口縁部外面に三角形状の縁帯を作る。17世紀前半である。247は口縁部がぐの字に折れ曲がり, 口縁端部が直立する。体部下面下には横方向に削りを施す。17世紀後半か。248は体部外面に鋸釉がかかるサヤ状容器である。277は体部外面に鉄釉がかかる椀で, 見込みの釉は輪状に剥ぎ取られている。18~19世紀。

250~258は瀬戸美濃である。250は端反磁器碗で, 外面は花弁文, 内面は二重圓線の間に連弧文が描かれている。19世紀後半。251は太白手陶器碗で, 体部外面に笠文がある。19世紀後半。252は筒形磁器碗で, 体部外面に半菊花文が描かれており, 貫入が目立つ。19世紀前半。253は体部外面上下に渦巻き文, 見込みに一重圓線の中に文様を描く磁器碗。19世紀前半。254~257は蛇ノ目凹形高台の陶器皿で, 体部外面に草花文, 体部内面に草花文・扇文・亀甲文, 見込みに舟・草花文が描かれている。254~256は19世紀前半。257は19世紀後半。258は太白手陶器皿で, 見込みに梅文, 体部内面に草花文を描く。19世紀後半である。

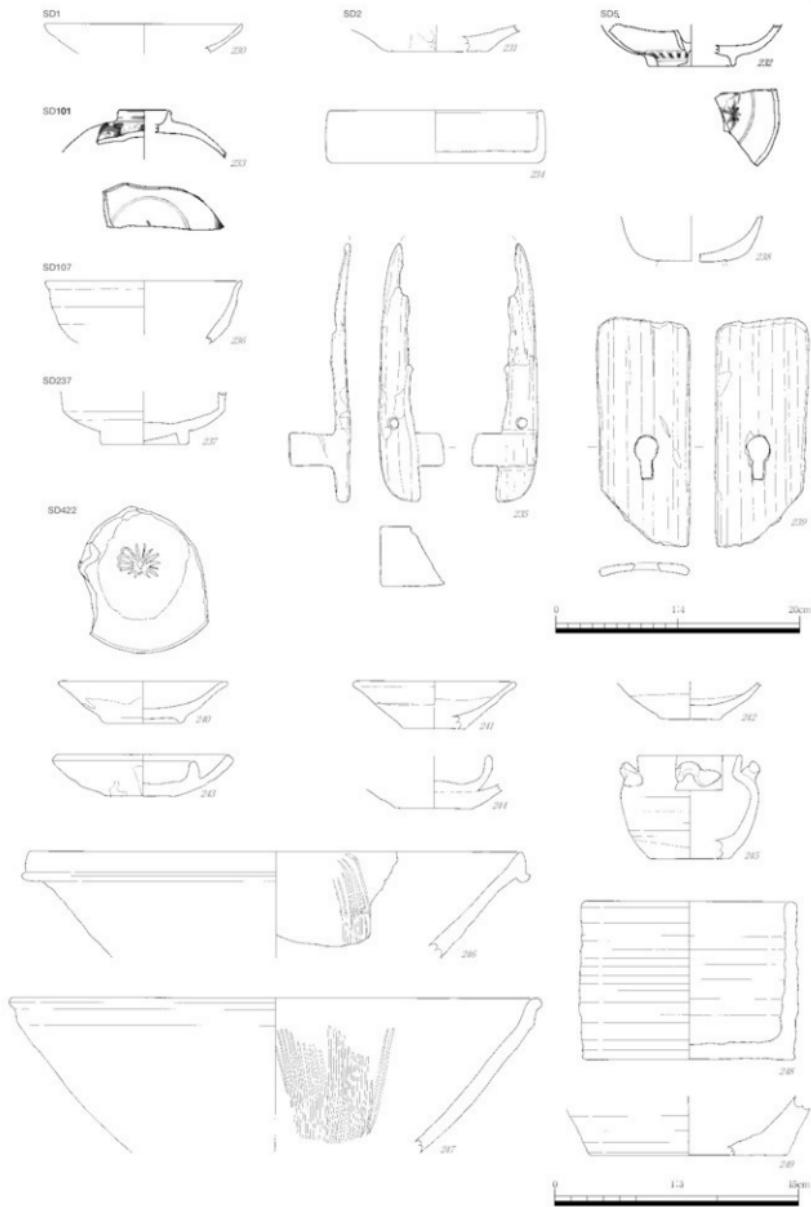
259~276は肥前陶磁である。259・260は刷毛目陶器碗で, 底部外面まで施釉されている。17世紀後半~18世紀前半である。261は蛇ノ目釉剥ぎ磁器皿で, 体部内面に鉄釉の二重斜格子文がある。17世紀末~18世紀。262は青緑釉陶器皿で, 見込みは蛇ノ目釉剥ぎで4つの砂目痕が残る。17世紀後半。263は蛇ノ目釉剥ぎ陶器皿で, 体部内面に刷毛目文がある。17世紀後半~18世紀前半。264は蛇ノ目釉剥ぎ磁器碗である。体部外面には丸文と2つの丸点のセットが3箇所あり, 体部内面には二重圓線を巡らす。19世紀前半~中頃。265は磁器碗で, 体部外面にコンニャク印判の鶴・草花文がある。

18世紀。266は磁器腰張半球形碗で, 体部外面に鳥・梅, 体部内面に四方擗文, 見込みに十字文が描かれている。18世紀後半~19世紀初め。267は筒形磁器碗で, 体部外面に草文, 体部内面に二重圓線を巡らす。見込みに花弁文のコンニャク印判がある。18世紀中頃~後半。268は輪花に型押しされた磁器皿で, 口縁端部に口錆が塗られ, それを覆うように油煙が付着している。見込みに風景が描かれている。19世紀前半。269は蛇ノ目凹形高台の磁器皿で, 型押しにより菊花状の陽刻文様になっている。底部外面に朱書きの文字がある。19世紀前半。270~274は蛇ノ目釉剥ぎ磁器皿で, 体部内面に梅文や草花文と二重圓線がある。見込みに五弁花文のコンニャク印判がある。17世紀末~18世紀。275は肥前系磁器の蓋である。体部外面に注連繩状の文様, 体部内面に三角格子文, 見込みに「寿」が描かれている。19世紀。276は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台鉢で, 口縁部が型打ち成形で輪花になっている。体部外面に草花文, 見込みは二重圓線の内に動物（キリンか）が描かれている。19世紀。



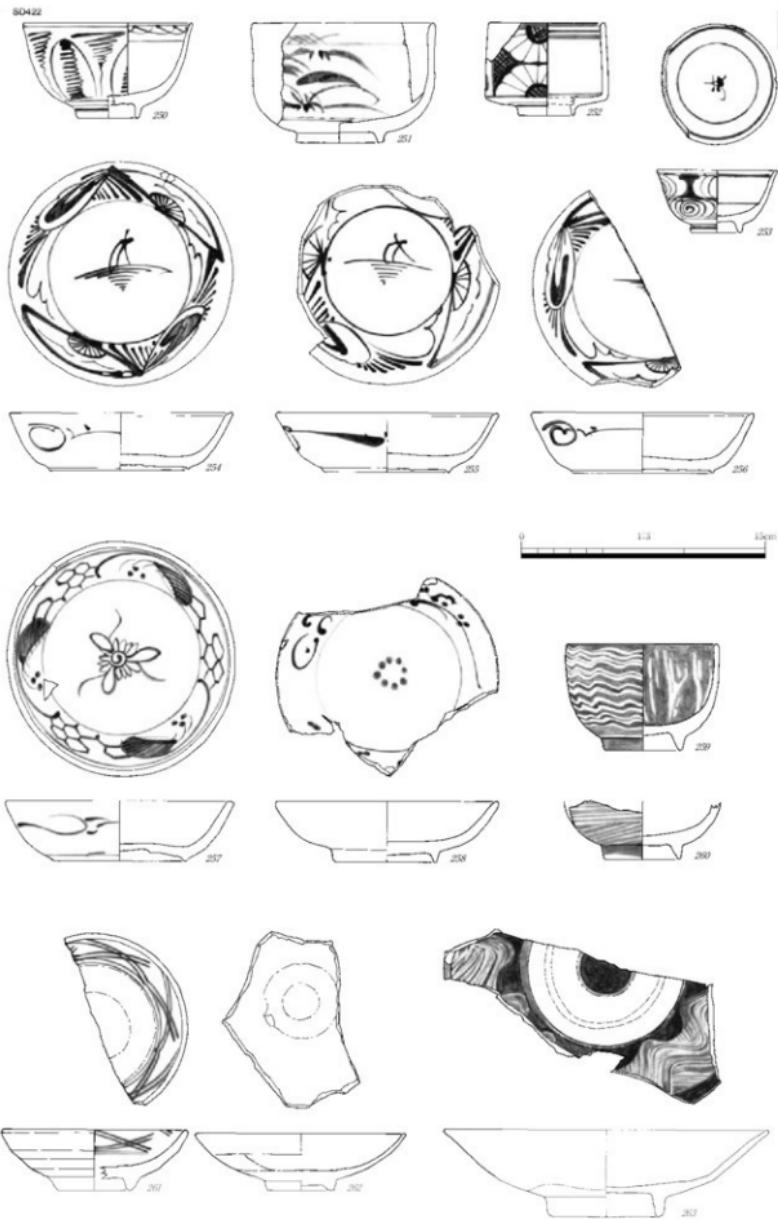
第68図 遺構実測図 (1/80・1/400)

A 1 ~ A 4 地区 SD422



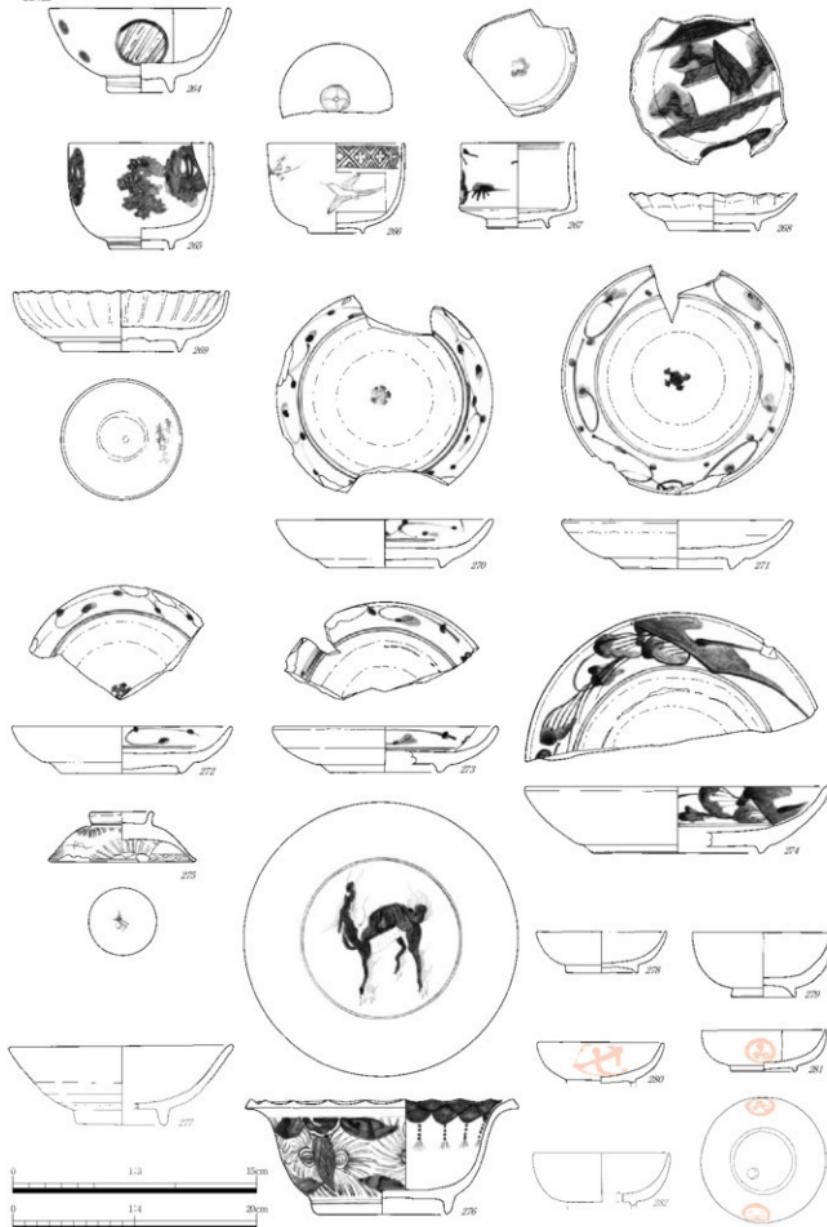
第69図 遺物実測図 (230~234・236・237・240~249 1/3, 235・238・239 1/4)

A 1~A 4 地区 SD 1 (230) SD 2 (231) SD 5 (232) SD 101 (233~235) SD 107 (236)  
SD 237 (237~239) SD 422 (240~249)



第70図 遺物実測図 (1/3)  
A 1～A 4 地区 SD422

SD422



第71図 遺物実測図 (264~277 1/3, 278~282 1/4)

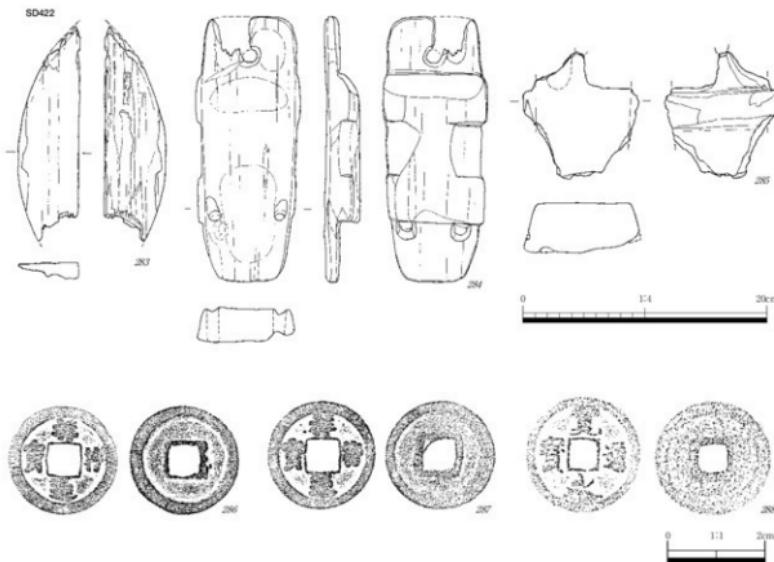
A 1~A 4地区 SD422

278～282は漆器である。内外黒色漆（278～280）と内赤外黒色漆（281・282）がある。278・279は内反り高台である。279には体部内面に赤色漆の文様がある。280の体部外面には丸に「七」の文字が赤色漆で1箇所書かれている。281の体部外面には丸に菱形の三つ葉文が赤色漆で2箇所描かれている。284は一本造りの連歯下駄である。サワラの芯近くの板目材を堅木取りしている。平面形は長方形で、台前方部が後方部より広くなっている。台中央部の断面は逆台形で、台裏と歯の境にノコギリによる切断溝が残る。後歯が後歯より後にある。台表に残る痕跡から左足用である。歯断面の激しい摩耗から内股での使用が考えられる。断面が逆台形の一木造り連歯下駄は、近世江戸遺跡の出土下駄には見られない形態であり、在地色を表してると考えられる。285は前歯あたりの下駄で、前壺の一部が確認できる。芯に近い板目材を使用している。283は板目材を使った底板である。

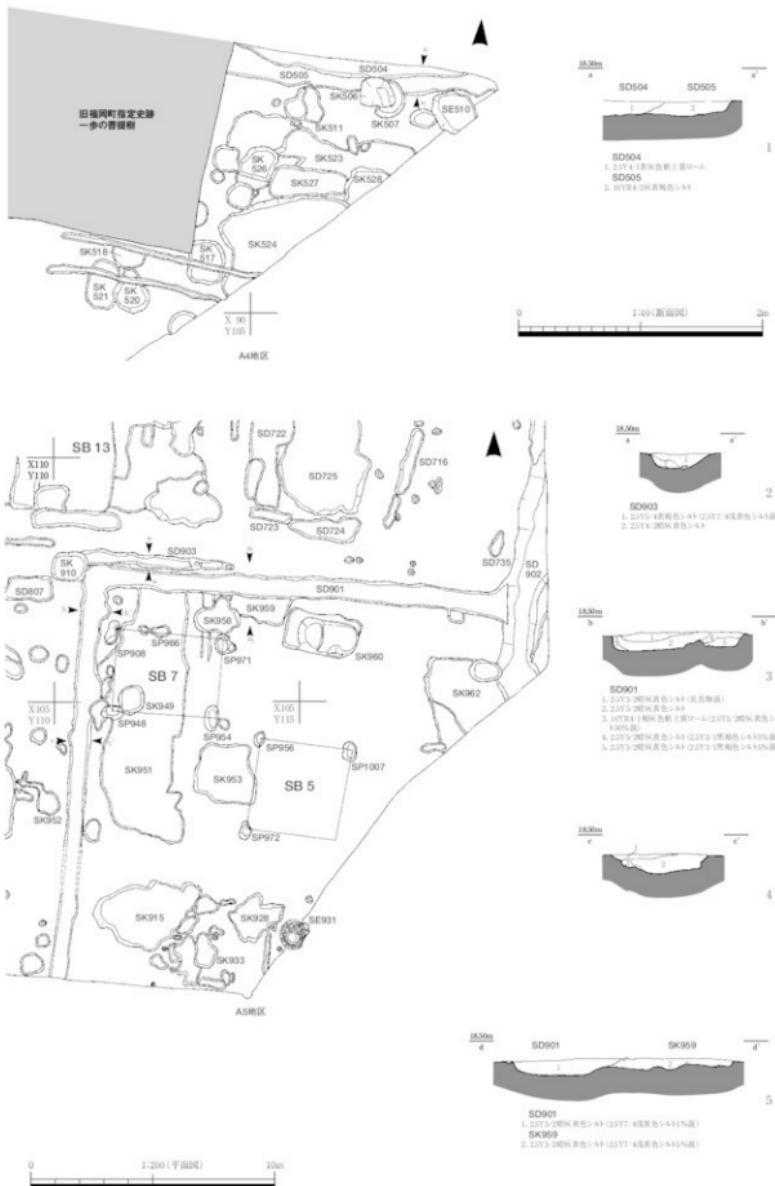
286・287は北宋の祥符通寶（楷書体）で初鑄年は1008年である。288は新寛永の寛永通寶である。

504・505号溝（S D504・505、第73・74図、図版37）

旧福岡町史跡「一歩の菩提樹」東側で検出した、A 4 地区に位置する東西に走る溝。S D504がS D505を切る。S D505は町道を挟んで南側に位置する方形の区画溝 S D901とつながり、その南辺となる可能性がある。遺物は S D504から越中瀬戸・肥前陶器、S D505から越中瀬戸（289）が出土している。289は、灰釉の丸皿で、内底面は内禿で、見込みには16弁の菊花文が押印される。高台は付け高台で、高台内側中央には漆状のものが付着する。



第72図 遺物実測図 (286～288 1/1, 283～285 1/4)  
A 1～A 4 地区 SD422



第73図 遺構実測図 (1/40・1/200)

A 4・A5地区 1. S D504・S D505 2. S D903 3・4. S D901 5. S K959・S D901

## 901号溝 (S D901, 第73・74図, 図版45)

A 5地区に位置し, 平面形がL形を呈する区画溝で, 南側はA 4地区へ続く。断面形は浅いレンズ状で, 埋土は暗灰黄色シルト単層である。東側で南北に延びるS D902と交差する。この溝とは埋土が同じことからほぼ同時期に存在していたと考えられる。遺物は肥前陶磁が出土している。290は肥前陶器の皿の底部である。内面に青緑釉, 外面に透明釉を施釉し, 見込みは蛇の目釉剥ぎである。17世紀後半～18世紀代である。

## 902号溝 (S D902, 第73・75・76図, 図版35・37・39・44・51・68・70)

A 5地区からA 6地区へ続くL字状に巡る区画溝。S D1101・1103に切られる。区画内の地山は疊となっている。幅3～4.1m, 深さ51cmを測り, A 6地区的区画溝としては最も幅が広い。埋土は暗灰黄色シルト質ロームを基調とする。遺物は中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・瓦質土器・越中瀬戸・肥前陶器・加工材・砥石・石鉢・釘などが出土している。

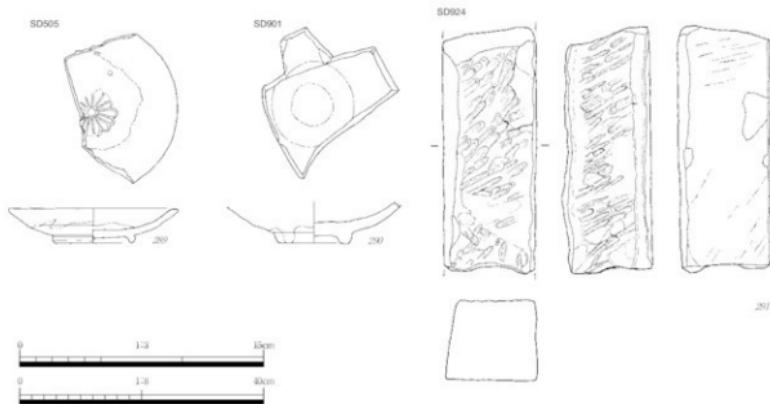
292・293は瀬戸美濃の天目茶碗で, 内外面に鉄釉がかかる。16世紀のもの。294は越中瀬戸の丸皿で, 見込み中央に桜の印文花を施す。高台は削り出し高台である。295・296は越中瀬戸で, いずれも底部削り出し, 見込み釉剥ぎの小皿である。295は鉄釉を施し, 見込みに菊の印文花, 296は灰釉を施し, 高台内に墨書がある。16世紀後半～17世紀前半のもの。297は肥前陶器の陶胎染付の椀で, 18世紀のもの。298は肥前陶器の皿。見込みに胎土目痕がある。また口縁部内面に鉄釉で小さく文様が描かれるが, 判然としない。17世紀前半のもの。299は砥石。表裏側面すべてに擦痕があり, 欠損している小口面にも認められる。300は石鉢で, 外面に粗い長方形のノミ痕が残る。

## 903号溝 (S D903, 第73図)

A 5地区に位置するS D901に平行する小溝。埋土はS D901と同じ暗灰黄色シルトの単層である。西端はS K910に切られる。遺物には肥前陶器がある。

## 1101号溝 (S D1101, 第75・76図, 図版30・43・44・51・53)

A 6地区的南側に位置するL字状に巡る区画溝。幅1m, 深さ16cmを測る。S D902の上層部分にあたるが底に疊がみられ, S D902を埋め戻し新たに細い溝を掘ったものと思われる。埋土は暗灰黄



第74図 遺物実測図 (289・290 1/3, 291 1/8)  
A 4・A 5地区 SD505(289) SD901(290) SD904(291)

色砂質ロームを基調とする。切り合い関係から、A 6 地区の区画溝としては最も新しいものと考えられる。遺物は須恵器・珠洲・瀬戸美濃・越中瀬戸・肥前陶磁が出土している。

301～303は肥前陶器の陶胎染付の椀で、いずれも18世紀のもの。304は肥前陶器の皿で、体部内面に青緑釉、外面に透明釉を施し、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。17世紀末～18世紀前半のもの。305～307は肥前磁器の碗で、305・306は外面にコンニャク印判による松と団鶴、307は草花文を描く。305は18世紀前半、306は18世紀後半のもの。

#### 1103号溝（SD1103、第75・76図、図版51）

A 6 地区の S D902・1101に平行し、S D902を切る。幅は最大で75cm、深さは8cmと浅い。埋土は黄褐色砂である。遺物は瓦質土器・越中瀬戸・肥前陶磁が出土している。

308は肥前磁器の皿で、体部内面に崩し唐草文、見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、中央にコンニャク印判による五弁花文を描く。18世紀中頃～後半のもの。

#### 1114号溝（SD1114、第75図）

A 6 地区に位置する、L字状に巡る溝。幅1.3m、深さ17cmを測る。埋土は、暗灰黄色シルト質ロームを基調とする。また、S D1163も一続きの溝となる可能性があり、その場合はコ字状の区画溝となる。A 5 地区 S D901と同様に近世の屋敷地を囲む溝と思われる。区画内は井戸 S E1219・1390のはか、多数の土坑が見られる。遺物は中世土師器・珠洲・青磁・肥前陶器・杭が出土している。

#### 1117号溝（SD1117、第75・76図、図版30・35・45）

A 6 地区に位置する、コ字状に巡る区画溝。幅1.8m、深さ38cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト質ロームを基調とする。A 5 地区 S D901と同様に近世の屋敷地を囲む溝と思われる。遺物は中世土師器・瓦質土器・珠洲・瀬戸・中国製染付・肥前陶器・漆器・釘などが出土している。

309は中国製染付の皿で、体部外面に唐草文、見込みに花文を描く。染付の色が褪せており、二次的に被熱した可能性がある。17世紀中頃～18世紀後半のもの。310・311は瀬戸の端反り皿。311は見込みの中心から少し外れたところにかたばみの印花文、高台内に輪ドチ痕がある。同一個体の可能性がある。312は肥前陶器の皿で、体部内面に青緑釉、外面に透明釉を施し、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。17世紀末～18世紀前半のもの。313は漆器の皿で、内外面黒色漆を塗布し、内面に赤色漆で文様を描く。見込みの文様は残存が悪いが、伝文か。また文様は体部内面にも描かれるようである。

S D902・1101・1114・1117の区画溝を整理すると、S D1114とS D1117は同時期に存在し、その後S D902へ、最後にS D1101へと移り、区画内を徐々に拡張していくものと思われる。

#### 1151号溝（SD1151、第75・76図、図版74）

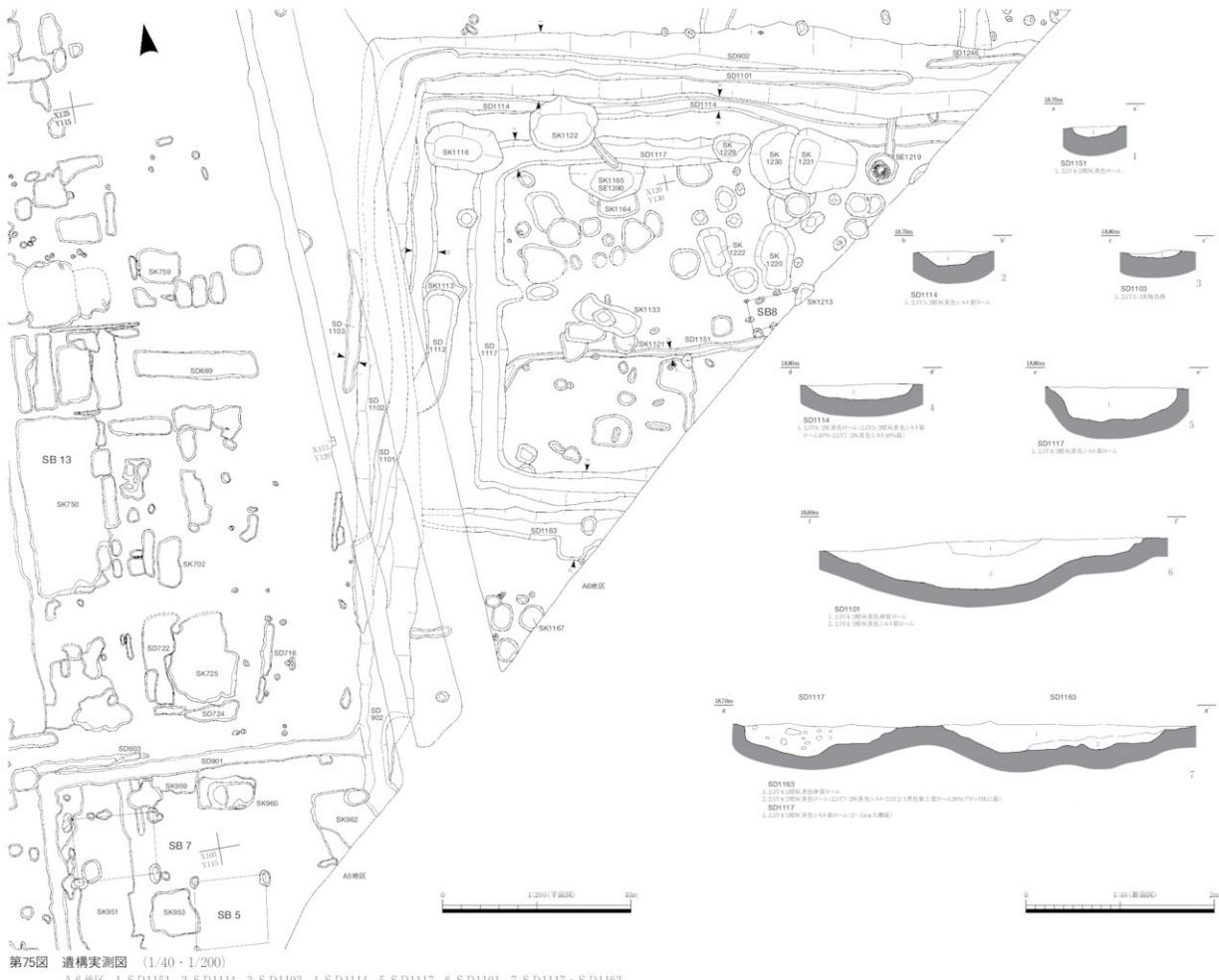
A 6 地区の S D1117に囲まれる区画内に位置する。幅60cm、深さ11cmを測る。埋土は暗灰黄色ロームである。遺物は硯が出土している。

314は硯で、硯尻側が残存する。陸部は使い込まれて窪んでいる。側面裏面に擦痕が見られ、砥石に転用されたと考えられる。

#### 1163号溝（SD1163、第75・83図、図版37・39・43）

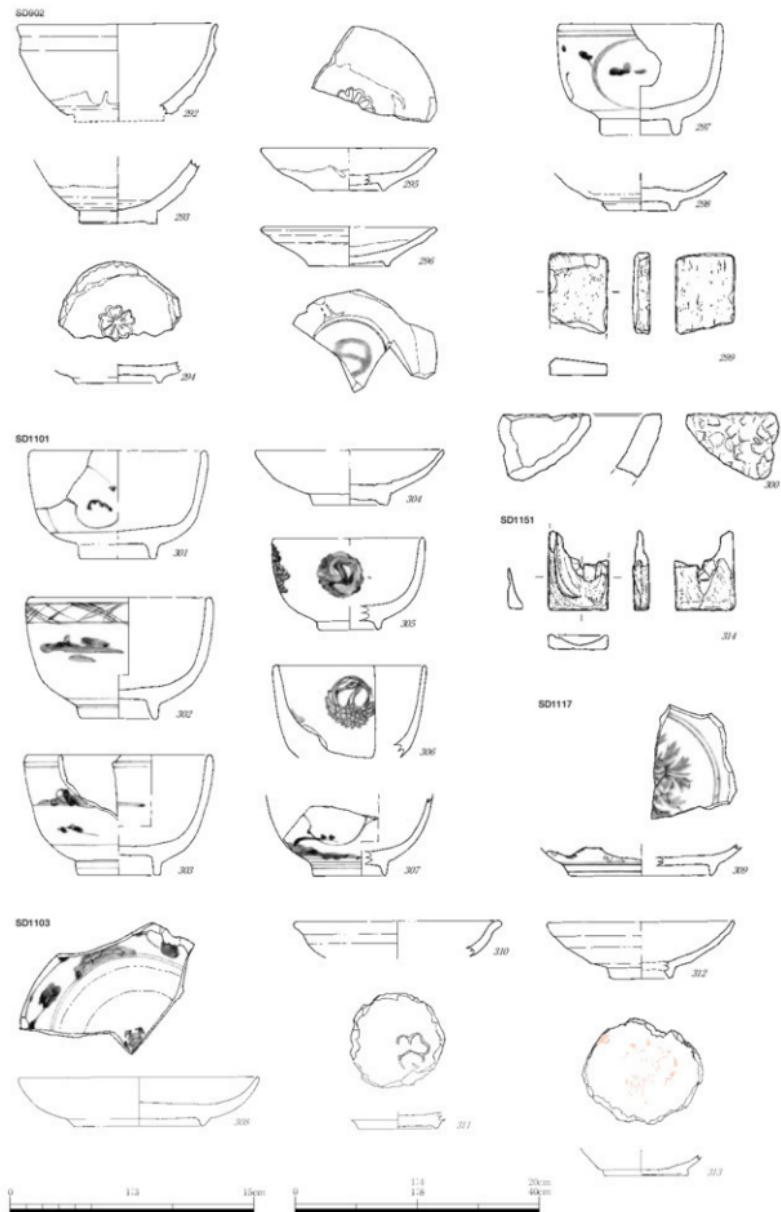
A 6 地区の S D1117の南側に平行して位置する。幅1.2～1.5m、深さ29cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。現用水路に切られるため確実ではないが、S D1114と一続きとなり、コの字状の区画溝となる可能性がある。遺物は須恵器・珠洲・越中瀬戸・肥前陶器が出土している。

315は越中瀬戸で、底部削り出し、見込み釉剥ぎの小皿である。見込みに菊の印花文を施す。高台内に墨書きがあるが、不鮮明で判読できない。316は茶入れで、鉄釉の上に飴釉を施す。体部中位に一



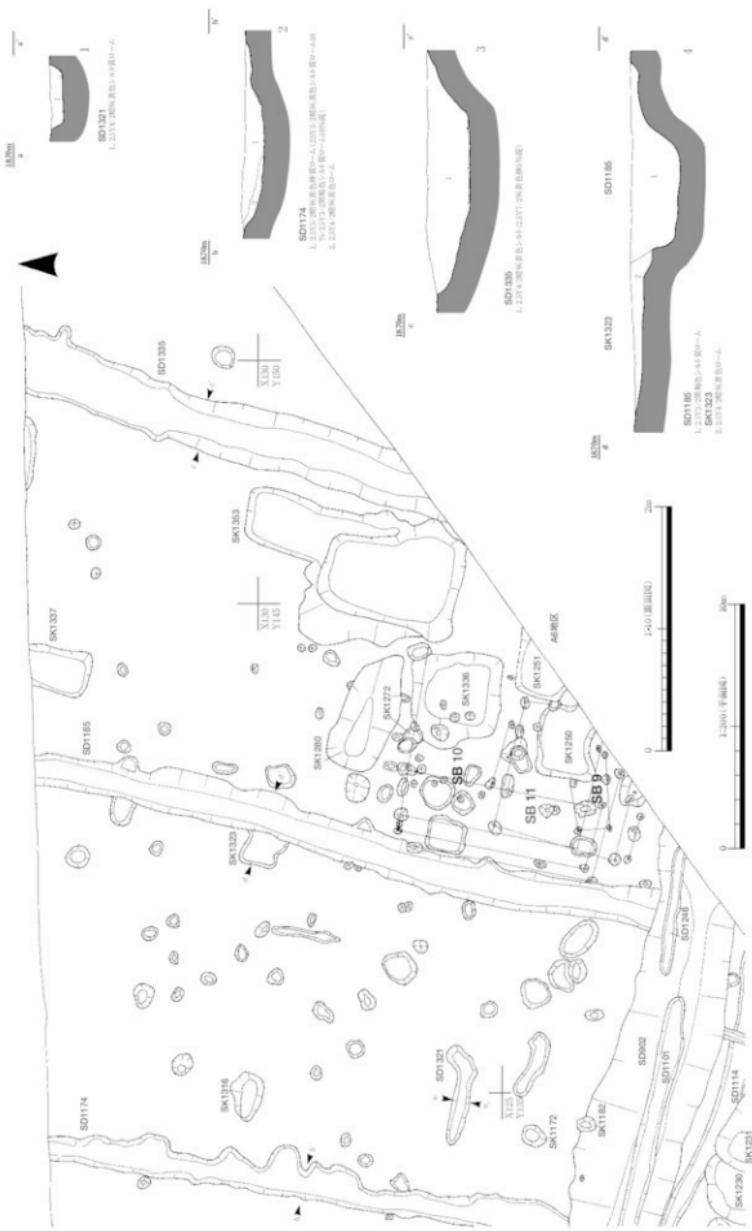
第75図 遺構実測図 (1/40・1/200)

A 6 地区 1. SD1151 2. SD1114 3. SD1103 4. SD1114 5. SD1117 6. SD1101 7. SD1117 - SD1163



第76図 遺物実測図 (292~299・301~312・314 1/3, 313 1/4, 300 1/8)

A 5, A 6 地区 S D902(292~300) S D1101(301~307) S D1103(308) S D1117(309~313)  
S D1151(314)



第77図 遺構実測図 (1/40・1/200)

A 6 地区 1. S D1321 2. S D1174 3. S D1335 4. S K1323 · S D1185

条の凹線を巡らせる。ヘラケズリされ器壁は非常に薄い。317は肥前陶器の皿で、見込みに胎土目痕が3箇所あり、高台内に墨書（「一」か）がある。17世紀前半のもの。

#### 1174号溝（S D1174, 第77図）

A 6 地区の北側に位置する。東肩は荒れており、検出が困難であった。幅0.8～2.1m、深さ16cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質ロームを基調とする。S D902に切られる。遺物は出土していない。

#### 1185号溝（S D1185, 第77図, 図版30）

A 6 地区の北側に位置する。幅1.3～1.8m、深さ39cmを測る。埋土は黒褐色シルト質ロームを基調とする。S D902に切られる。遺物は中世土師器・珠洲・瓦質土器・越中瀬戸・肥前陶磁が出土している。

#### 1321号溝（S D1321, 第77図）

A 6 地区の北側に位置する。幅53cm、深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト質ロームを基調とする。遺物は中世土師器が出土している。

#### 1335号溝（S D1335, 第77・83図, 図版11・69）

A 6 地区の北側に位置する。幅2.2m、深さ34cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。遺物は綠釉陶器・珠洲・瀬戸・肥前磁器・漆器・曲物・加工材・石臼が出土している。

318は綠釉陶器の椀の底部である。高台は貼り付けとし、内側に段をもつ有段輪高台である。全面に施釉する。近江産で10世紀第2四半紀のもの。319は曲物底板で、片面全面が焦げて炭化している。320は用途不明の部材で、上端をいびつな凸型に削り出したもの。321は石臼の下臼の破片で、わずかに凸面となった擦り面に、細く薄い副溝が彫られ、裏面はノミ痕が残る。

S D1174・1185・1335はそれぞれ一定の間隔をもって平行して位置し、それぞれ同様の幅をもつ。区画を意識したものと思われる。

#### 1401号自然流路（S D1401, 第78・83図, 図版33・35）

A 7 地区に位置する、南北に延びる最大幅約3.5mの自然流路。北端は調査区外へ延び、南端は南側に隣接するA 6 地区では検出できなかったことから、続く流路が調査区境の東西に延びる農道下にあるものと推定される。埋土はわずかに変化する暗灰黄色シルトがレンズ状に堆積するもので、溝の肩部は直線的ではなく、不規則なラインを描いている。遺物には、中世土師器・珠洲・土師質土器・肥前陶磁があり、時期は近世である。

322は土師質土器の擂鉢で、やや内湾する口縁部には強くヨコナデが施される。323はIV期の珠洲の壺の口縁部である。324は白磁の端反り皿である。釉は白濁した厚ぼったい釉調で、高台は断面三角形、豊付けは無釉である。時期は16世紀である。

#### 1402号溝（S D1402, 第78図）

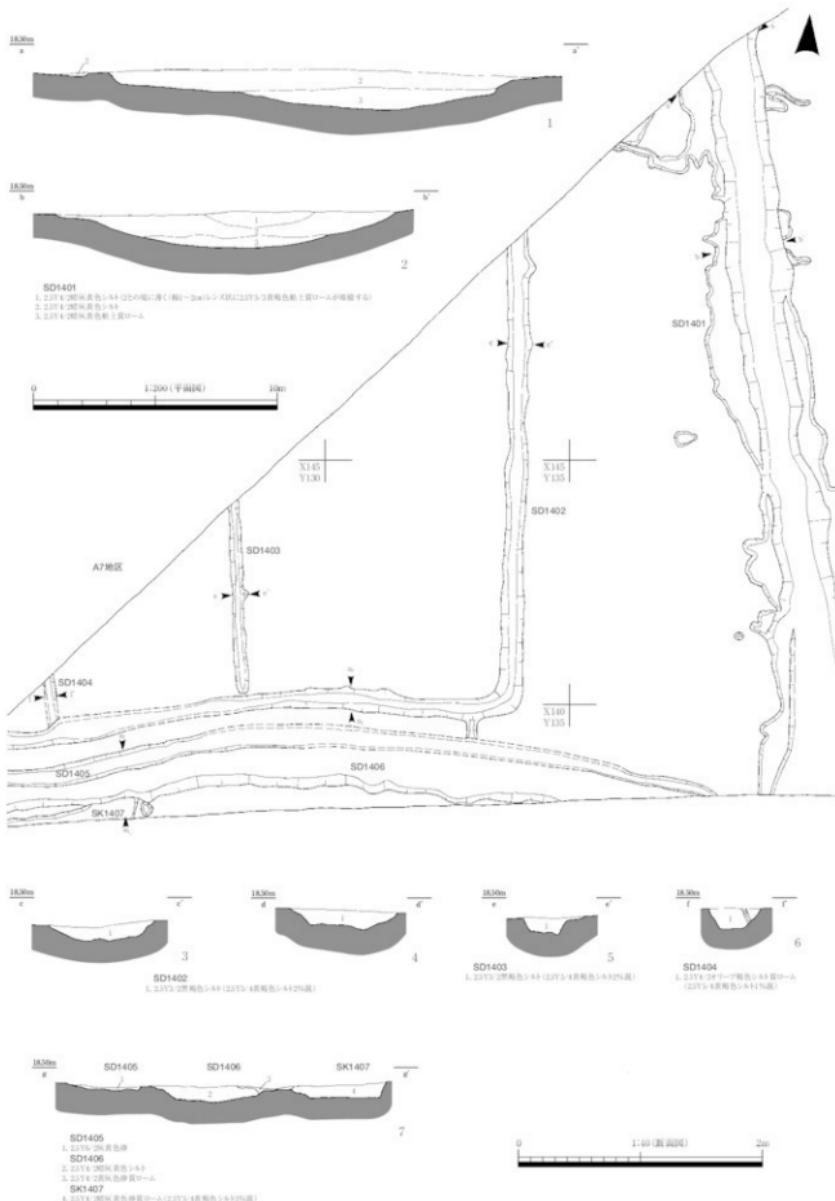
A 7 地区に位置する、南北から東西に延びるL字形の方形区画の溝。幅90cm、深さは15cmと浅く、埋土は黒褐色シルトの単層である。区画内部では南北に平行するS D1403・1404を検出したのみである。埋土色から考えて時期は中世後半と推定する。遺物は珠洲が出土している。

#### 1403号溝（S D1403, 第78図）

A 7 地区の区画溝 S D1402の内部で検出した、これと南北に平行する溝。断面が逆台形状で、埋土は黒褐色シルトの単層である。遺物の出土はないが、S D1402と同時期のものである。

#### 1404号溝（S D1404, 第78図）

S D1403と同じく A 7 地区の区画内部で検出した溝。わずかな部分の検出であるが、断面形は逆台



第78図 遺構実測図 (1/40・1/200)

A 7 地区 1・2. S D1401 3・4. S D1402 5. S D1403 6. S D1404 7. S K1407・S D1405・S D1406

形状で、埋土はやや明るいオリーブ褐色シルト質ロームの単層である。遺物の出土はないが、SD 1403と同時期と考える。

#### 1405・1406号溝（SD 1405・1406、第78図）

A 7 地区に位置する、東西に延びる近世の溝。両端は調査区外へ延びる。SD 1405は非常に浅く埋土は灰黄色砂である。SD 1406の北側上面に平行して堆積しており、埋土と流路の違いで同一遺構の可能性がある。SD 1406の埋土は暗灰黄色シルトである。南側に重複する近世の土坑S K1407より新しい。遺物はSD 1405から珠洲・越中瀬戸・肥前陶磁が出土している。SD 1406からは中世土器・珠洲・瀬戸が出土している。

#### 1521号溝（SD 1521、第79・80図）

A 7 地区に位置する、東西に延びる近世の溝。埋土はオリーブ褐色砂質ロームの単層である。上面で重複して検出したSD 1598・1600はこれを切る。遺物は、中世土器・越中瀬戸・肥前陶磁がある。

#### 1522号溝（SD 1522、第79・80図）

A 7 地区に位置する、SD 1521の北側で検出した東西に延びる溝。東側の区画溝SD 1920・1921・1922より新しい。埋土はオリーブ褐色砂質ロームで、遺物は、珠洲・肥前陶磁が出土している。

#### 1523号溝（SD 1523、第79・80図）

A 7・8 地区にわたり東から西に延びる溝で、東側では方形区画の溝と交差する。断面形はV字形を呈し、埋土は黒褐色シルトである。区画溝と交差していることからそれらと同時期と考えられ、区画溝の排水の役割を果たしていたと考えられる。遺物は弥生土器・須恵器・中世土器・珠洲がある。時期は中世後半である。

#### 1540号溝（SD 1540、第79・80図）

A 7 地区のSD 1523の北側で検出した近世の東西に延びる溝。先端はそれぞれ南北に向かって屈曲する。東側で南に延びるSD 1916は同一の溝と考えられ、重複するSD 1915よりは新しい。埋土は暗灰黄色砂質ロームである。遺物は弥生土器・珠洲・越中瀬戸・肥前陶器が出土している。時期は近世である。

#### 1598・1600号溝（SD 1598・1600、第79・80図、図版30）

A 7 地区のSD 1521の上面で検出した平行する2条の溝である。埋土はともに小礫が混じる灰黄色砂である。SD 1598は途中、東から直線的に延びてきた溝（SD 1904）と南から西に屈曲してきた溝（SD 1901）が合流したものである。その南側に平行するSD 1600は途中切れるが、SD 1929から統く溝である。遺物はSD 1598から弥生土器・珠洲・越中瀬戸・肥前陶磁が、SD 1600からは弥生土器・瀬戸・越中瀬戸・肥前陶器が出土している。

#### 1602号溝（SD 1602、第79・80図）

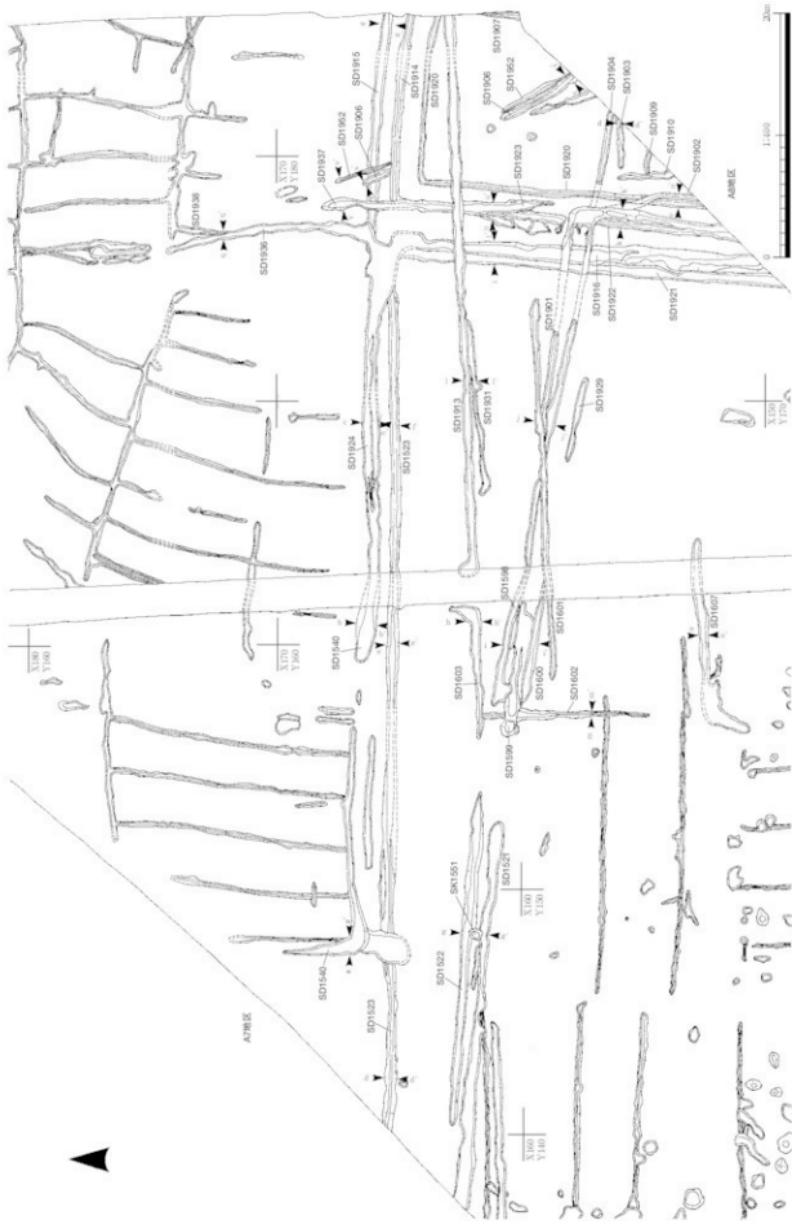
A 7 地区のSD 1522から垂直に南に延びる溝で、交差するSD 1521より古い。埋土は暗灰黄色砂質ロームで、遺物は弥生土器・中世土器・肥前陶器がある。SD 1522同様近世の区画溝の一端を担う。

#### 1607号溝（SD 1607、第79・80図）

A 7 地区のSD 1522に平行する東西に延びる溝で、両端を試掘トレンチに切られる。埋土はSD 1602と同様に暗灰黄色砂質ロームの単層で、この溝と直交する位置にある。遺物には弥生土器・珠洲があり、SD 1602と同様に区画溝の性格を有するものであろう。

#### 1902号溝（SD 1902、第79・80図）

A 8 地区に位置する南北に延びる近世の溝で、北端は消失するが、SD 1598に合流していたものと



第79図 遺構実測図 (1/400)

A7・A8地区 SD1521～SD1523・SD1540・SD1598～SD1603・SD1607・SD1901～SD1903・  
SD1906・SD1913・SD1915・SD1920～SD1925・SD1931・SD1936～SD1938・SD1952

考えられる。重複する S D 1920よりは新しい。埋土は黒褐色ロームで、遺物は珠洲と肥前陶器が出土している。

#### 1903号溝（S D 1903, 第79・80図）

A 8 地区の S D 1904 の南側で検出した東西に延びる溝で、東端は調査区外へ延びる。埋土は暗灰黄色砂の单層で浅く、遺物は肥前陶器が出土している。

#### 1906号溝（S D 1906, 第79・80図）

A 8 地区の南東壁から北西へ延びる溝。途中途切れるが、3重の方形区画溝を切る。埋土は水成堆積の様相を示す黄褐色砂が堆積していた。東側に平行する S D 1952も同様の埋土である。遺物は越中瀬戸・肥前陶磁が出土している。

#### 1915号溝（S D 1915, 第79・81・83図、図版31・34・62・63）

A 8 地区の方形区画溝の一番外郭を巡る溝である。内側の S D 1920と中央の S D 1914との間隔は等間隔であるが、S D 1915と S D 1914の間隔は北辺が西辺に比べて狭く、1/2の間隔である。幅は約60～80cmで、深さは35cm、断面形は逆台形である。埋土は黒褐色シルト質ロームである。溝の北東隅では漆器椀・竹製編み物などの木製品がまとまって出土している。

326・327は総黒色の漆器椀で、327の内面の見込みと体部外面には赤色漆で松葉と梅花文が描かれる。330は台形状の露卯下駄の歯である。この他にはⅣ期の珠洲の壺の口縁部（333）が出土している。

#### 1920号溝（S D 1920, 第79・80図、図版31）

A 8 地区の S D 1914の内側を巡る区画溝で、幅約50cm、深さ30cmで断面形は逆台形である。S D 1914と同じく近世の溝に切られる。埋土はオリーブ褐色砂で、遺物の出土はない。区画内部の空間に同じ埋土をもつ遺構は S D 1907・1909など溝のみで、建物等は検出されなかった。これらの3条の溝は埋土も同じで、すべて同時に機能していたかは不明であるが、ほぼ同時期に同じ目的をもって掘削されたものと考えられる。

#### 1936号溝（S D 1936, 第79・80図）

A 8 地区の S D 1540の東端から北へ延びる溝。埋土は暗灰黄色砂で、S D 1540や S D 1916と同質のものであることから同時期に機能していたと考える。時期は近世で、遺物には珠洲がある。

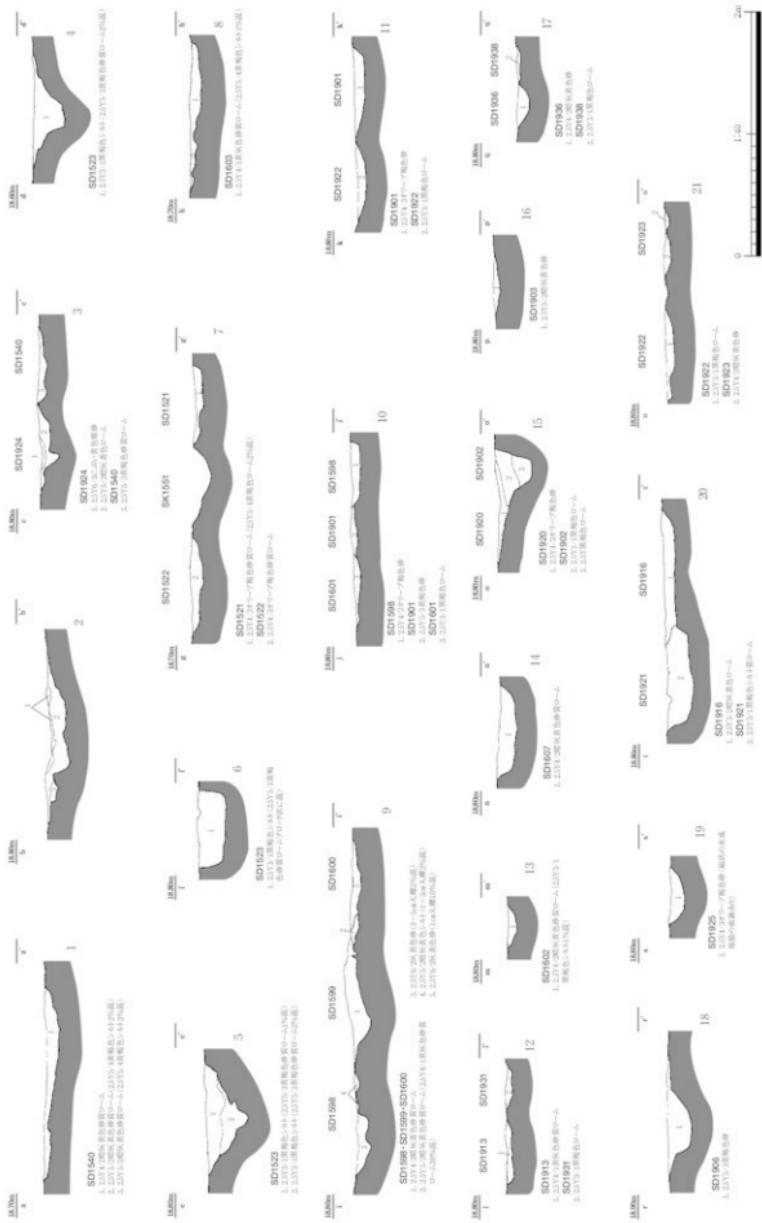
#### 1937号溝（S D 1937, 第79・81図）

A 8 地区の南北に延びる近世の溝。S D 1914・1915を切る。途中試掘トレチに切られ、南側は S D 1923と別番号となっているが同一遺構である。東西に横切る S D 1913はこれより新しい。埋土は暗灰黄色砂で、遺物には越中瀬戸・肥前陶器がある。

#### 1985・1986・1992～1996号自然流路（S D 1985・1986・1992～1996, 第82・83図、図版36・63）

A 8 地区の北端で検出した南東方向から北西方向に流れる自然流路。複数の支流に分かれるが同一の流路と考える。ほとんどの流れの堆積土は砂と暗灰黄色シルト質ロームで構成されており、一番大きな支流である S D 1986は、上層が暗灰黄色砂、中層が暗灰黄色シルト、下層が黄灰色砂の堆積状況を示す。これらの流路からは珠洲・青磁・越中瀬戸・肥前陶磁・漆器椀・金属製品が出土している。

335は青磁碗の口縁部で、内面に片切り彫りで蓮華文が施される。334は総黒色の漆器椀である。遺構の時期は近世である。



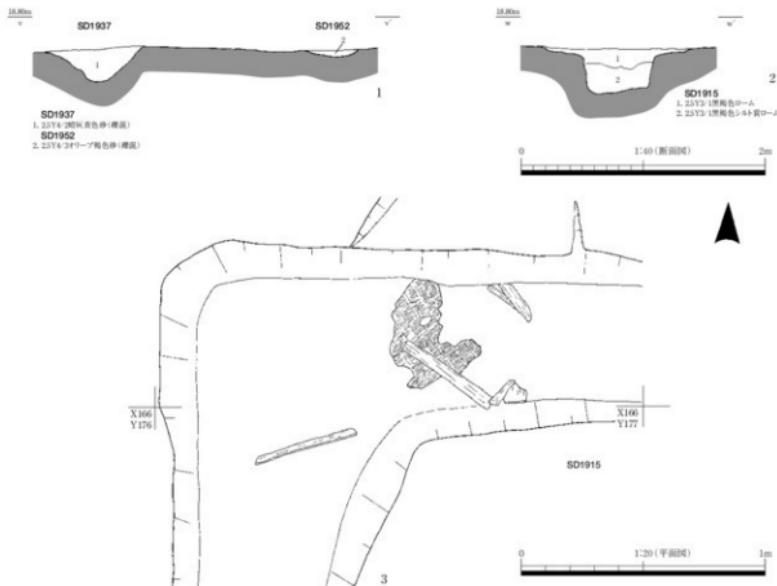
第80図 遺構実測図 (1/40)

A 7 - A 8 地区 1 - 2. S D1540 3. S D1540 - S D1924 4~6. S D1523 7. S D1521 - S D1522  
 8. S D1603 9. S D1598 ~ S D1600 10. S D1598 - S D1601 - S D1901 11. S D1901 - S D1922  
 12. S D1913 - S D1931 13. S D1602 14. S D1607 15. S D1902 - S D1920 16. S D1903 17. S D1936 -  
 S D1938 18. S D1906 19. S D1925 20. S D1916 - S D1921 21. S D1922 - S D1923

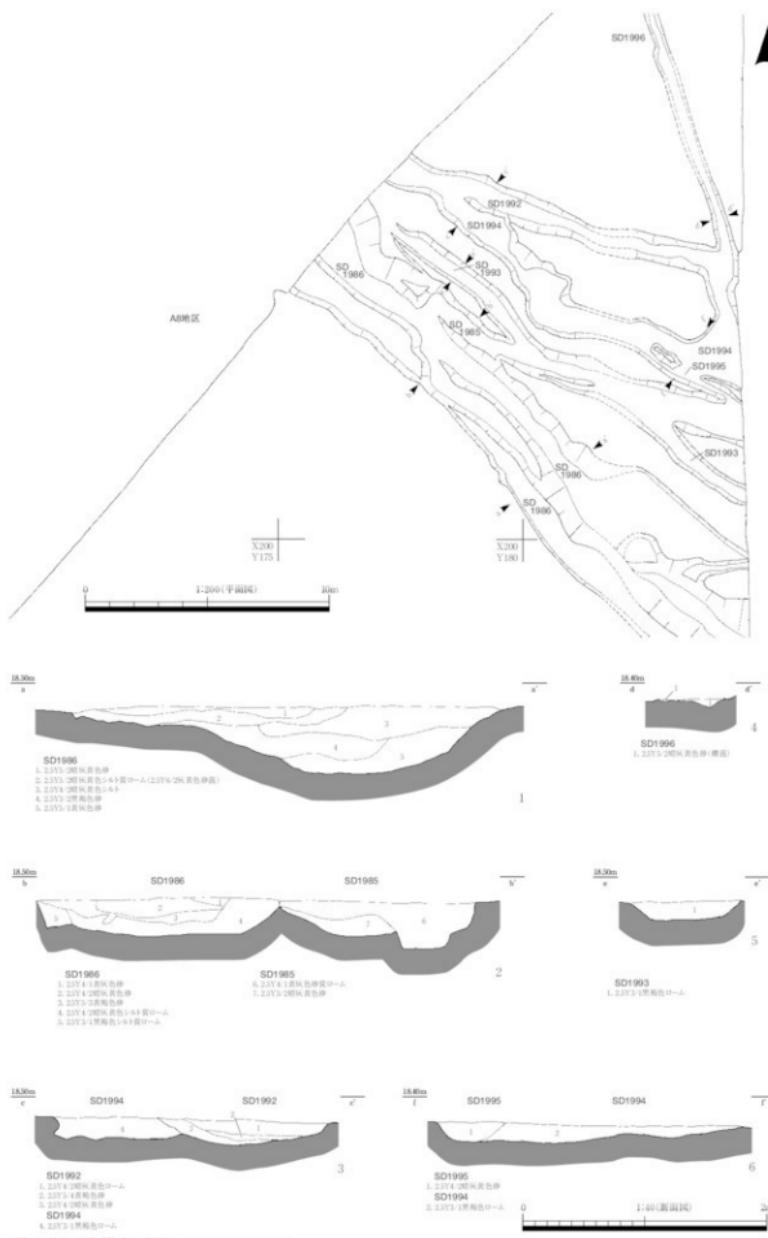
## F 畠

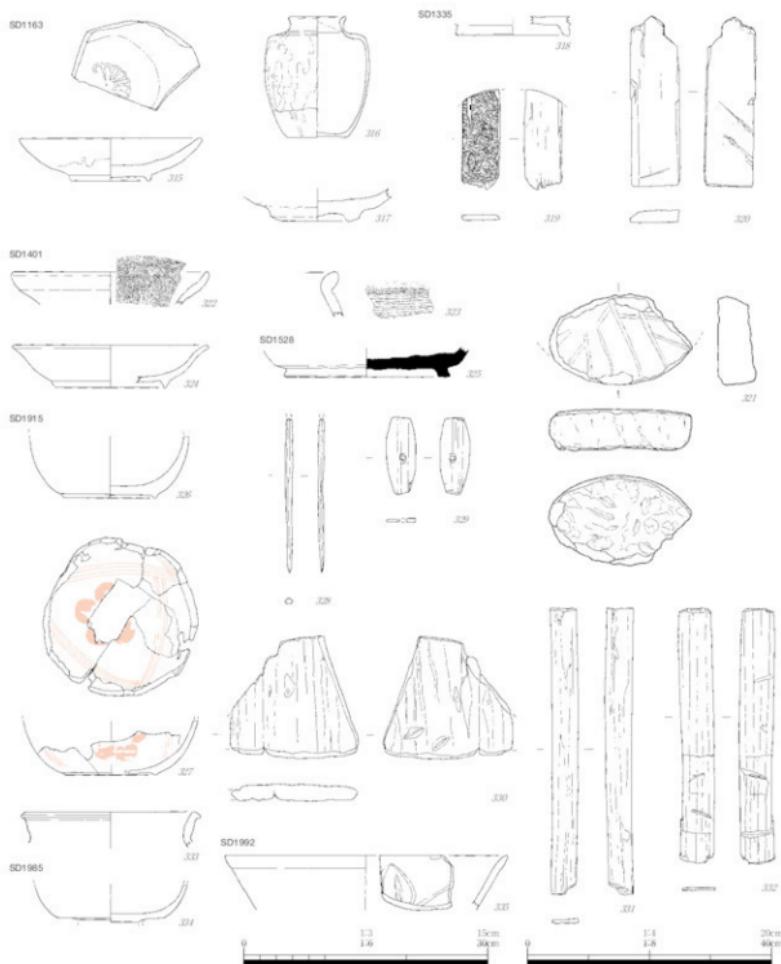
1491・1525・1532～1537・1555・1560・1570・1571・1615・1616・1934・1935・1938～1942・1944～1951・1953～1955・1957～1959・1961～1971・1974～1978・1981～1983・1987・1990・1991号溝(S D1491・1525・1532～1537・1555・1560・1570・1571・1615・1616・1934・1935・1938～1942・1944～1951・1953～1955・1957～1959・1961～1971・1974～1978・1981～1983・1987・1990・1991, 第84図)

A 7・8 地区ではほぼ全面で、埋土の色から中世以降の畠の区画溝と思われる遺構を検出している。方形区画溝の外側である北側と西側に見られ、区画溝から西に延びる S D1523周辺にはこれに平行または直交する方向の溝を検出している。溝の間隔は約3～6mであるが、平均4.5m前後のものが多い。A 7 地区では直線的な溝ばかりであるのに対し、A 8 地区ではやや弧を描くようになっているのは地形の制約を受けているものと思われる。埋土は黒褐色シルトの単層で、幅は約40cm前後、深さは10cm前後である。また、A 7 地区南側から A 6 地区北側に広がる土坑群は、埋土が黒褐色シルトの単層で、遺物の出土がほとんどなかった。この土坑群については、そのあり方から建物など構造物に問い合わせのある遺構というよりは耕作に関係ある土坑ではないかと考えている。



第81図 遺構実測図 (1/20・1/40)  
A 8 地区 1. S D1937・S D1952 2・3. S D1915





第83図 遺物実測図 (315～318・324・325・333・335 1/3, 319・320・326～330・334 1/4, 322・323・333 1/6, 321・331・332 1/8)

A 6～A 8 地区 S D1163(315～317) S D1335(318～321) S D1401(322～324) S D1528(325)  
S D1915(326～333) S D1985(334) S D1992(335)



第84図 遺構実測図 (1/40・1/700)

A7·A8地区 1.SD1555 2.SD1533 3.SD1955 4.SD1967 5.SD1983

## (2) 包含層出土遺物

A 1～8 地区の包含層出土遺物には、中世土師器・珠洲・中国陶磁・瀬戸美濃、越中瀬戸・肥前陶磁・須佐唐津・土製品・木製品・石製品・金属製品があり、多くは近世のものである。

### A 土器・陶磁器

#### 中世土師器（第85図、336～343、図版33）

皿には、口縁部を強く撫で、外反するもの（339・342・343）、撫での幅が狭いもの（337・341）、口縁部が少し内湾するもの（340）、口縁部が外方に延び端部が丸くなる（336）、外方に延びるが底部が少し凹む（338）ものがある。339は口縁部内外面に少し油煙が残る。342は端部内面が撫でのため少し凹む。時期は、337・341が13世紀前半、339・342・343は13世紀後半、340は14世紀、336は16世紀前半である。

#### 珠洲（第85図、344～360、図版34）

344・345は甕である。344は方頭のくの字の口縁部である。345は強く屈曲した口縁部である。346～355は擂鉢である。水平な口縁端部が少し窪むもの（346）、内傾する口縁端部に櫛描波状文を施すもの（347～349）とないもの（350・351）がある。356～360は壺である。356は口縁端部の内外に面を取る。357は円冠頭の口縁部である。359はなだらかな曲線の肩部分に櫛描波状文がある。360の体部下半は縱方向に削られている。以上の珠洲は、357・359はⅢ～Ⅳ期（13世紀後半～14世紀中頃）、346はⅣ期（14世紀後半）、347・348はV期（14世紀後半～15世紀前半）、344・349～351はVI期（15世紀後半）である。

#### 中国陶磁（第86図、361～366、図版35・36）

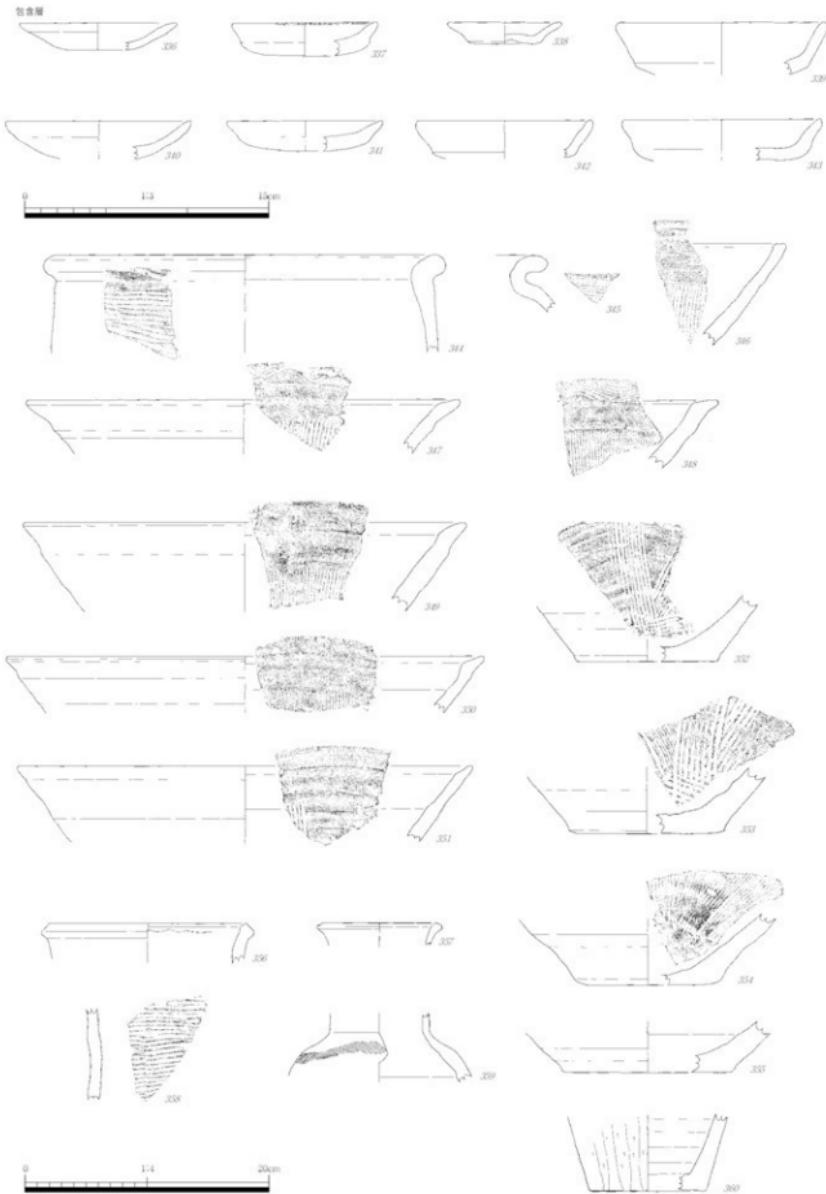
361は口禿げの白磁皿である。13世紀後半～14世紀前半。362は龍泉窯系青磁碗で、体部外面に鎬連弁文、見込みに双魚文を貼付ける。363・365は龍泉窯系青磁碗で、広弁の鎬連弁文が外面にある。366は幅広の高台の青磁皿で、見込みに片切り彫りで文様を描く。364は口縁端部が外反する青磁碗で、買入が多い。362・363・365・366は13世紀後半～14世紀前半である。364は14世紀後半～15世紀前半。

#### 瀬戸美濃（第86・88・89図、367～369・406・407・419、図版35・49・50・55）

367は灰釉端反皿で、15世紀後半～16世紀前半である。368は口縁端部を指で押さえて輪花にした灰釉ヒダ皿で、16世紀後半である。369は口縁端部が平坦で、体部内外面上半に灰釉が掛かる卸皿で、15世紀前半である。406は蛇ノ目四形高台の瀬戸美濃磁器皿で、体部外面に唐草文、内面に草花文が描かれている。19世紀後半。407は瀬戸美濃端反磁器碗で、底径が小さく、体部外面は笹、見込みは圓線の中に「寿」の文字が描かれている。19世紀後半。419は太白手の陶器椀である。高台があまり高くなく、見込みに花弁文？がある。19世紀後半。

#### 越中瀬戸（第86・87図、370～384・386～405、図版38・40～42）

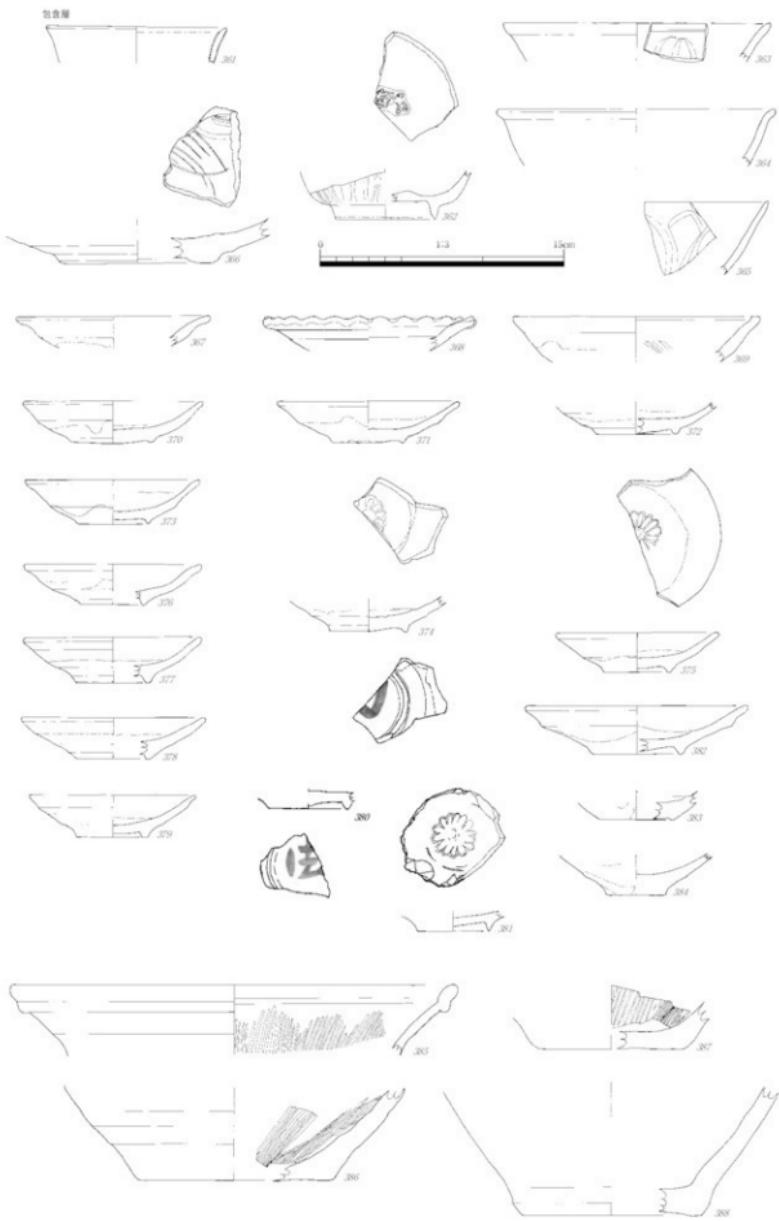
370～384は皿で、削りだし高台（370～382）・削り込み高台（383）・糸切り高台（384）がある。無釉の見込みや豈付けが使用のため擦れているものがほとんどである。370・374・382・383には、見込みに釉止めの段がある。見込みに14弁菊（381）・16弁？菊（374・375）の印花が押されているものがある。底部外面には、「法（カ）」（380）・判読不明（374）の墨痕がある。灰釉（374・376・378）以外は、鉄釉で後者が多くなっている。時期は、釉止めの段があるものが17世紀、それ以外は、18・19世紀を中心とする。386・387は擂鉢である。全面に鉄釉がかかる。底部外面は糸切り、内面は卸目が下方から上方に引かれている。388・391～393は大型（388）・小型（391～393）の壺である。388は体部内部が鉄釉、外側が鉄釉である。この大型製品は、越中瀬戸ではほとんど確認できず珍しい。小型



第85図 遺物実測図 (336~343 1/3, 344~360 1/4)

A地区 包含層

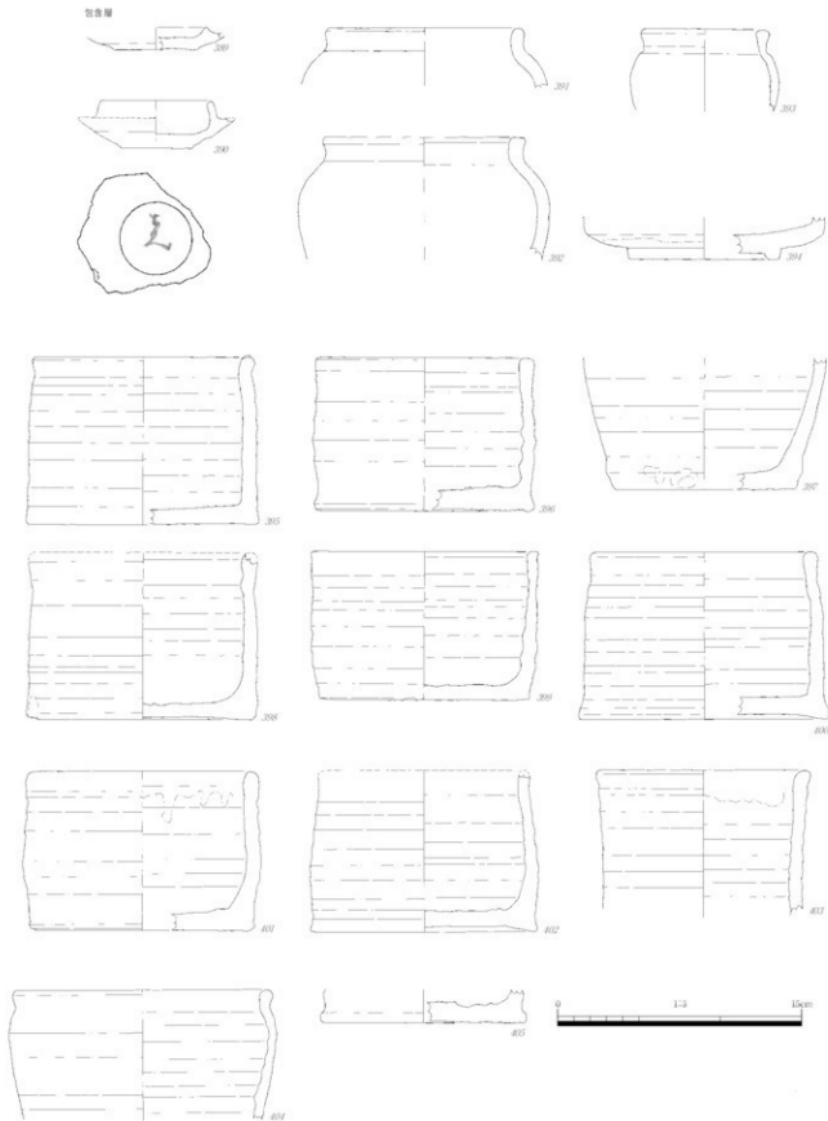
A 1 地区(340) A 2 地区(355) A 4 地区(358) A 5 地区(359) A 7 地区(336・338・339・342・343・345・346・350・351・356・357・360) A 8 地区(337・341・344・347・349・352・354)



第86図 遺物実測図 (1/3)

A地区 包含層

A 1 地区(367・372・376・380・382・387) A 2 地区(373・383・384) A 3 地区(379) A 4 地区(375)  
 A 5 地区(366・370・371・377・386) A 6 地区(362・374・385) A 7 地区(361・364・365・368・  
 378・388) A 8 地区(363・369)



第87図 遺物実測図 (1/3)

A地区 包含層

A 1地区(390・394) A 3地区(389・395・396・398~404) A 5地区(392・405) A 6地区(397)

A 7地区(391・393)

のものは広口で、体部内外面に鉄軸が掛かる。時期は18・19世紀である。389・390は灯心受けの付いた鉄軸灯明皿で、底部外面は糸切りである。受付部が口縁部より低くなると推測される389と受付部が高くなる390がある。389が18世紀後半、390が19世紀である。390の底部外面に墨痕がある。394は底部外面鉄軸、内面無軸の筒形の火入れである。395～405は糸切り底のサヤ状容器で、体部内外面に鉄軸がかかる。多くは直立の体部だが、くの字になるもの（395・404）もある。このサヤ状容器は口縁端部が擦れており、窯場ではサヤとして使っていったものが、近世集落では容器として使われている。

#### 須佐唐津（第86図、385、図版40）

折り返した口縁端部が外面に突帯状の口縁帯をつくる陶器の擂鉢で、鉄軸がかかる。18世紀である。北陸の擂鉢は、17世紀後半から、肥前陶器製品以外に須佐唐津<sup>(注10)</sup> 製品が少量入る。富山県内でも同様で、擂鉢の内では1%以下の量である。

#### 肥前陶磁（第88・89図、408～418・420～425・429・430・432～450、図版42・45～47・49・50・54・55）

423・424・432～442は皿である。423・424は蛇ノ目釉剥ぎ陶器で、体部外面は透明釉、内面は青緑釉である。432は口縁部を輪花に型打ちし、体部内面に草花文が描かれている。433～435は体部外面に唐草文や圓線、内面に草花文を巡らす。436～438・440・442は蛇ノ目釉剥ぎ磁器である。441は見込みに方形の中に草花文が描かれている。440は17世紀後半～18世紀前半、432～437・440・446・447は17世紀末～18世紀。442は18世紀前半、438・439・441は18世紀である。408～417・420・421、429・430は碗である。408～412・414・415は陶胎染付で、体部外面に草花文が描かれている。18世紀前半である。413・421・422は高台裏まで施釉された呉器手陶器碗で、17世紀後半～18世紀前半である。420は見込みに鉄絵のある京焼風陶器碗で、17世紀後半である。429は蛇ノ目釉剥ぎ磁器である。体部外面に丸文と2つの丸点のセットが3箇所あり、内面に二重圓線を巡らす。19世紀前半～中頃。430は体部外面に草花文、脛付けを無釉にした磁器である。449は体部外面に笠、内面に二重圓線のある磁器筒形碗である。18世紀後半～19世紀前半。443は体部外面に綾をもつ磁器蓋で、体部外面に青磁釉、頂部と体部内面に透明釉がかかる。頂部に二重方形枠内に「筒江」の文字、体部内面に四方櫛文、二重圓線内に五弁花文がある。18世紀後半である。450は体部外面に三重圓線に草花文、底部外面に文様が描かれている磁器猪口である。18世紀。418・425は鉢である。418は白化粧土による刷毛目陶器である。425は蛇ノ目釉剥ぎ陶器で、体部外面が透明釉、内面が青緑釉である。共に17世紀末～18世紀である。445～448は肥前磁器の紅皿<sup>(注11)</sup>である。口縁端部は平坦で、体部外面に唐草文（445・446）と貝殻状文（447・448）を型押しする。前者は18世紀末～19世紀前半、後者は19世紀後半以降である。

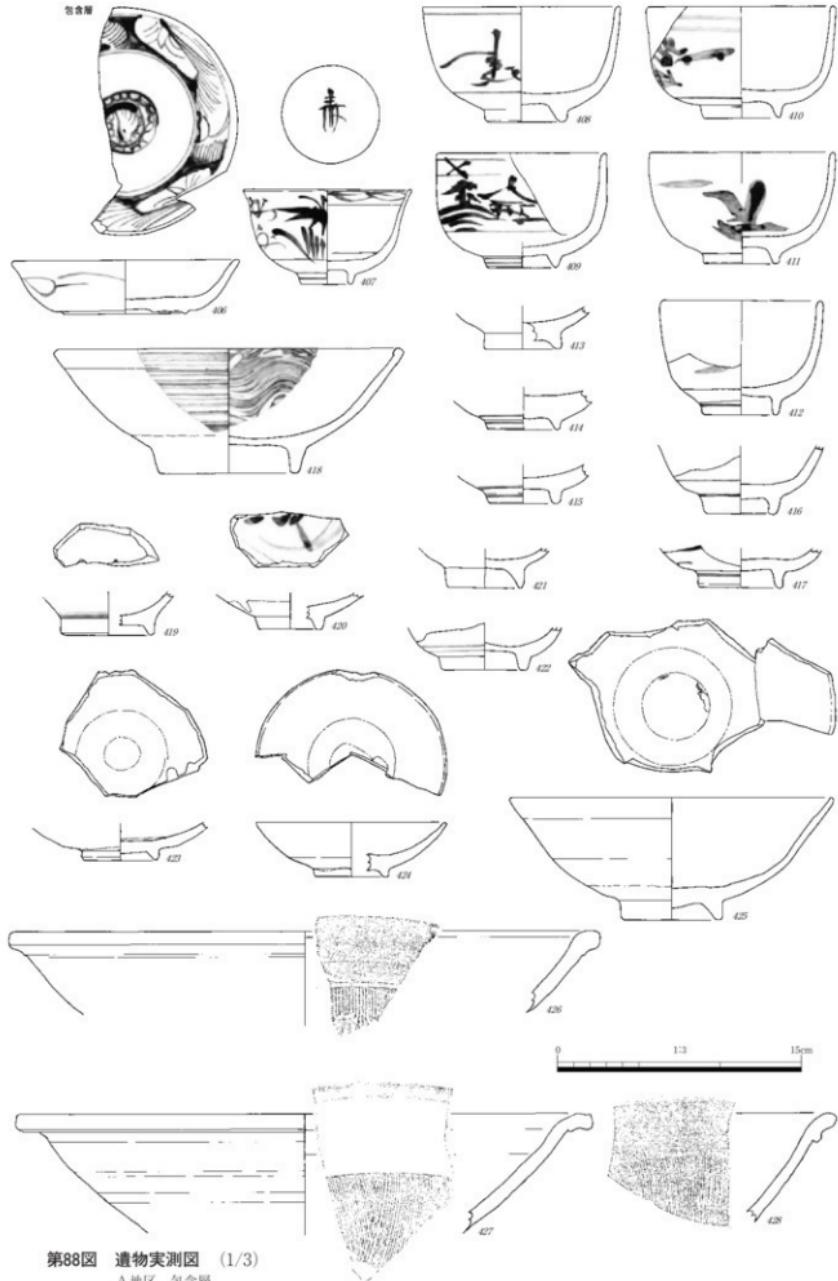
#### 産地不明陶磁器（第88・89図、426～428・431・444、図版47・50）

426～428は肥厚した口縁部で、体部内外に鉄軸が掛かる陶器擂鉢で、18世紀後半～19世紀である。肥前陶器とも考えられるが、同様な製品が在地窯でも見られるので、在地産と考える。431は体部外面に草花文を印刷した磁器碗である。産地不明である。444は体部外面に笠文が1箇所ある染付磁器の紅皿で、赤上絵付けで「京都四条辺に平小町紅」の文字が書かれている。「小町紅」とは、京都の『商人買物独案内』に「御用 小町紅 本家仕入所 紅屋平兵衛」とあり、当時有名な紅の商品銘である<sup>(注12)</sup>。富山市友松遺跡では産地不明の小町紅2点が出土している。19世紀。

注10 須佐唐津は、現在の山口県萩原市和田沖で江戸初期から人来未だに埋かれた陶磁器、瓦類や瓦施の植体・窓・梁などの古着類の他、古着類品もある。

注11 このタイプの紅皿は、19世紀後半の頃から急速で大量生産されている。

注12 松崎重子「200「E」の説明」考古学研究季刊「E」連絡研究会 柏森司



第88図 遺物実測図 (1/3)

A地区 包含層

A 2地区(426) A 3地区(406~410・413・418・423)

A 4地区(411) A 5地区(414~417・419~421・424・425・427)



第89図 遺物実測図 (1/3)

A 1 地区 (449) A 2 地区 (431・435・440・445)  
 A 3 地区 (429・432・438・441～444・446・448)  
 A 4 地区 (433・439・447・450) A 5 地区 (437)  
 A 6 地区 (430・434・436)

## B 木製品

漆器（第90図、451～455、図版66・67）

内外面黒色漆の椀（452・454）と皿（455）、外面黒色漆・内面赤色漆の椀（451・453）がある。材質はブナとトキノキである。452は外底面に「今」の文字が赤色漆で描かれている。454とともに中世後半のものであろう。455の底部外面は漆を塗っていない。この形態は12世紀後半～13世紀である。451・453は近世のもので、体部外面に丸に菱形文や菱形の三つ葉文の赤色漆がある。

底板（第90図、456）

20cm以下の小型曲物の底板であろう。柾目材。

桶（第90図、457）

板目材を使った円形板で、断面には木釘が2箇所残る。板の上の3.5cmの四角枠の中に「清（カ）」の焼印が押されていることから、桶の天板であろう。この焼印は、容器の所有者や内容物の生産者、販売者の名、屋号、商標を表すものと推測できる。金沢市安江町遺跡の焼印は17世紀から見られるが、四角の印は19世紀のものである<sup>(注3)</sup>。この例を参考にすれば、457は江戸時代後期のものであろう。半截された円形状の3箇所に穴があいていることから、これは蓋として転用されたものか。

杓子（第90図、458、図版67）

黒色漆の杓子で、材質はブナである。堅木取りの板目材で、汁をすくう側を木裏にしている。

加工木（第90図、459・460、図版66）

459は柾目の板材で、端近くに穴が穿孔されている。460は先端を尖らせた加工棒で、コウヤマキの材質である。尖った方の近くに方形の穴があり、他方には小さな穴が穿たれている。柾目材。

## C 石製品

砥石（第91・92図、461～473、図版70・71）

擦り面が2面から5面まであるが、4面のものが多い。凝灰岩が大部分で、泥岩が少しある。ほとんどが中砥石である。色調は灰色が多いが、黄色がかったものもある。断面形と平面形から4つに分かれる。A類は断面が長方形で、平面が板状のものである（465～467、470・471～473）。465は欠損した平坦な面も擦っている。側面には切断痕を残している。473も側面に切断痕を残す。B類は断面が長方形で短冊型のものである（469）。469は軽石？で、荒砥石である。C類は断面が長方形で、平面が台形のものである（463・468）。463は擦り面が2面で、櫛歯タガネ状工具痕が3側面にある。工具痕のある面が平坦であるため、置き砥石と考えられる。468は両側面を擦る。D類は断面がほぼ正方形で、平面が台形のものである（461）。底面に切断痕がある。

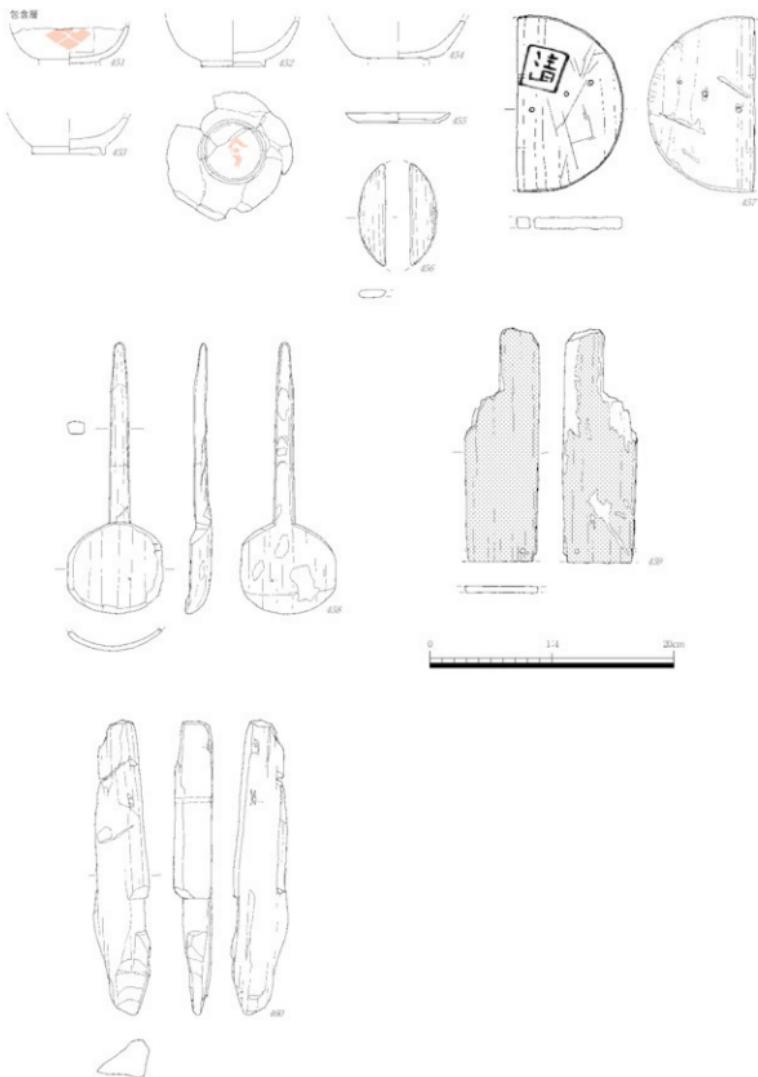
硯（第92図、474～476、図版74）

すべて長方硯である。幅は約2寸である。石材は泥岩である。475は、硯側の縁がすり減り、陸と同じ高さになっている。陸の墨痕が途切れて、少しV字形に凹んでいる。後に砥石として使われていたのであろう。476の硯背が少し凹んでいる。474は硯の縁のみが残ったものである。

石臼（第93図、477～481、図版72・73）

上臼（477・479・480）と下臼（481）は粉挽き臼である。477以外は、凝灰岩である。477は砂岩で風化が激しい。供給口は大きく欠損しているが、挽き木の穴と軸受けがある。479は供給口・軸受け・挽き木が残るが、目は擦り減ってほとんどわからない。480は側面に切断痕を残す。481は火を受けて黒くなっている。目は良く擦れているが、8分画であろう。石質は荒い凝灰岩で、南砺市の桑山石製品である。478は茶臼。凝灰岩の上臼で、残っている目から、目は6分画と考える。

(注3) 増山仁：1997『金沢市安江町遺跡』金沢市教育委員会



第90図 遺物実測図 (1/4)

A地区 包含層

A 2地区(451・456・458・459)

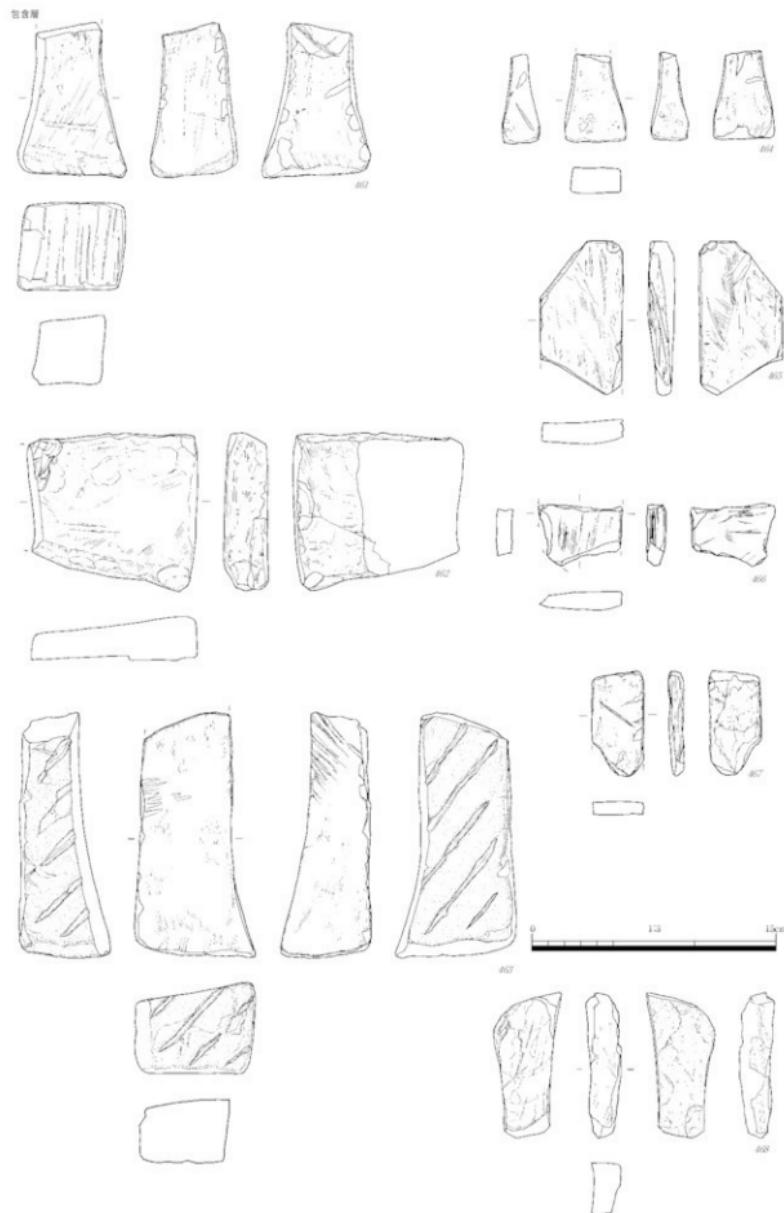
A 3地区(451)

A 4地区(452・453・457)

A 6地区(460)

A 8地区(455)

125



第91図 遺物実測図 (1/3)

A地区 包含層  
A 2地区(463) A 3地区(461・464~466・468) A 6地区(462・467)

## その他（第93図、482）

482は立方体の石製品で、一辺24cmの正方形の底面のうち幅20cm四方を擦り、中央部が1.5cm窪んでいる。石塔類の一部であろう。凝灰岩。

## D 金属製品

## 煙管（第94図、483～486、図版75）

銅製の雁首（483）と吸口（484～486）がある。483は脂返しがややすぼまっている。羅字挿入部分に毛筋巻の平行沈線が彫られている。484は銅板を1枚に合わせた吸口で、菊や草花が毛彫りされている。486は羅字部分が残っている。キセル編年<sup>(注1)</sup>によれば、483は20世紀、484～486は19・20世紀である。

簪（第94図、487、図版75） 2本脚で耳かき付きの銅製簪である。

小柄（第94図、488） 刀身を欠いている。鉄製の柄は風景を陰刻されている。

鎌（第94図、489） 鉄製の直刃鎌。柄の接合部は鍵状になっている。

注1 古葉松、2001「煙管」『国鉄JTB考古学研究事典』江川選路研究会 編著



第92図 遺物実測図 (1/3)

A地区 包含層

A 2地区(476) A 3地区(470・472・474・475) A 5地区(469) A 6地区(473) A 8地区(471)

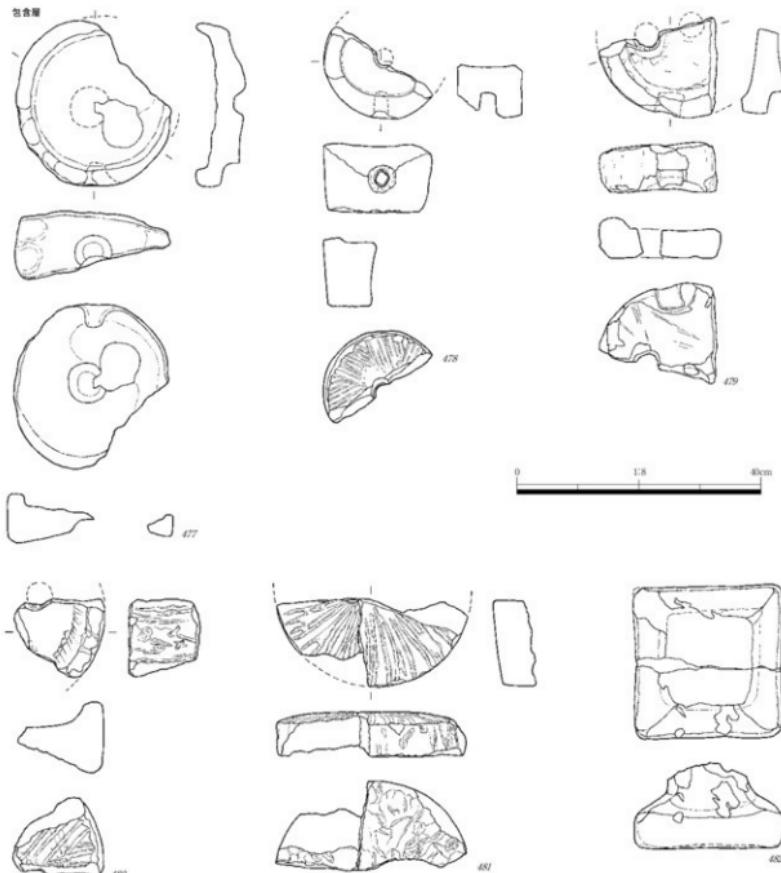
## 釘 (第94図, 490)

頭部を直角に折り曲げた扁平な鉄製の皆折釘である。この釘は水に関連する構築物に使用されている。江戸会津藩の木桶上水施設の皆折釘は、18世紀～明治30年まで使用されている<sup>(8)(10)</sup>ことから、本例も18世紀以降と考えられる。

## 古銭 (第94図, 492～501, 図版75)

明錢の永楽通寶 (492)・寛永通寶 (493～501) がある。寛永通寶は、元禄10年 (1697年) 以降に鋳造された新寛永である。一文銭以外に、明和6年 (1769年) 以降に鋳造された11波の四文銭 (499), 文久3年 (1863年) 以降に鋳造された草書体の文久永寶四文銭 (501) がある。

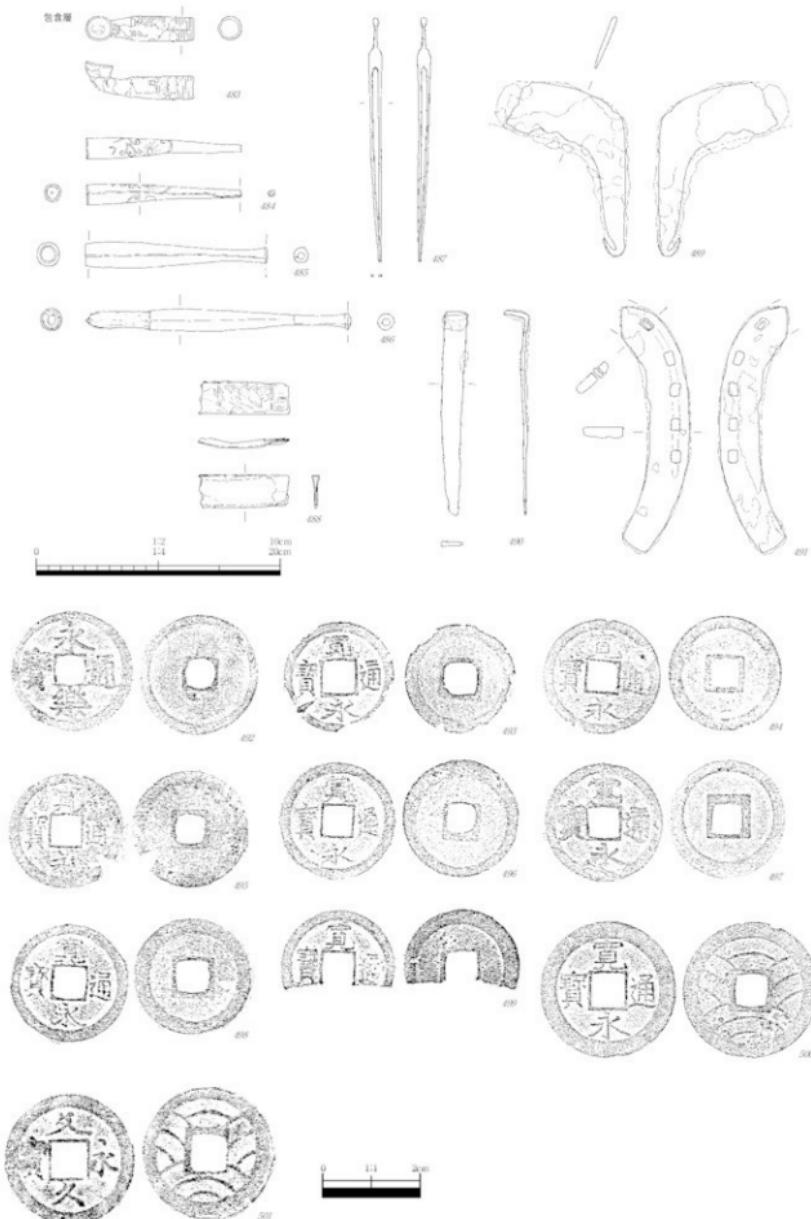
注15 村田高徳・山田康明他 1996『沙勿越路』沙勿越地区調査会



第93図 遺物実測図 (1/8)

A地区 包含層

A 3地区(477～481) A 5地区(482)



第94図 遺物実測図 (492~501 1/1, 487~489 1/4, 483~486, 488~490, 491 1/2)

A地区 包含層

A 1 地区(481~485・488・491)

A 2 地区(490・492~499)

A 3 地区(487・489・493~495)

A 4 地区(486・496・497・500・501)

A 5 地区(483)

A 6 地区(488)

A 7 地区(498)

### 3 B地区

B地区では、B3・4・5地区で中世の遺構、B1・3～6地区で近世～近代の遺構を検出した。

#### (1) 遺構と遺物

中世の遺構には、掘立柱建物2棟・土坑・溝があり、主にB3地区の北端からB4・5地区で検出した。遺構の埋土は黒褐色シルトもしくは粘質土が多く、植物遺体などを含むものもある。南北に延びる溝の方向はやや北東に傾くものが多い。

近世の遺構には土坑・溝があり、B2地区以外の地区で検出された。遺構の埋土は暗灰黄色シルトが多い。南北方向に延びる溝はやや北西に傾き、東西方向の溝はそれと直交するものが多く、中世の溝とは方向を異なる。B1・3地区のS D2222とS D2225によって挟まれている空間は道路かとも考えられるが、溝自体が浅く、明らかではない。また、B1地区S D2234とB6地区S D3705は近世から近代まで存続する溝と考えられる。

B1～4地区を南から北に蛇行する自然流路S D2201は、古代～中世まで存続していたと考えられるが、第Ⅶ章古代の遺構・遺物で一括して取り扱うこととする。

#### A 掘立柱建物

##### 14号掘立柱建物（S B14、第95図）

B4地区の南東隅に位置し、建物の南側がS B15と近接する2間×1間の南北棟建物で、桁行3.7m、梁行1.8m、平面積6.66m<sup>2</sup>と小型である。桁行の柱穴間隔は北から1.7m・2mとなる。建物の主軸はN-15°-Eである。柱穴は直径が約30～38cmで、深さは4～10cmといずれも浅く、埋土は褐灰色シルト質ロームで、柱痕跡はみられなかった。S P3038からは土師器と柱が出土している。中世の区画溝であるS D2806と軸方向を同じくするため、同時期のものかと考えられる。

##### 15号掘立柱建物（S B15、第95図）

B4地区の南東隅に位置し、建物の北側がS B14と近接する1間×1間の建物である。わずかに東西方向が長く、桁行2.0m、梁行1.6m、平面積3.2m<sup>2</sup>と小型で、建物の主軸はN-85°-Wである。柱穴は直径が約25～40cm、深さは6～8cmと浅く、S P3031のみが深さ18cmとなる。埋土はS B14の柱穴埋土と同じく褐灰色シルト質ロームで、柱痕跡はみられなかった。遺物は出土しなかったが、S B14とはほぼ同時期のものかと考えられる。

#### B 溝

##### 2210号溝（S D2210、第96・97・98図、図版98）

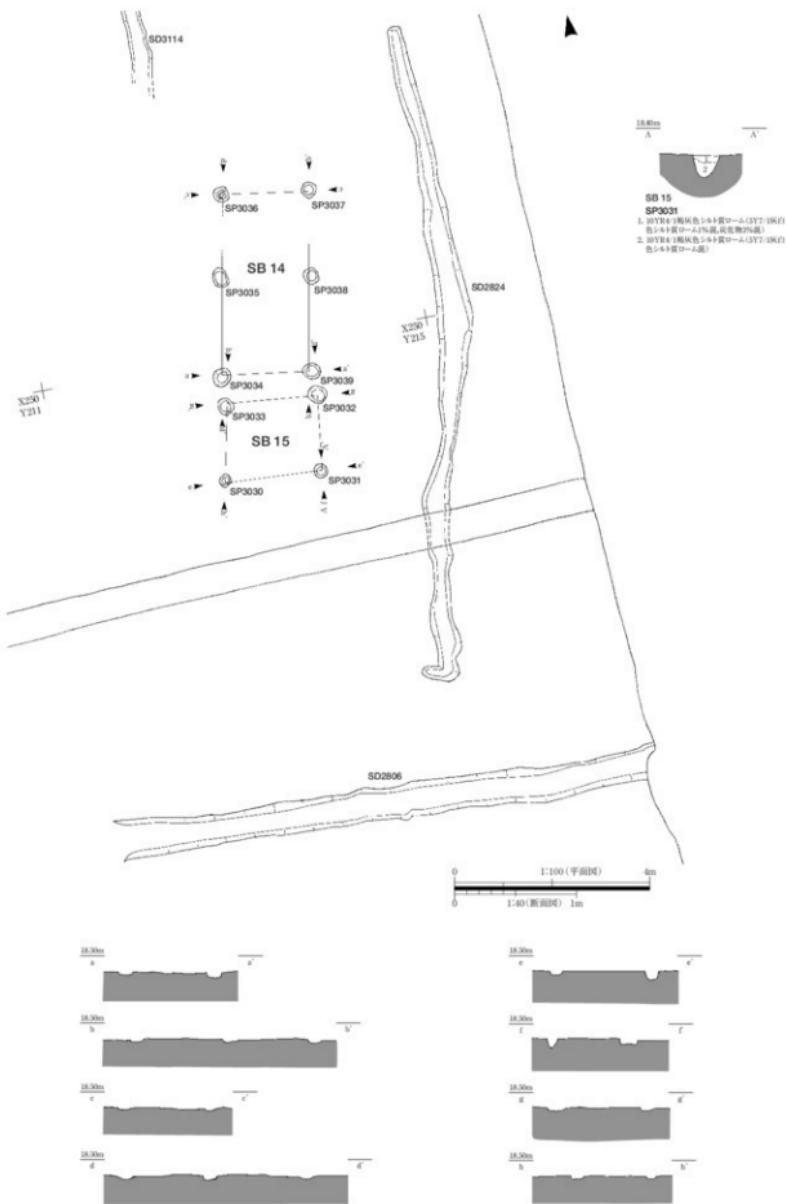
B1地区の中央部を東西方向に流れる近世の溝である。幅約90～110cm、深さ10～30cmで、断面は半円形をなし、埋土は暗灰黄色シルトと黒褐色粘土質ロームが堆積する。出土遺物には土師器・珠洲・越中瀬戸・肥前陶磁・瀬戸・加工材・鉄滓がある。

502は長さ50cmの竹を加工したもので、上下2箇所に2つずつの孔が穿たれている。また、片面には約11cm間隔に5箇所、それとは別の2箇所に材とは直角方向の線刻がある。

##### 2214号溝（S D2214、第96・98図、図版103）

B1地区の中央部を東西方向に流れる近世の溝である。S D2210と並行する。遺物は土製品がある。

503は建物（堂）をかたどった灯籠型土製品の屋根部分で、灯火具である。型押し成型で、頂部は宝珠を配し、これを中心に放射線状の隆起を作って6区画にする。底面には堂本体の剥離痕がある。



第95図 遺構実測図 (1/40・1/100)  
B 4 地区 SB 14・SB 15

## 2221号溝（S D2221, 第96・97・98図, 図版85）

B 1 地区の北西部を南北方向に流れる近世の溝である。S D2222と並行に流れ、S D2222の肩を切っている。南端では幅も広く、2筋に分かれるが、深さが浅くなる。幅約60cm、深さ10cmで、埋土は黄灰色シルト質ロームである。出土遺物には珠洲・越中瀬戸・瀬戸・肥前陶器・金属製品がある。

504は肥前陶器の陶胎染付の椀で、体部外面に草木文を描く。18世紀代のもの。

## 2222号溝（S D2222, 第96・97・98図, 図版81・85）

B 1 地区の北西部からB 3 地区の西部にかけて、S D2225・2227と並行に南北方向へ流れる近世の溝である。南側でS D2221に切られ、S D2227を切っている。このS D2227は途切れながら、S D2222の北端まで並行に延びている。幅約80~120cm、深さ8cm、断面は半円形を呈する。S D2225とは約7m離れて並行しており、道路状遺構の東側溝かとも考えられるが、不明である。出土遺物には土師器・須恵器・珠洲・瀬戸美濃・越中瀬戸・肥前陶磁がある。

505は肥前陶器の陶胎染付の椀。体部外面に鉄釉で草木文を描く。高台内にも施釉される。18世紀代のもの。506は瀬戸美濃の碗で、口縁部はやや外反し、口縁端部は丸くする。体部内外面に文様を描く。18世紀末のもの。

## 2225号溝（S D2225, 第96・97・98図, 図版81）

B 1 地区の北西部からB 3 地区の西部にかけて、S D2222と並行に南北方向へ流れる近世の溝である。南端でS D2228を切っている。幅約50~80cm、深さ16cm。道路状遺構の西側溝かとも考えられるが、不明である。出土遺物は土師器・中国陶磁器・珠洲・瀬戸・越中瀬戸・肥前陶磁・加工材がある。

507は京焼風の肥前陶器の椀で、やや高い高台をもつ。18世紀代のもの。508は用途不明の加工材で、端部を削って丸くしたもの。

## 2234号溝（S D2234, 第96・97・98図, 図版55・80~82・84・87）

B 1 地区の南西部で南北方向に流れる溝で、近世~近代まで存続する。幅約3.8m、深さ48cmで、溝の中には杭が約50cmの間隔で2列並行に打ち込まれていた。出土遺物には土師器・須恵器・青磁・瀬戸美濃・珠洲・京焼・土師質土器・越中瀬戸・肥前磁器・木製品・錢貨（寛永通寶）・金属製品がある。

509は瀬戸美濃の天目茶椀。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は直立し、口縁端部はわずかに外反する。体部内外面に鉄釉、外面下部はヘラ削りのまま露胎となる。断面には漆接ぎの跡がある。16世紀前半のもの。510は中国製青磁の碗。無文で口縁部が外反する。511は土師質土器の蓋。512・513は越中瀬戸。512は台の無い灯明皿で、体部内外面に鉄釉が施され、底部は回転糸切りを残す。513は椀で、体部内外面に鉄釉が施される。514は越中丸山の湯呑。体部外面上半と内面に長石釉を施し、体部下半はヘラ削り、幅の太い2条の沈線を巡らせる。515は染付磁器碗で、口縁部が外反する。体部外面に筆と岩、見込みの中心には帆かけ船を描く。産地不明である。516は瀬戸美濃の皿で、内面に梅、外面にも文様を描く。517は肥前磁器の菊花形の紅皿。518は産地不明の仏飯器で、外面に瑠璃釉、内面に透明釉を施す。519は小刀。刀身部分のみが残存しており、背は直で、刃は手元に向かって幅が細くなるが、欠損している。

## 2806号溝（S D2806, 第96・97図）

B 3 地区の北部からB 5 地区の南西部にある中世の溝である。B 3 地区内でほぼ直角に折れ曲がり、北端でS D3043に合流する。幅約60~90cm、深さ10~25cmで、断面は逆台形を呈する。出土遺物には中世土師器・珠洲・混入と考えられる肥前陶器がある。